
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

紀要

2008



2010年2月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



(表紙) 鹿田遺跡第19次調査で出土した
弥生時代後期の線刻土器 (縮尺約1/2)

(裏表紙) 鹿田遺跡第18次調査で出土した中世の木製品

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2008

2010年2月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

岡山大学病院の建物に囲まれた、わずか80㎡の狭い範囲で、弥生時代後期から古墳時代初頭の大量の土器とともに、これまでに例のない特徴的な遺構が発掘されました。高さ80cmほどに土を盛られた「方形高まり」がつくられており、その頂部には貝塚が形成され壺棺も置かれ、おびただしい量の土器や礫で覆われていました。土器のなかには祀りの場で使われる特別なものも含まれています。どのような祀りであったのかはまだよくわかっていませんが、海をのぞむ弥生時代の鹿田ムラの一角で盛大に祭祀が行われていたことが明らかになりました。この鹿田遺跡第19次調査の概要が本紀要に収録されていますのでご活用ください。

「方形高まり」に目を奪われがちな調査でしたが、ほかにも興味深い遺物が出土しています。それは、古代の蹄脚硯の破片で、動物の蹄を表現した硯の台脚の一部です。蹄脚硯は当時の硯のなかでは最高ランクに位置づけられる資料であり、地方においては中心的な役所などでのみ使用されていたと考えられています。小さな破片ですが、鹿田庄との関連で重要な意味をもつ資料です。

津島地区では、福利厚生施設東棟（ピオーネユニオン）の建設に伴う発掘調査で、平安時代の条里とかかわる溝を確認しています。岡山大学構内では条里関連の遺構について研究が進んでおり、新たな発見も続いています。これによって発掘区のなかにあるたった一筋の溝であっても、条里の体系のなかに位置づけていくことができるのです。この調査の成果は単独の報告書を構成するページ数に達しないため、正報告を本紀要に収録することとなりました。

2008年度には、第11回岡山大学キャンパス発掘成果展「水と循環」を開催しました。この地域に古くから暮らしてきた人々が、どのように水の恩恵を受け、水と格闘してきたかを、考古資料だけでなく自然科学的視点もふまえながら跡づけてみようという新しい挑戦でした。大地の中に残された過去の人びとの営みを通じて、現代の社会を見つめなおし、未来を展望していく足掛かりにできればと願ったしだいです。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長（理事）

北 尾 善 信

副センター長（大学院社会文化科学研究科教授）

新 納 泉

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008

目 次

第1章 津島岡大遺跡の調査研究

- 第1節 発掘調査報告……………(岩崎志保) 1
 - 1. 津島岡大遺跡第31次調査(福利厚生施設棟新営)…………… 1
- 第2節 立会調査の概要……………(池田 晋) 17
 - 1. 調査の実施状況…………… 17
 - 2. 新技術研究センター公共下水道接続工事…………… 17
 - 3. 教育学部体育館他耐震改修工事(動物室)…………… 20
 - 4. 大学会館他改修工事(一般教育講義棟ガス設備)…………… 23
 - 5. その他の調査地点…………… 25

第2章 鹿田遺跡の調査研究

- 第1節 発掘調査の概要……………(野崎貴博) 31
 - 1. 鹿田遺跡第19次調査(歯学部渡り廊下新営)…………… 31
- 第2節 立会調査の概要……………(池田) 36
 - 1. 調査の実施状況…………… 36
 - 2. 基幹整備(西病棟とりこわし他)工事…………… 36
 - 3. 基礎医学棟一部とりこわしに伴う支障ガス配管移設工事…………… 37

第3章 その他の地区の調査研究

- 第1節 試掘・確認調査の概要……………(岩崎) 40
 - 1. 教育学部附属中学校校舎建て替えに伴う試掘・確認調査…………… 40

第4章 調査資料の整理・研究および公開・活用

- 第1節 調査資料の整理・研究……………(池田) 43
 - 1. 調査資料の整理…………… 43
 - 2. 調査資料の自然科学的分析…………… 43
 - 3. 調査資料の保存処理…………… 43
- 第2節 調査成果の公開・活用…………… 44
 - 1. 公開・展示……………(山本悦世) 44
 - 2. 資料・施設等の利活用……………(池田) 46
- 第3節 2008年度調査研究員の個別研究活動…………… 48
 - 1. 科学研究費採択状況…………… 48
 - 2. 論文・資料報告…………… 49
 - 3. 研究発表など…………… 49
 - 4. 講演など…………… 49
 - 5. 資料収集・実態調査…………… 49

第5章 2008年度における調査・研究のまとめ	(池田) 50
-------------------------------	---------

付 編

1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程	51
2. 2008年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織	53
3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項	53

挿 図 目 次

第1章

図1 調査地点の位置	2
図2 土層断面図	4
図3 検出遺構全体図	5
図4 縄文時代検出遺構全体図	5
図5 ピット断面図	6
図6 弥生時代畦畔・出土遺物	6
図7 古代検出遺構全体図	7
図8 溝1平面図	7
図9 溝1～4平・断面図	7
図10 溝1～4断面図	8
図11 溝3・4内検出ピット平・断面図	9
図12 中世検出遺構全体図	9
図13 近世検出遺構全体図	10
図14 出土遺物1：土器	11
図15 出土遺物2：土製品・石器	12
図16 出土遺物3：石器	13
図17 第6・9次調査地点との位置関係	14
図18 出土遺物写真	15
図19 調査地点の位置	17
図20 調査地点の断面位置	17
図21 断面図	19
図22 調査地点の位置	21
図23 断面図	21
図24 14層上面水田畦畔	22
図25 検出遺構平面図	22
図26 調査地点の位置	23
図27 断面図	24
図28 その他の調査地点の断面柱状図	25

図29 津島地区全体図	27
図30 2008年度の調査地点【1】 －津島地区－	29

第2章

図31 調査地点の位置	32
図32 断面の位置	32
図33 土層断面・柱状図	32
図34 弥生時代遺構配置模式図	33
図35 貝塚検出状況	34
図36 壺棺出土状況	34
図37 古墳時代後期～近世の遺構	35
図38 調査地点の位置	36
図39 各調査地点の断面柱状図	37
図40 調査地点の位置	38
図41 検出遺構平・断面図	38
図42 2008年度の調査地点【2】 －鹿田地区－	39

第3章

図43 調査地点の位置	40
図44 土層断面図	41
図45 2008年度の調査地点【3】 －東山地区－	42

第4章

図46 「水と循環」広報ポスター	44
図47 第11回発掘成果展「水と循環」 会場風景	45
図48 博物館実習報告会風景	46
図49 職場体験風景	47

表 目 次

表 1	2008年度津島地区調査一覧……………	26	表 4	第 8 期のPEG保存処理工程……………	44
表 2	2008年度鹿田地区調査一覧……………	38	表 5	既往のPEG保存処理一覧……………	44
表 3	2008年度東山地区調査一覧……………	42	表 6	2009年度非常勤講師への委嘱依頼内容……	47

付 表 ・ 付 図

付表 1	1982年度以前の構内主要調査（1980 ～ 1982年度）……………	55
付表 2	2007年度以前の構内主要調査（1983 ～ 2007年度）……………	55
付表 3	埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要……………	63
付表 4	埋蔵文化財調査室刊行物……………	64
付表 5	埋蔵文化財調査研究センター刊行物……………	65
付図 1	2007年度までの調査地点【1】－津島地区－……………	67
付図 2	2007年度までの調査地点【2】－鹿田地区－……………	69
付図 3	2007年度までの調査地点【3】－三朝地区－……………	70
付図 4	2007年度までの調査地点【4】－東山地区－……………	70
付図 5	2007年度までの調査地点【5】－倉敷地区－……………	70

例 言

1. 本紀要は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学構内において2008年4月1日から2009年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果およびセンターの活動についてまとめたものである。
2. 本紀要において報告している津島岡大遺跡は岡山市北区津島中一丁目1-1、二丁目1-1、三丁目1-1、鹿田遺跡は岡山市北区鹿田町二丁目5-1に所在する。
3. 本文は、池田晋・岩崎志保・野崎貴博・山本悦世が分担執筆し、執筆者名は目次および文末に記した。図面の作成および遺物の写真撮影には井上佐智・山口雄治の協力を得た。また、石器石材の同定を鈴木茂之氏（岡山大学大学院自然科学研究科（理学系））に依頼し、ご教示いただいた。
4. 編集は新納泉副センター長・山本悦世調査研究室長の指導のもとに池田が担当した。
5. 本書に掲載した調査の記録・出土遺物等はすべて当センターで保管している。

凡 例

1. 大学構内の埋蔵文化財の調査にあたっては、平成14（2002）年4月1日から施行された「測量法及び水路業務法の一部を改正する法律」に基づき、世界測地系を採用し、構内座標を次のように定めている。
 - 1）津島地区では、国土座標第Ⅴ座標系の座標北を基軸とし、 $(X, Y) = (-144,156.4617\text{m}, -37,246.7496\text{m})$ を起点とする構内座標を設定している。構内座標の内部は一辺50mの方格で分割した区画を用いている。
 - 2）鹿田地区では、国土座標第Ⅴ座標系の座標北より東に15°振り出した座標軸を基軸とし、 $(X, Y) = (-149,456.3718\text{m}, -37,646.7700\text{m})$ を起点とする構内座標を設定している。構内座標の内部は一辺5mの方格による地区割りをを用いている。
 - 3）挿図中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は国土座標系の座標北を、その他は磁北を用いている。
2. 岡山大学構内の遺跡名は、周知の遺跡の場合はそのまま名称を踏襲する。他の地区の調査地点は任意の名称で仮称する。
3. 調査名称は、「発掘調査」に分類したものについては、遺跡ごとに調査順に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」、「立会調査」に分類したものについては、任意の名称を用いる。発掘調査のうち、小規模で確認調査から連続して調査したものは、「試掘・確認調査」に分類する。
4. 調査一覧表に記載した所属部局は、原則として各部局の頭文字を略号として用いている。
5. 付表2に記載した既往の調査一覧については、掘削深度が中世層以下に達した調査を対象とし、その他については除外した。
6. 本文などで使用している調査番号は表と一致する。
7. 土器の遺物番号は、挿図別に付し、その他石器等には通し番号を付した。石器にはS、土製品にはTを頭に付して区別する。なお、出土遺物写真（図18）の番号は、本文中の遺物番号に一致する。
8. 遺物法量の計測値と観察所見は観察表を作成し、実測図と組み合わせて掲載した。観察表の表記基準は以下の通りである。
 - ①土器胎土の表記基準
微砂：径0.5mm未満、細砂：径0.5～1mm未満、粗砂：径1～2mm未満、細礫：径2mm以上
 - ②色調は、欄中に表記している場合は、内面・外面の順で示す。
 - ③遺物法量
土製品・石器については、破損等により本来の法量が失われている資料の残存の実測値を（ ）を付して示す。
9. 挿図中では鉄分をFe、マンガンをMnと表記する。
10. 本紀要に掲載の地形図（図29）は、岡山市域図を複写したものである。

第1章 津島岡大遺跡の研究

第1節 発掘調査報告

2008年度は津島地区で1件の発掘調査を実施した。小規模な発掘調査については紀要において正式報告を行っているが、今回報告の第31次調査についても遺構・遺物などの全体量を考慮し、本書に正式報告を掲載する。

1. 津島岡大遺跡第31次調査（福利厚生施設東棟 津島AX04区）

a. 調査に至る経緯と調査の経過

(1) 調査に至る経緯

2008年度に岡山大学津島地区に岡山大学福利厚生施設東棟の新設が計画された。事業主体は岡山大学生生活協同組合で、岡山大学が大学構内の土地を貸与し、新店舗を建設するものである。このように事業主体は大学以外であったが、工事に伴う埋蔵文化財の対応については建設場所が大学構内であること、これまでの津島岡大遺跡の発掘調査との関連性を重視し、岡山市と協議のうえ埋蔵文化財調査研究センターが調査を担当することとなった。

新営予定地には、以前、工学部校舎の建設計画がもちあがったことがあり、1988年度に試掘調査を実施している¹⁾。その成果では、縄文時代後期～近世の各時期の土層が確認され、特に縄文時代後期には微高地状の地形が予想されていた。その成果を受け、発掘調査を実施することとした。調査面積は212㎡で、調査期間は2008年6月17日～8月22日を予定し、調査員2名が担当することとなった。

(2) 調査体制

調査主体 岡山大学生生活協同組合（理事長 保田立二）

調査担当 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（センター長 北尾善信）

調査研究員 （主任） 岩崎志保（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 助教）

光本 順（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 助教）

運営委員会（2008・2009年度）

【委員】

財務・施設担当理事（センター長）	北尾善信	大学院自然科学研究科教授	柴田次夫
大学院社会文化科学研究科教授（副センター長）	新納 泉	大学院環境学研究科教授（調査研究専門委員）	沖 陽子
大学院社会文化科学研究科教授	久野修義	埋蔵文化財調査研究センター教授（調査研究室長）	山本悦世
大学院医歯薬学研究科教授	大塚愛二	施設企画部長	山下隆幸

(3) 調査の経過

発掘調査に先立ち、6月11日～13日の3日間、近代～現代の造成土および近代の耕作土を重機により除去した。その際、旧陸軍建物の基礎を確認した。また6月11日の造成土除去中に旧日本陸軍の弾頭と思われる金属1点を採集した。この金属については同日夕、岡山西警察署生活安全課により回収され、後日、自衛隊三軒屋駐屯地において処分された。

発掘調査は6月17日より開始した。近世層は二面に分けて調査をしたが、各面で南北方向の耕作痕を検出した。なお近世層上面に堆積する近代層については南北方向の畝面を断面で確認した。6月末には中世面で同じく南北

b. 調査の概要

津島岡大遺跡は、岡山平野の北半に位置し、主要河川の一つである旭川の西岸にあたる。北側には半田山・ダイミ山・烏山といった標高150m前後の山塊が東西に連なっている。キャンパスの北東角には、朝寝鼻貝塚（縄文時代後期）の立地する半田山の山裾が迫っている。

T：津島岡大遺跡
(数字は調査次を示す)

80mに同第9次調査地点³⁾(工学部生体機能応用工学科棟：現6号館東半)、同第6次調査地点⁴⁾(生物応用工学科棟：現6号館西半)、北西約100mの地点に同第7次調査地点(情報工学科棟：現4号館)、さらに西側約80mには同第28次調査地点⁵⁾(自然科学系総合研究棟)が位置する。こうした調査から特に縄文時代後期については、津島キャンパスの北東部、第17次調査地点を中心とした地点が居住域にあたっていることが判明している。また条里の坪境の溝にあたる東西方向の溝が複数の調査地点で確認されるなど、古代の資料の蓄積も進んでいる。

本調査地点で確認された土層は14層に大別される。以下に各層ごとに記述する。

1層 1906～1907年の旧日本陸軍による造成と、その後岡山大学の敷地として利用されるようになってから形成された造成土である。上面は標高4.8～4.9mである。調査区北壁には標高4.55mを上面とする赤レンガと砂利等で構成された旧日本陸軍の建物基礎が残っている。基礎の高さは15～20cmが残っている。旧日本陸軍による造成は近代層から60cmの厚さで確認される。

2層 青灰色を呈する粘質土で近代の耕作土である。上面の標高は3.7mである。本層上面には南北方向の畝面が

形成されている。染付碗片1点が出土している。

3層 近世の耕作土層と考えられる。砂質で、鉄分・マンガンを多く含み、その沈着面を境として3a～3c層に分層を行っている。

3a層 黄灰色砂質土である。上面の標高は3.64mで、厚さ5cmを測る。上面で南北方向の耕作痕を検出した。備前焼皿片・施釉陶器・染付片数点が出土した。

3b層 淡灰黄色弱粘質土である。上面の標高は3.59mである。厚さ5cmを測る。上面で南北方向の耕作痕を検出した。染付片・土師質土器片数点が出土した。

3c層 淡灰黄色砂質土である。上面の標高は3.5mである。厚さ10cmを測る。土師質土器鍋片・碗小片、白磁小片が出土した。

4層 淡黄灰色粘質土である。鉄分・マンガンを含む。上面の標高は3.4mで、層厚は10cmを測る。上面で南北方向の耕作痕を検出した。出土遺物には土師質土器杯・皿・碗・竈片、須恵質土器大甕片、青磁片、土錘などがある。時期としては中世後半と考えられる。

5層 黄灰色粘質土を呈する中世の耕作土である。上面の標高は西端で3.35m～東端で3.42mである。土師質土器碗片・土師質竈片・須恵質土器小片が出土している。層厚は10～15cmを測る。

6層 暗黄灰色粘質土で、鉄分をわずかに含む。上面の標高は3.2～3.28mである。土師器片、須恵器杯底部片が出土しており、古代の耕作土と考えられる。本層で南北方向の溝3条（溝2～4）、さらに溝1条（溝1）を確認した。本調査地点の地形は6層上面ではほぼ水平化している。

7層 黄褐色砂質土で、鉄分・マンガンを顕著に含む。上面の標高3.16～3.2mである。土師器の小片がわずかに数点出土した。古墳時代の土層と考えられる。

8層 灰黄色を呈する砂質土層で、上面の標高は2.9～3.12mである。層厚は調査区の西端で10cm、東端で30cmを測る。弥生時代前期まで見られる南東が低い地形の傾斜が埋まったことがわかる。層厚が増す04～40ライン以东では8a・8b層に分層した。弥生土器、縄文土器小片がわずかに10数点出土した。土器は小片のうえ、ローリングを受けているため確定はできないが、弥生時代中期～後期の時期と考えている。

8a層 灰黄色砂質土で、上面の標高は2.9～3.12mである。

8b層 暗灰黄色砂質土で、粗砂を顕著に含み、水の影響を受けているとみられる。上面の標高は2.95mである。

9層 暗灰褐色砂質土で、上面の標高は東端で2.85m、西端で3.0mである。上面の地形は西が高く、南東に向かって傾斜している。本層では畦畔を検出している。時期は弥生時代前期と考えられる。本層から弥生前期土器甕の胴部片のほか、突帯文土器を含む土器小片数点が出土している。

10層 黒褐色粘質土で、鉄分・マンガンを含む。上面の標高は東端で2.75m、西端で2.95～3.0mである。津島地区一帯にみられるいわゆる「黒色土」層にあたり、その形成時期としては弥生時代早期～前期と考えられている。弥生前期の土器小片数点、縄文時代後期の土器片、コンテナ（約27ℓ）1/2箱が出土した。

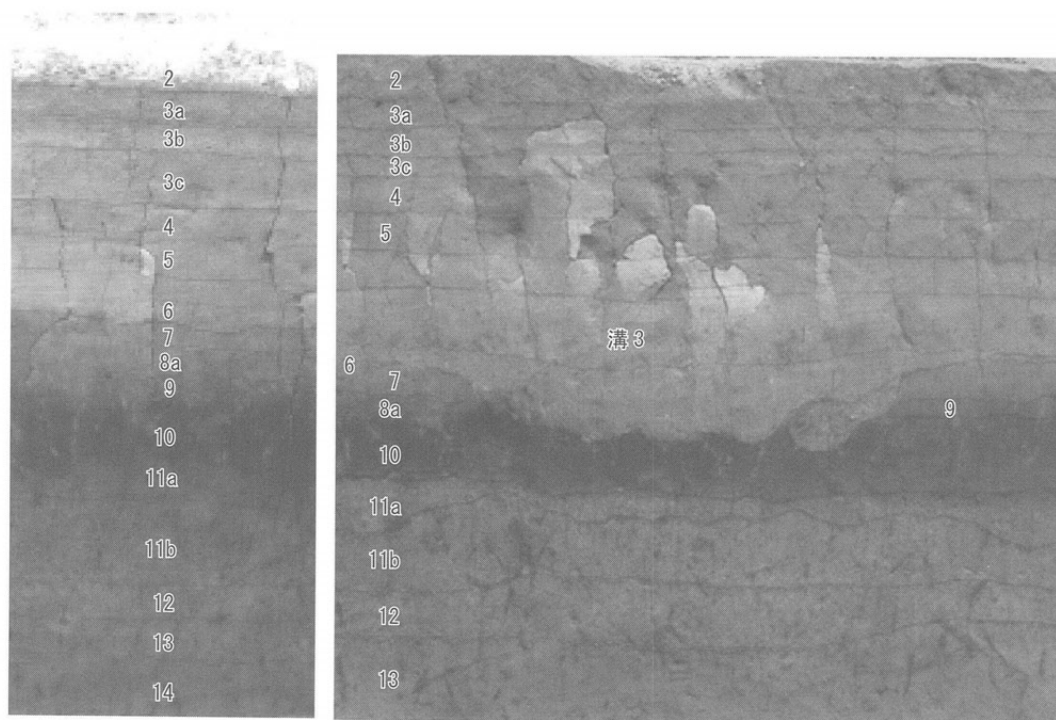
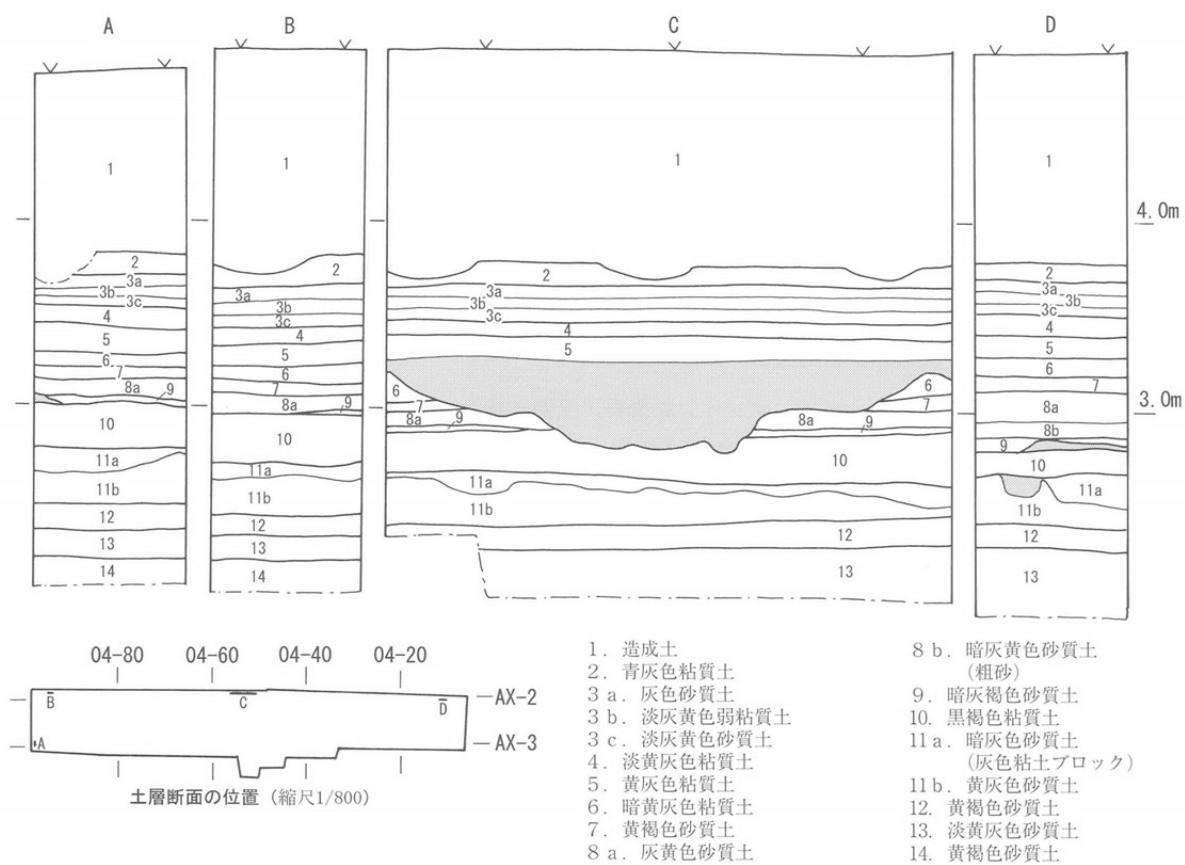
11層 黄灰色を呈する砂質土層で、縄文時代後期と考えられる。土質から2層に細分した。

11a層 暗灰色砂質土で、鉄分、灰色粘土ブロックを含む。場合によっては遺構ととらえられるような下面ラインをみせるが、不規則な状況であり、遺構とはできない。上面の標高は東端で2.54m、西端2.78mで、層厚は10～15cmを測る。縄文時代後期前半～中葉の土器がコンテナ（約27ℓ）約1/2箱出土した。

11b層 黄灰色を呈する砂質土である。上面の標高は東端で2.5m、西端で2.6mで、層厚は15～20cmである。縄文時代後期前半～中葉の土器片が、コンテナ（約27ℓ）1/4箱出土した。

12層 黄褐色砂質土で、鉄分を顕著に含む。上面の標高2.36～2.49mで、層厚10～15cmを測る。上面で縄文時代後期の土器片5点が出土しているが、縄文時代後期の基盤層と考えられる。

13層 淡黄灰色を呈する砂質土で、無遺物層である。上面の標高2.32～2.36mである。



左：調査区西壁 右：調査区北壁・溝3付近

図2 土層断面図 (縮尺 1/40)

14層 黄褐色砂質土である。無遺物層である。標高2.0～2.2mを測り、南に向かうにつれ、次第に粘性を増す。

c. 遺構・遺物

(1) 概要 (図3)

縄文時代後期のピット状凹み30基、弥生時代前期の畦畔一面、古代（平安時代）の溝4条および中世・近世の各面で耕作痕を検出した（図3）。

縄文時代後期～弥生時代前期には、西から南東に向かい若干傾斜する地形を呈する。縄文時代後期面でピット状の凹み30基を検出した。これらは標高2.3～2.5mで検出されたものである。弥生時代前期の面では水田畦畔1面を検出した。地形の傾斜に沿った北東－南西方向の畦畔の残りがよく、小区画の水田経営が窺える。次いで古代面では南北方向の溝4条を検出した。調査区の中央を南北に走向する溝で、底面にピット列を伴っているものがある。古代の層上面において、本調査区の地形はほぼ平坦化する。中世・近世ではそれぞれ南北方向の耕作痕を検出し、近代に至るまで耕作地としての利用がなされたことが窺える。

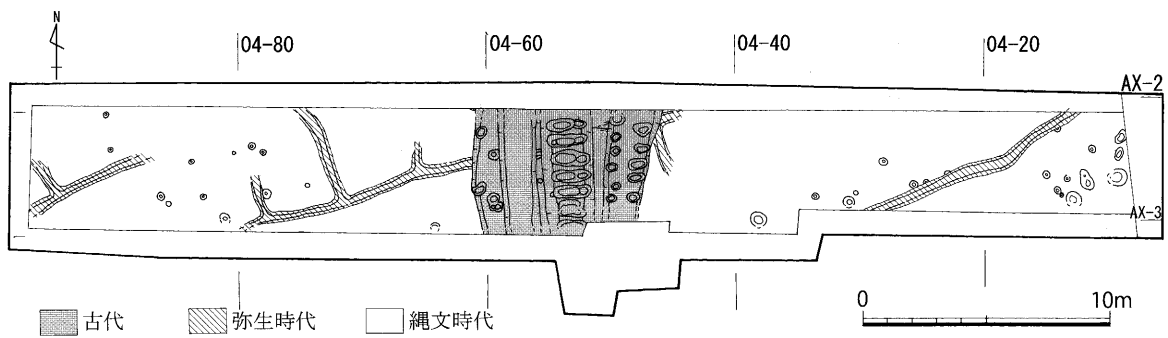


図3 検出遺構全体図（縮尺 1/300）

(2) 縄文時代 (図4・5)

11b層、標高2.3m～2.5mでピット状の凹み30基を検出した。本調査地点の北東約150mの第17・22次調査地点では同時期の標高は3.0mと微高地状を呈している。一方本調査地点では2.5m以下と地形的に低いところにあたっている。その中でピット状凹みは、調査区の南西側と、南東に向かって傾斜する部分に多く検出されている。ピット状凹みは平面が円形～楕円形を呈し、径25～90cm、深さ5～20cmを測る。いずれも数値はばらつきがあり、配列に規則性はない。遺物には縄文時代後期の土器小片がわずかにみられる。断面形は浅い皿状を呈しており、柱穴状を呈するものはない（図5）。これらのピット状凹みは2群に分けられる。埋土が暗灰色を主体とする粘質土で、炭化物・焼土を少量含むa群（7基）、暗灰色～暗黄灰色を呈する粘質土で、包含物が認められないb

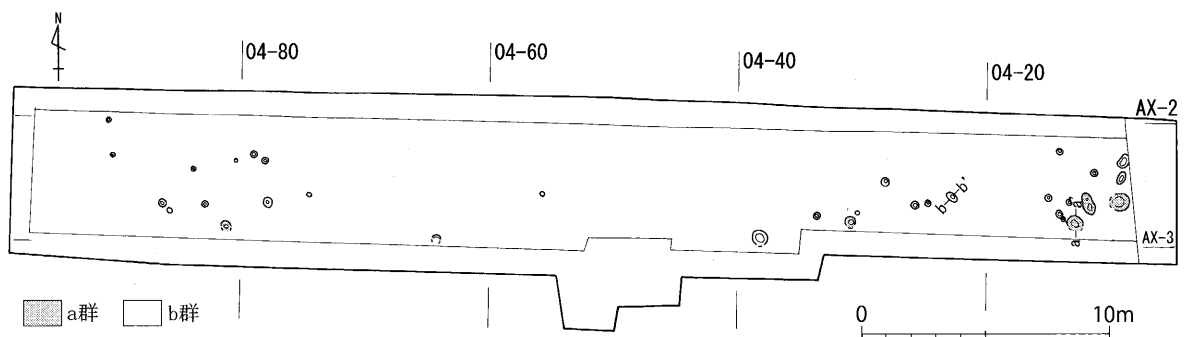


図4 縄文時代検出遺構全体図（縮尺 1/300）

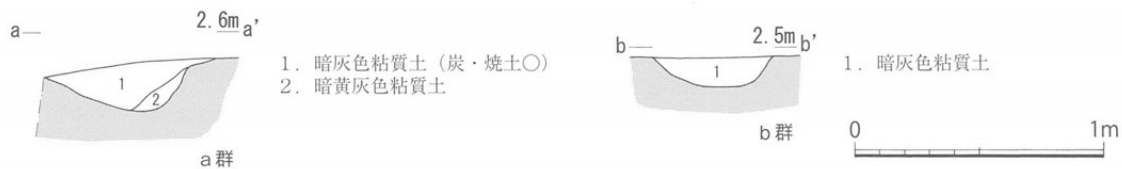


図5 ピット断面図 (縮尺 1/30)

群 (23基) とがある。これらのピット状凹みについては柱穴ではないが、炭化物等を含む a 群は何らかの遺構の可能性を残す。

また、11a層は遺構ととらえられるような下面ラインを示しているが、これを遺構としてまとめることはできない。この層の形成過程については当時の環境も含め検討する必要がある。

全体として本調査地点の縄文時代後期面の人間活動痕跡は希薄であり、集落の縁辺部の状況を示す。

(3) 弥生時代 (図6)

水田畦畔

9層上面で水田畦畔を検出した (図6)。南西が高く標高3.0m、北東が低く標高2.7mを測る調査地点の地形に併せて、等高線に沿った北東—南西方向の畦畔が良好に残っていた。畦畔の幅30cm、高さ3～4cmを測る。これに直交する方向の畦畔は幅15～20cm、高さ2cmが残っている。畦畔を形成する土層は、やや粘性を帯びる暗灰褐色土である。検出時には畦畔の脇にわずかに砂の堆積が確認された。

本調査区内では一筆の全形がわかるものはないが、南北方向の区割りは3.5～4m、東西方向の区割りの幅は2.6～3.0mと確認でき、小規模な区割りとなっていることが窺える。出土遺物は極めて少なく、9層中から弥生時代前期の土器小片1片と弥生時代早期の突帯文土器口縁部片2点 (図6-1・2) が出土している。畦畔の時期は弥生時代前期と考えている。

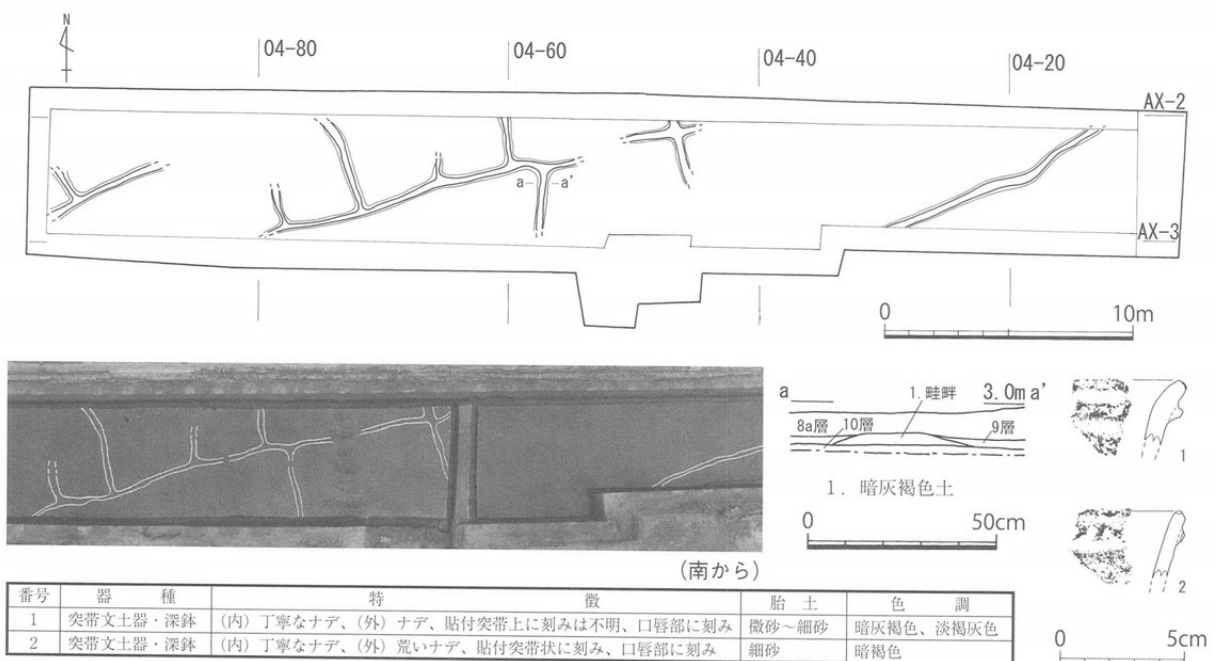


図6 弥生時代畦畔・出土遺物 (縮尺 1/300、1/20、1/3)

(4) 古代 (図7～11)

調査区の中央を南北方向に走行する溝4条を検出した (図7)。6層上面で検出した3条 (溝2～4) と7層で検出した1条 (溝1) である。これらの溝はA層によって覆われており (図10)、A層を除去した段階で溝2～4を検出した。

溝1 (図8～10)

04-60ラインに沿うように南北に走向する。上位に溝2が重複しており、東側は溝3により切られている。また7層で検出した溝であるが、本来は6層上面からの掘り込みであることを断面から確認している。検出面の標高は3.1m、底面の標高は3.05mで、深さ0.05mである。6層上面からの深さは0.15mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰白色砂質土で、細砂～粗砂を顕著に含む。底面にはピットがある。出土遺物は土師器小片がわずかに1片認められた。調査区南壁で確認した溝1の西側の肩は04-60ラインの西2mの位置である。一方東側の

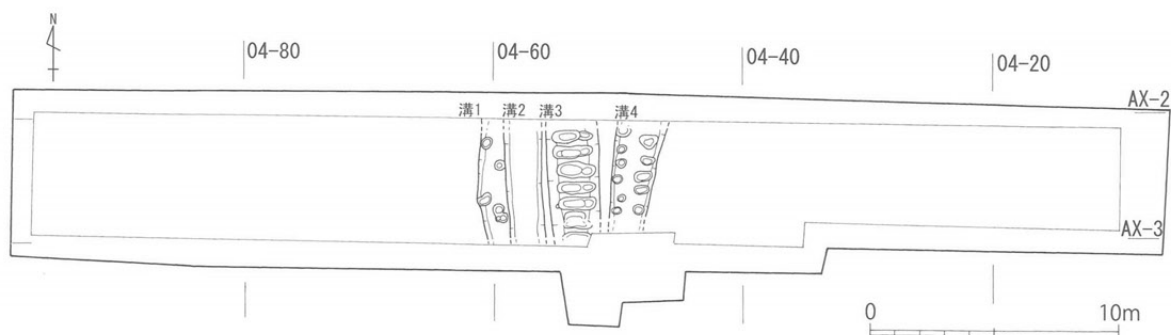


図7 古代検出遺構全体図 (縮尺 1/300)

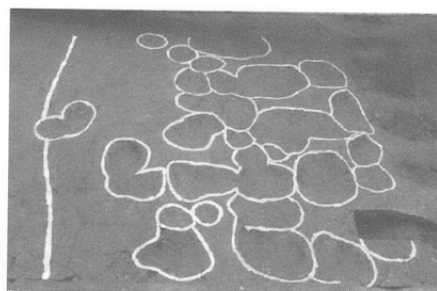
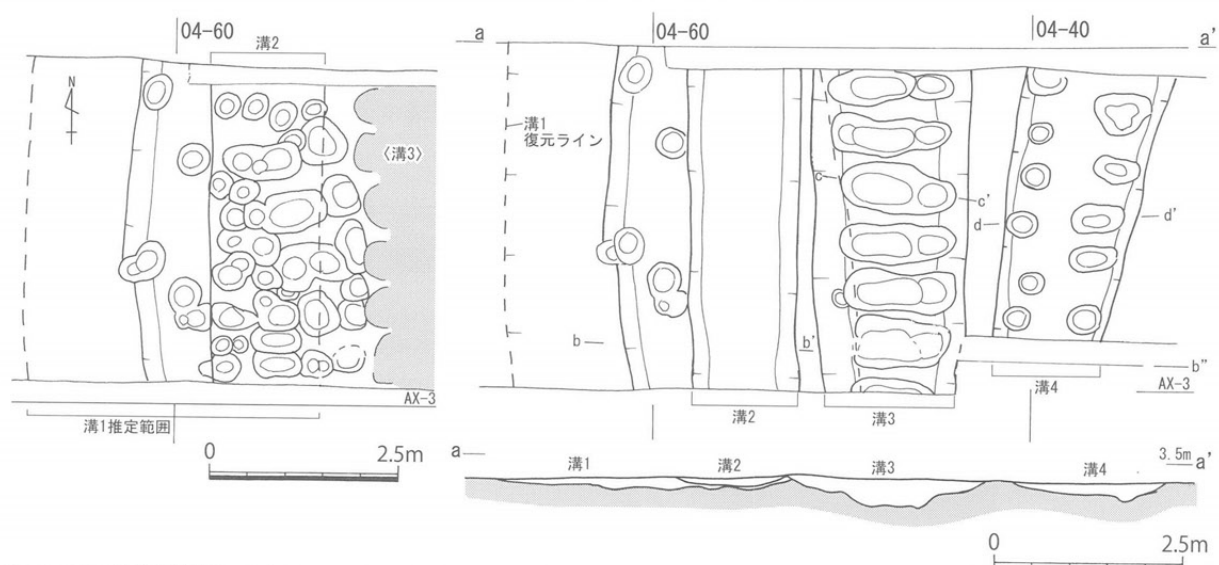


図8 溝1平面図 (縮尺 1/100) (南から)

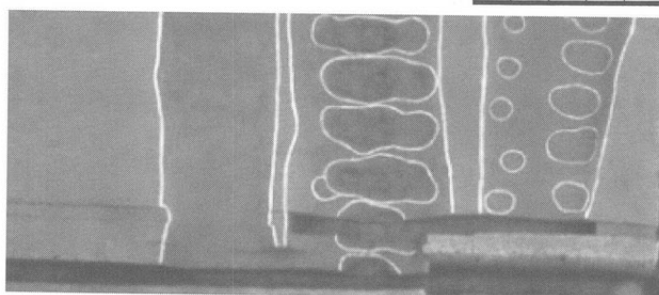


図9 溝2～4平・断面図 (縮尺 1/100) (南から)

肩については溝3によって切られているため、わからないが、断面観察等からもそれほど東には広がらないと考えられる。溝1の幅については4.5m強と推定される(図8)。

本溝の底面では39基のピットを検出した。ピットは径30~40cmの円形~楕円形を呈し、溝底面からの深さ5~8cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土はいずれも灰白色砂質土で、溝の埋土との差異はない。平面形及び深さの数値はばらついており、配置に規則性はみられないが、溝1の推定範囲の中で、東半部分に集中的にピットが検出されていることから溝2の位置との関連が注意される。また、こうしたピットの集中する溝については、道路の下部構造の可能性を考えている。

溝2 (図9・10)

溝1の東側上部に重複する、南北方向に走向する溝である。6層上面で検出したもので、検出面の標高は3.2m、底面の標高は3.05mを測る。幅は1.6~1.8m、深さは0.15mである。断面形は皿状を呈する。底面にピットは確認されなかった。埋土は2層に分けられるが非常に近似しており、淡灰色を呈する砂質土と、その下層にやや粘性のある淡灰色砂質土が堆積する。出土遺物は土師器の小片4片が出土している。

ピットは調査時には確認していないが、溝1で検出したピット群の集中分布範囲が溝2の範囲とほぼ重なる点から、これらの中に溝2に関係するピットが混在する可能性を残す。

溝3 (図9・10)

6層上面で検出した。溝2の東側をほぼ南北方向に走る。検出面の標高は3.2m、底面の標高は2.85mを測る。幅2.9m、深さ0.2~0.3mである。断面形は深い皿形を呈する。埋土は灰白色の砂質土を主体とするが、粘性の強弱によって3分され、3層にはやや粘性を帯びた淡灰白色土が堆積する。

本溝の底面にはピット列が伴っており、南北方向に7列を確認した。ピット列は東西に長い楕円形状(蘭形状)の平面形を呈し、その規模は東西幅2.3m、南北長0.4~0.5mを測る。楕円形状ピット内には、大小2基のピットが東西に並んで確認された。西側寄りに東西幅1.2m、南北長0.4m、溝底面からの深さ0.1~0.15mの大形ピットがある。東側の小型ピットは径40cm、溝底面からの深さ0.05mの円形を呈するピットがある。大形ピットの底面の

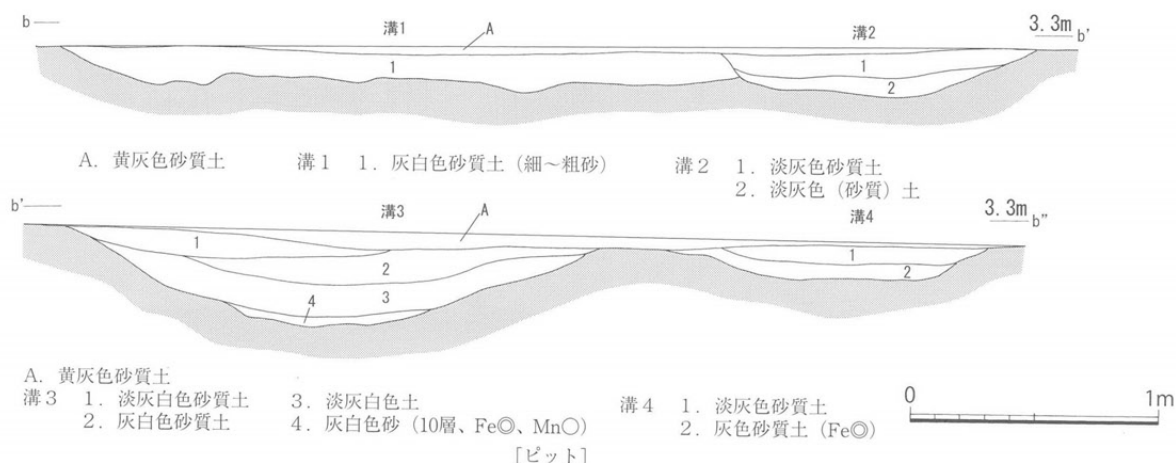


図10 溝1~4断面図(縮尺 1/30)

(南から)

標高は2.8m、小形ピットの底面の標高は2.9mを測る。これらのピット内には鉄分・マンガンを多く含む灰白色砂が堆積する。その中には下層の黒色土（10層）を巻き込むように含んでおり、底面にマンガンが顕著に沈着している。

本溝からは須恵器杯の口縁部小片および土師器の小片が出土している。

溝3は深い皿形の断面形を呈する点および底面に藕形と称される長楕円形のピットを伴っている点で、溝2・4と異なる特徴が注目される。溝1と同様、溝3の構造の特徴からこれを道路の下部構造とみることができる。

溝4（図9～11）

6層上面で検出した。04-50ラインに沿うようにほぼ南北方向に走向する。検出面の標高は3.2m、底面の標高は3.05mである。幅は調査区北端で2.0m、南端で1.8m、深さは0.15mを測る。断面形は皿形を呈する。溝の埋土は2層に分けられ、上層は淡灰色砂質土、下層は鉄分を多く含む灰色砂質土が堆積する。水分の影響が考えられる。

溝4底面の両側には浅い柱穴状ピット列が2列伴っている。東側のピットは長径50～70cm、短径40cmの東西に長い楕円形で、深さ8cmを測る。底面の標高は2.98mを測り、調査区内で5基を確認した。西側のピットは径40cmの円形で、深さ5cmを測る。底面の標高は3.0mを測り、6基を検出した。東西のピットは組み合っていない。ピットの埋土はいずれも灰色砂質土である。出土遺物には土師器小片10片と、7世紀前半の須恵器高杯の脚部片1点がピット底面から出土している。

溝4の形状は、幅・断面形において溝2との共通点を窺わせる。底面のピットの有無が異なるが、前述したように溝2にもピットが伴っていた可能性はある。

断面形とピットの密度等の違いから、溝2・4と溝3には機能の違いがあったことも想定される。

溝1～4の掘削時期は現状では古墳時代まで遡る材料はなく、平安時代に形成されたものと考えられる。下限については最終的にA層によって覆われることから、中世前半以前に求められる。道路状遺構の可能性のあるこれらの遺構群の推移については、溝1の段階、溝2～4の段階、さらにA層の堆積段階が想定される。最初に構築された溝1ではピットが底面に凹凸が認められる程度として検出されているが、次の段階では藕形ピット列を伴う溝（溝3）があり、溝1から溝3へとよりしっかりとした構造へと変わる。その後5層の堆積以前に溝1～4全体を覆うように残るA層の堆積がみられる。このことから現段階では確定できないものの、A層の堆積によって道路が整備しなおされたことが想定され中世前半にはその上部を大幅に削平されたことによって完全に消失したと考えられる。

(5) 中世・近世

4層上面で中世の耕作痕を、また3a層・3b層の各面で近世の耕作痕を検出した。

4層上面の耕作痕は、標高3.4mで検出した。南北方向の幅10

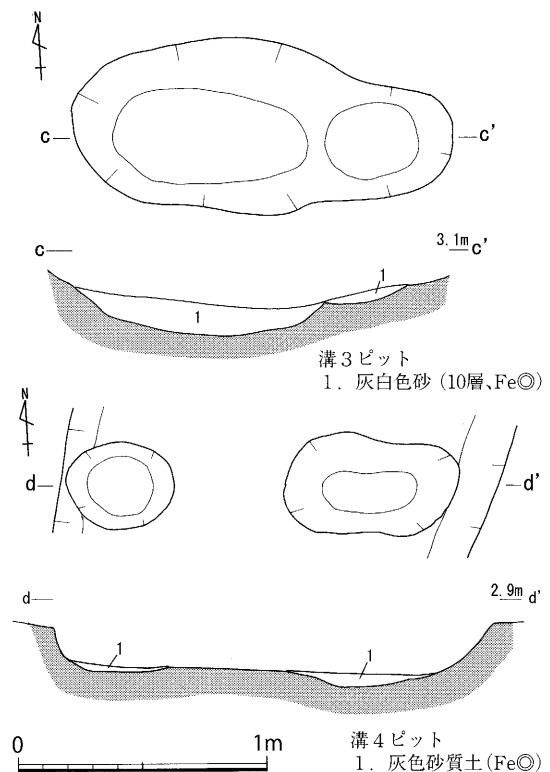


図11 溝3・4内検出ピット平・断面図（縮尺 1/30）

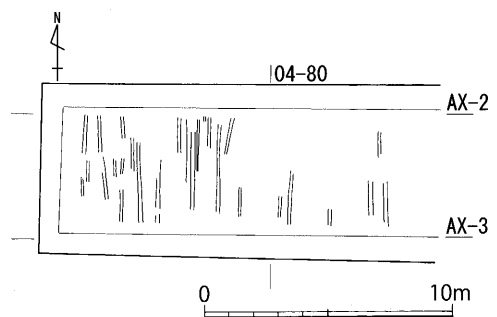


図12 中世検出遺構全体図（縮尺 1/300）

～30cm、深さ2～5cmの浅い溝が調査区西端から04-80ラインまでは密に検出された(図12)が、以東では浅くなり、その残存状況は比較的悪かった。浅い溝は鋤等による耕作痕と考えられる。出土遺物には土師質土器杯・皿・碗・竈片、須恵質土器大甕片、青磁片、土錘などがある。時期としては中世後半と考えられる。

3b層・3a層上面でそれぞれ耕作痕を検出した(図13)。検出面の標高は3b層で3.59m、3a層で3.64mを測る。いずれも南北方向の浅い溝が調査区の全面で多数検出された。3b層からは染付碗片・土師質土器片数点、3a層では、備前焼皿片・施釉陶器・染付碗片数点が出土した。時期としては近世と考えられる。

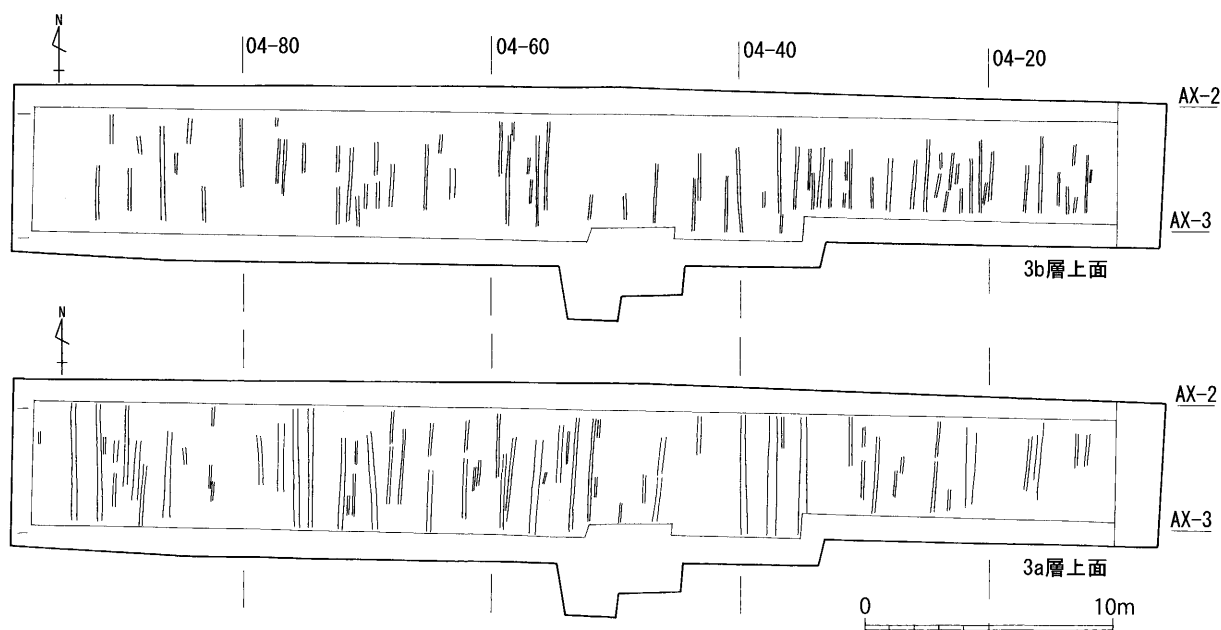


図13 近世検出遺構全体図(縮尺 1/300)

(6) 近代

2層上面では断面観察で南北方向の畝を確認した。日本陸軍による造成直前まで営まれていた明治時代の耕作面である。畝の幅0.7m、畝間の溝は幅0.5m、深さは0.1～0.2mである。また、造成土中に日本陸軍の兵舎基礎が残っており、基礎底面のレベルは標高4.55mである。

d. 包含層の出土遺物

4層～14層より出土した遺物のうち、土器20点、土製品3点、石器11点を図14～16に掲載し、各特徴については観察表に記した。以下に出土遺物の概要を記す。

土器(図14・18) 本調査地点では全体でコンテナ(約27ℓ)3箱、約1100片の土器・陶磁器片が出土した。そのうち11a・11b層から出土した縄文時代後期前半～中葉の土器で約4割を占める。次いで10層(黒色土)から出土した縄文時代後期～弥生時代前期の土器が約2割、4・5層(中世層)から約2割の土器・陶器片が出土している。縄文時代後期面では明確な遺構はほとんど確認されていないが、本調査地点の土層中でみると縄文時代の遺物量は比較的多いと言える。これは本調査地点より東で確認されている居住域(第17次調査地点)等からの流れこみと判断される。

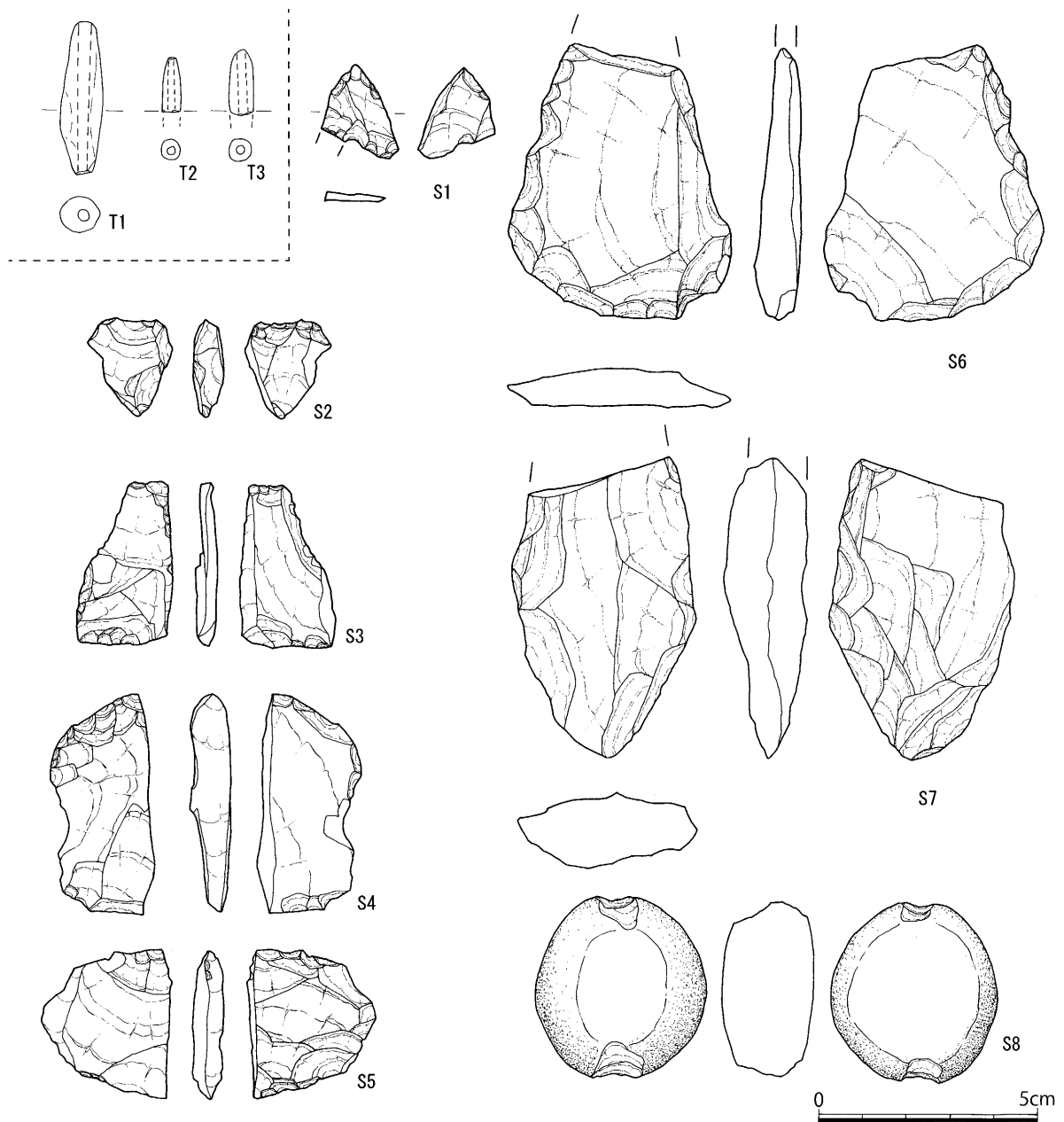
土製品(図15・18) 土錘3点(T1～T3)が出土した。T1・2は4層で、T3は3層から出土した。T1はほぼ完形であり、丁寧に仕上げられている。T2・3はどちらも1/2を欠損する。

石器(図15・16・18) 11点を図示している。その内訳は石鏃1点、楔形石器4点、石鋏2点、石錘1点、磨石1点、



番号	出土層位	器種	特徴	胎土	色調
1	11a層	縄文土器・鉢	(内)ナデ、(外)縄文(LR)	細砂	黒褐色
2	11b層	縄文土器・鉢	(内)ナデ、(外)縄文(LR)	微～細砂	橙色
3	11b層	縄文土器・浅鉢	(内)ナデ、口唇部に貼付突帯+沈線、(外)ナデ、ローリング	細砂～粗砂	黒褐色
4	12層	縄文土器・深鉢	(内)丁寧なナデ、(外)ナデ+横位沈線	細砂	暗褐色～暗茶褐色
5	10～11層	縄文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)磨消縄文(RL)+横位沈線	細砂	黒褐色、暗褐色
6	11b層	縄文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)磨消縄文、2条沈線	細砂～粗砂	黒色、暗茶褐色
7	11b層	縄文土器・深鉢	(内)丁寧なナデ、(外)ナデ+沈線	微～細砂	淡褐色、褐橙色
8	11b層	縄文土器・深鉢	(内)丁寧なナデ、(外)ナデ、2条沈線	細砂	淡褐色、暗灰褐色
9	11b層	縄文土器・深鉢	(内)丁寧なナデ、(外)ナデ+沈線	細砂	淡褐色、淡橙色
10	11b層	縄文土器・深鉢	(内)(外)丁寧なナデ、肥厚させた口縁部に太い沈線、口唇部に縄文(RL)	微～細砂	淡褐色、淡灰褐色
11	11a層	縄文土器・深鉢	(内)丁寧なナデ、(外)荒いナデ、肥厚させた口縁部に同心円文、縄文(LR)	細砂	暗褐色～茶褐色
12	10層	縄文土器・深鉢	(内)丁寧なナデ、(外)磨消縄文(RL)+横位沈線	微～細砂	暗褐色、淡褐色
13	11b層	縄文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)ナデ後、沈線施す、ローリング著しい	細砂	暗灰色、淡褐色
14	11a層	縄文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)縄文(LR)、沈線	微～細砂	淡橙褐色、淡褐色
15	11b層	縄文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)ナデ、口唇部に爪形文	細砂	淡褐色
16	11b層	縄文土器・深鉢	(内)剥落、(外)磨消縄文(LR)+沈線	細砂	淡褐色
17	11～12層	縄文土器・鉢	(内)丁寧なナデ後、横位の沈線、(外)口唇部に縄文(LR)	細砂	淡灰褐色
18	11a層	縄文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)磨消縄文(RL)+横位沈線、波状口縁の頂部には縦位の沈線で区画	細砂、緻密	暗褐色～茶褐色
19	11a層	縄文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)磨消縄文(RL)+横位沈線	細～粗砂	黒褐色、暗褐色
20	11～12層	縄文土器・深鉢	底径7.0cm、丁寧なナデ	微～細砂	暗灰色、淡褐色

図14 出土遺物1：土器（縮尺 1/3）



番号	層位	器種	長さ	幅	厚み	重量 (g)	特 徴	胎 土	色 調
T 1	4 層	土 鉢	6.9	1.9	1.7	19.1	口径0.5cm、ナデ、図の下端一部欠損	微～細砂	暗褐色
T 2	4 層	土 鉢	(2.5)	0.8	0.8	(1.7)	口径0.4cm、ナデ、1/2程度欠損	微砂	橙色
T 3	3 層	土 鉢	(3.0)	1.1	1.1	(2.6)	口径0.4cm、ナデ、1/2程度欠損	微砂	茶褐色

番号	出土層位	器 種	最大長	最大幅	最大厚	重量 (g)	石 材	特 徴
S 1	6 層	石 鎌	2.13	(1.73)	0.22	0.7	サヌカイト	未製品、凹基式、側縁への二次調整がほとんどみられない
S 2	側溝	楔形石器	2.25	1.91	0.72	2.5	サヌカイト	図上面に階段状の剥離が認められる
S 3	側溝	楔形石器	5.00	2.39	0.91	11.7	サヌカイト	片側に剪断面、図上面に階段状の剥離が認められる
S 4	11層	楔形石器	3.37	2.98	0.70	6.9	サヌカイト	両側に剪断面、上下端に階段状の剥離
S 5	11層	楔形石器	3.73	2.20	0.52	4.3	サヌカイト	図下端に階段状の剥離
S 6	11層	石 鎌	(6.28)	5.11	1.07	36.6	粘板岩	基部を欠損、撥形を呈する、刃部はやや急斜度の調整を施す
S 7	10層	石 鎌	(6.83)	4.30	1.91	58.1	粘板岩 (熱変成)	基部を欠損、自然面を一部に残す
S 8	11b層	石 鉢	5.58	5.23	2.76	113.4	流紋岩	円縁の長径両端に打ち欠き
S 9	11層	磨石	(6.70)	9.24	4.34	390.7	流紋岩質凝灰岩	約1/2を欠損、磨減面の裏面に敲打痕、凹み石としても使用
S 10	側溝	台石or石皿	(7.48)	(5.49)	5.72	204.1	流紋岩	図表面・裏面の二面に磨面が認められる、破損
S 11	10層下半	石 皿	(17.60)	(11.73)	4.70	1085.4	細粒花崗岩	破損、図上面が磨減しており、使用面と考えられる

図15 出土遺物 2：土製品・石器（縮尺 2/3）

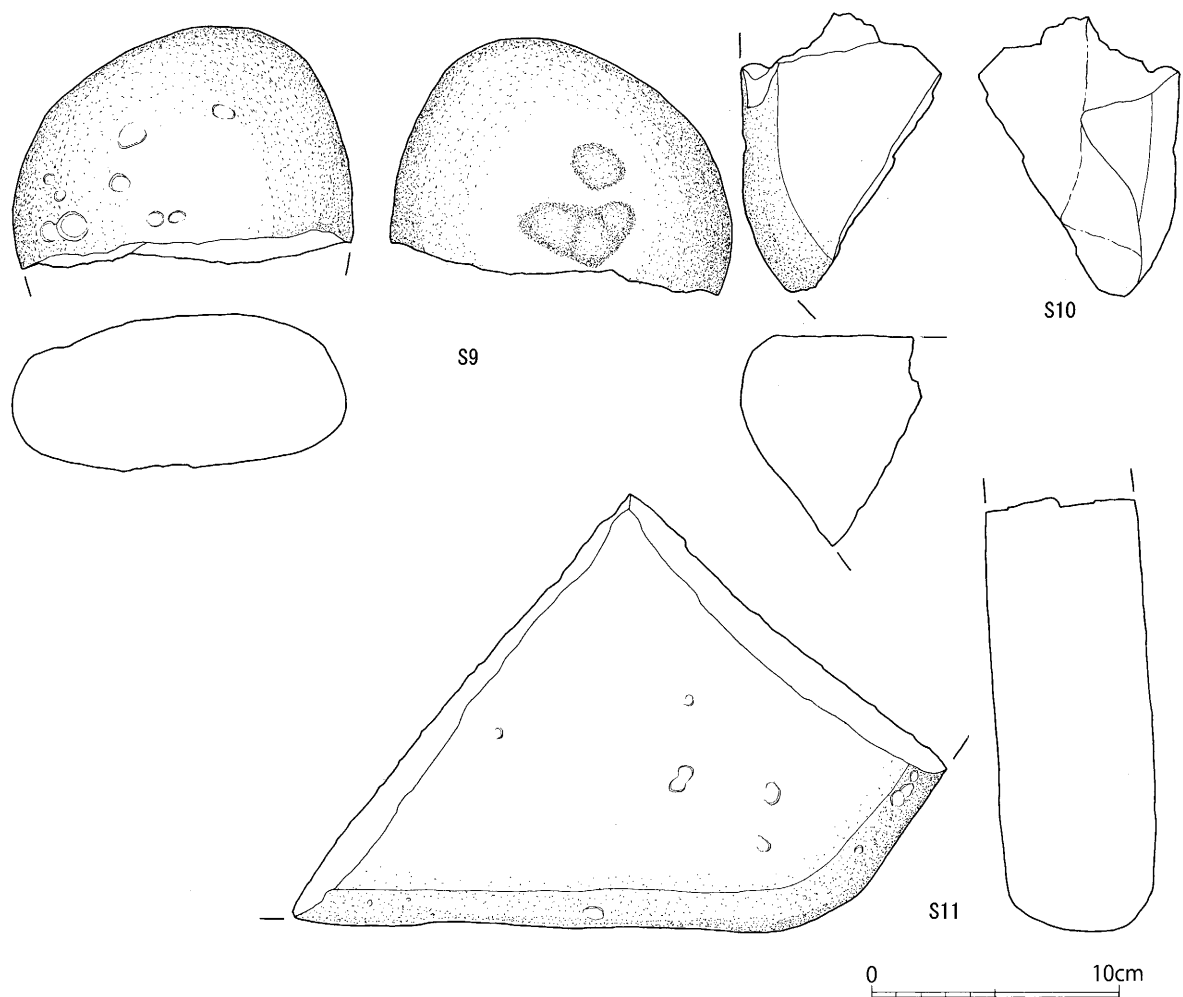


図16 出土遺物3：石器（縮尺 1/3）

台石（あるいは石皿）2点である。S 1が6層、S 7・11が10層から出土しているほかは、11a・11b層からの出土である。図示した器種以外に、10～11層中からサヌカイトのチップが数点検出された。

e. まとめ

今回の調査の成果としてはまず南北方向の溝群が注目される。

底面にピットを伴う特徴を有した溝の機能については、これまでも津島岡大遺跡でも複数の出土例があり、柵列や道路の下部構造とされてきている⁶⁾。今回の溝群についても、特に溝3にみられる繭形のピット列の存在から、道路状遺構に関係するものと考えたい。これらの機能を考えると道路の下部構造が、浅い皿状で底面に凹凸を持つ程度のもの（溝1）から、繭形ピット列を伴うしっかりとした下部構造（溝3）へと推移したことが想定される。

条里の区画の点からは本調査地点周辺の成果と比較すると、西側に位置する第28次調査地点溝7について道路痕跡の可能性があり、本調査地点の溝群と約109mの距離にあることが指摘されている⁷⁾。また北に位置する第6次調査地点で、古墳時代後期の溝（溝09）が走向位置とピットの平面形の特徴などから考えて、本調査地点の溝群との類似点が指摘できる（図17）。しかし、本調査地点の溝1～4は、6層上面（平安時代前半）で検出されたものであり、南北方向のライン上に並ぶものであるが、時期が異なるため、同一の溝とするには問題がある。

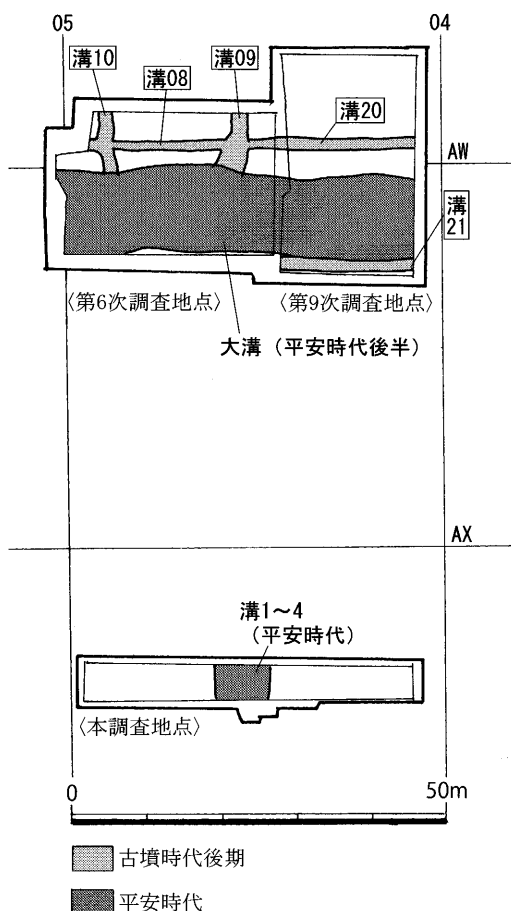


図17 第6・9次調査地点との位置関係
(縮尺 1/1,000)

また、溝1～4の下限は、現在のところ、5層の堆積により大幅に削平されたことで消失するという点で中世前半に求められる。

さて古墳時代後期の第6次調査溝08～溝10と第9次調査溝20・21は、古代の東西方向の大溝（6次：溝13、9次：溝23）の段階では消失しており、継続しない。一方本調査地点で、古代の南北方向の遺構を確認し、その位置は条里の区割りにあたる可能性がある。古代の大溝は条里の坪境と考えられており、この段階で区画の大幅な整理がなされたことが窺えるが、大溝の南北では状況が異なることが判明したのは新たな知見である。このことについてはより詳細な検討を行う必要がある。

以上のように古代の条里の地割りを考えるうえで有益な資料が増加したと言える。

また弥生時代前期の水田畦畔を9層上面で検出した。地形の傾斜を利用した小区画の畦畔である。周辺の調査では、西側の第28次調査地点、東側の第17次調査地点、また北西の第22次調査地点でそれぞれ前期の水田畦畔を確認しており、今回の調査でさらに資料の蓄積が進んだ。前期水田については、黒色土上面で検出されるもの（第17・28次）と、本調査地点のように黒色土層の1層上で検出されるもの（第22次）の二面があることがわかっている。二面ともが良好な状況で検出されることは極めて少なく、これまでのところ第12次調査地点で確認されたのみである⁸⁾。田面を深く耕起するとこのような残り方はしないと考えられ、今後も引き続き当該期の耕作形態について検討していきたい。

本調査地点は、縄文時代後期の集落が営まれる第17次調査地点から直線距離にして150m南西の位置にあたり、集落に比較的近い。しかし本地点の状況は遺構・遺物ともに希薄といえ、集落域は本調査地点までは広がらないことが確認された。集落から至近距離にありながら利用されない空間がある一方で、より離れた地点で屋外炉等の検出例が認められている。津島岡大遺跡全体での空間利用を考える上でのデータが蓄積されたと言える。

以上のように本調査地点では小規模な範囲ながらも貴重な成果を得ることができた。今後も津島岡大遺跡全体での土地利用や耕作形態について検討を進めていきたい。

(岩崎志保)

註

- 1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1989『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター年報8 1988年度』
- 2) 岩崎志保・野崎貴博 2004『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊
- 3) 小林青樹・野崎貴博 1998『津島岡大遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊
- 4) 土井基司・山本悦世 1995『津島岡大遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊
- 5) 岩崎志保 2008『津島岡大遺跡18』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第24冊
- 6) 光本順 2005「古墳時代後期から中世における遺構群の変遷」『津島岡大遺跡15』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第20冊
- 7) 池田晋 2009「津島岡大遺跡における古代から近代の条里遺構」『津島岡大遺跡19』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第25冊
- 8) 岩崎志保・山本悦世 2003「耕作土の問題」『津島岡大遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊

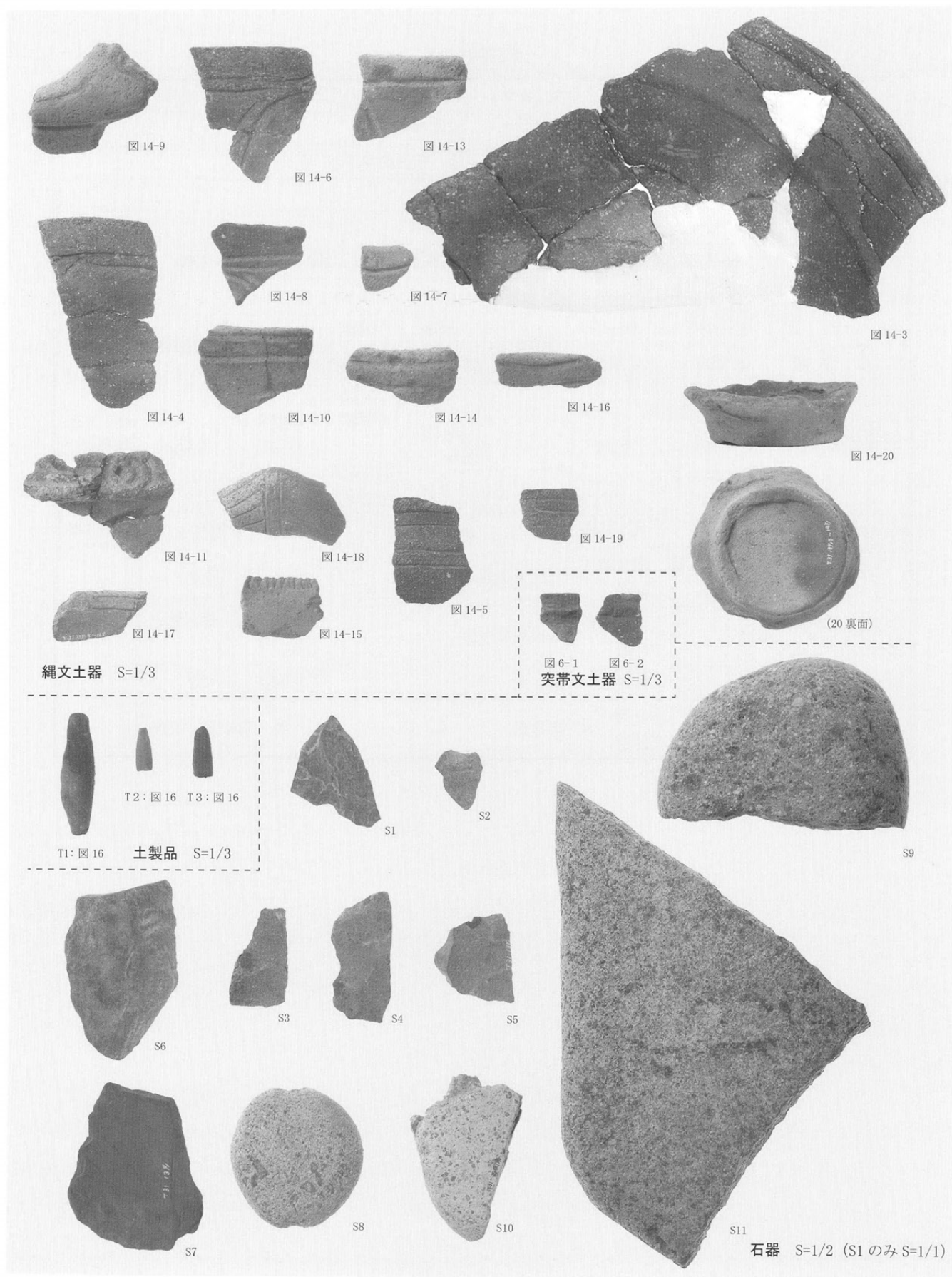


図18 出土遺物写真（縮尺 1/3、1/2、1/1）

報告書抄録

ふ り が な	おかやまだいがくまいぞうぶんかざいちょうさけんきゅうせんたー きょう2008							
書 名	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 紀要2008							
掲 載 箇 所	第1章 津島岡大遺跡の研究 第1節 発掘調査報告 (P1～16)							
著 者 名	岩崎志保							
編 集 機 関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所 在 地	〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中3丁目1番1号 TEL 086-251-7290							
発 行 年 月 日	2010年2月26日							
ふ り が な	ふりがな	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所 収 遺 跡	所在地	市町村		(世界測地系)	(世界測地系)			
つしまおかだい 津島岡大遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 きたくつしまなか 北区津島中3 丁目1番1号	33201		34度41分 21秒	133度55 分28秒 ～ 133度55 分29秒	2008年6 月12日～ 8月22日	212㎡	岡山大学 福利厚生 施設東棟
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
津島岡大遺跡 第31次 調査地点	その他の生産 遺跡	縄文時代 後期	ピット状凹み30基			縄文土器・石器		
	田畑	弥生時代 前期	水田畦畔一面			弥生土器・突帯文土 器		
	田畑	古代	溝4条			須恵器・土師器		
	田畑	中世～ 近世	耕作痕			土器・陶磁器・土錘		

第2節 立会調査の概要

1. 調査の実施状況

2008年度の津島地区における立会調査の実施件数は、54件と非常に多かった。各調査地点の分布は、図30に示している通り、津島地区のほぼ全体に広がっているが、とりわけ教育学部周辺の津島北地区東半での調査が集中した年度となった。例年比で約3倍の件数増となった要因としては、教育学部関連建物の耐震改修工事およびそれらに付随する設備の改修工事の実施（19件）が挙げられる（調査番号6、18～26、29、43～50）。これらの工事は、概して掘削深度自体は大きくなかったものの、教育学部一帯は旧地形の微高地上に位置しており、掘削深度の浅い工事においても包含層に達する地点があったことも件数増の一因である。そのほか件数が多かったのは、環境理工学部の水辺環境施設整備工事〈10～17〉や大学生協の福利厚生施設新築に伴う工事〈35～40〉である。

中世以前の包含層および遺構を確認した調査は54件中15件ある。ここでは、重要な知見の得られた新技術研究センター公共下水道接続工事〈42〉、教育学部体育館他耐震改修工事〈43〉、および大学会館他改修工事〈52〉の成果を中心に報告することにした。

2. 新技術研究センター公共下水道接続工事：AW00～01区〈調査番号42〉

a. 調査地点の位置と経過

本調査は、津島北地区の北東部に位置する新技術研究センター（旧サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリー）の北東側に計画された公共下水道の接続工事に伴うものである。津島地区の東北隅は遺跡保護区として管理されており、保護区には干渉しないもののそのすぐ南側に隣接した地点であること、既往の発掘調査で条里に関連する遺構が確認されていることから、極力掘削が深くならないように協議したうえで調査を実施することとなった。掘削の概要は、桝3箇所が1.5m四方で道路面からの深さが1.2～1.7mを測り、東側の桝ほど深くなる設計である。管路部分は、幅1.0mで深さ0.85mまで掘削した。本調査地点に隣接して第3・15次発掘調査を実施しており（図19）、今回工事の掘削部分の西半はすべて既往の調査範囲内に収まっていることを確認した。それ以外の地点では、第3次調査で確認している、里境を示すとみられる南北方向の中世溝・近世溝の延長部（図20）、および「黒色土」上面までの堆積状況を確認することができた。調査期間は、2009年2月2～4日である。

b. 調査成果

(1) 層序（図20・21）

断面を記載する地点の位置関係を図20に示す。本調査地点では、A地点・C地点で「黒色土」上面までの12枚の層

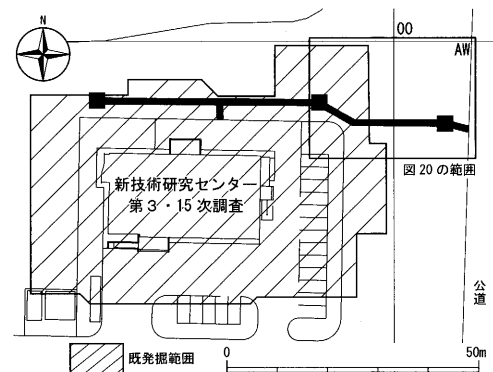


図19 調査地点の位置（縮尺 1/1,500）

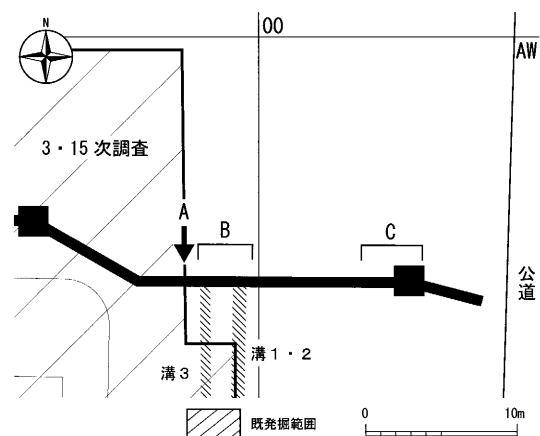


図20 調査地点の断面位置（縮尺 1/500）

を、管路部では東西方向に約20mの範囲で中世層までの堆積状況を確認した。里境を示すとみられる南北方向の溝が確認できたのはB地点で、溝を挟んだ東西では基本層序の層相に若干の違いがみられた。出土遺物がほとんどないため各層の時期は隣接調査地点の成果との対応関係によって比定しているが、層相の違いは耕作活動の影響度や土砂の供給量の違いによるとみられるもので、基本的には東西で時期の対応する層が調査範囲全体に堆積しているとみてよい。以下では各層について報告する。

1 a層は旧陸軍による造成土および岡山大学設立以後の造成土を一括したものである。1 b層は「黒色土」や近代耕作土などの包含層をブロックで含んでいるため、やはり造成の際の盛土とみられる。時期は、明治以降のものである。2層は近代の耕作土である。場所によってグライ化により青灰色を呈す。3～5層は近世の耕作土である。4層はB地点以西で観察された。3・4層が第3次調査の基本層序の〈3層〉に、5層が〈4層〉に対応する。なお、2～5層の上面ラインはB地点を境にして10cm前後のレベル差を生じており、里境となる溝を挟んで同時期の耕作面に高低差を有していたとみられる。6層は中世の耕作土で、第3次調査の〈5層〉対応である。7層は古代後半～中世の耕作土で、〈6層〉対応とみられる。鍋片が1点出土している。

8層以下はA・C地点のみでの観察となる。8層は古代の堆積層とみられるが、A地点とC地点で層相が異なるため細分した。8 a層はA地点のみで観察された。砂質がつよく、後述のように8 a・9層は東西方向の大溝の埋土の可能性がある。8 b層はC地点で確認された。粘性が強く、古代の耕作土とみられる。〈7層〉対応である。9層はA地点のみで観察された。部分的な観察のため性格は不明だが、「黒色土」の小ブロックを含むことから下層を攪拌して形成された堆積層とみられる。10・11層はC地点のみで観察された。11層は黄灰色の小ブロックを含む。これらの2層は上下層の関係から弥生～古墳時代の堆積層とみられる。12層はいわゆる「黒色土」と呼んでいる鍵層で、弥生時代早～前期の土壌化層である。A地点とC地点の最深部で層上面のみを確認した。レベルは両地点とも道路面から1.7mを測り、第3・15次調査地点の成果から水田面であったと考えられる。

2～7層（中世～近代）は、里境をなすとみられる南北溝を境にして東西でレベル差や層相の違いはみられるものの、基本的には水平堆積である。8層以下は部分的な観察にとどまるため、地形の復元は難しい。A地点は、位置関係から第3次調査で確認している古代の東西方向の大溝である溝04の肩部にかかっている可能性が高い。A地点で古代の耕作土とみられる8 b層がみられない要因としては、8 a層が大溝の埋土である可能性、あるいは大溝の付近に位置するため8 b層が変質して砂質がつよくなっている可能性が考えられる。以上のことから、A地点の12層上面のレベルは大溝の掘削によって改変されている可能性があるが、第3次調査の成果と対比するとおよそ微高地頂部からやや下がったあたりの高さに相当するとみられる。

(2) 遺構 (図21)

溝1 B地点で検出した南北溝である。幅2.9m、深さは不明である。第3次調査で確認している溝15と同一の溝とみられる。埋土は8層に細分でき、基本層序2層に類似する灰色～青灰色の砂質土が堆積している。最終的には1 a層で埋まっており、旧陸軍の造成時まで機能していたことがわかる。埋没時の幅は2.0m程度である。

両脇に畦畔1～3を伴っており、3層上面段階で畦畔1・3が、2層上面段階で畦畔2が機能していたとみられる。畦畔1は幅1.5m、高さ10cm、畦畔2は幅0.7m、高さ20cm、畦畔3は幅0.5m、高さ15cmである。畦畔2は溝1の埋土の一部とも考えられるが、包含層をブロック状に含むため溝1の最終段階に機能した畦畔と判断した。検出面および第3次調査の層序との対応関係から、溝1の時期は近世～近代と考えられる。

溝2 B地点で検出した南北溝である。東側の大半を溝1に切られており、西側の立ち上がりのみを確認した。幅・深さとも不明である。第3次調査で確認している溝13と同一の溝とみられる。埋土は3層に分けられ、褐灰色砂質土が堆積する。5層上面から切り込まれており、第3次調査との対応関係から、近世段階と考えられる。

溝3 B地点で検出した南北溝である。第3次調査の溝07 aと同一の溝とみられる。幅1.2m、深さは不明だが0.3

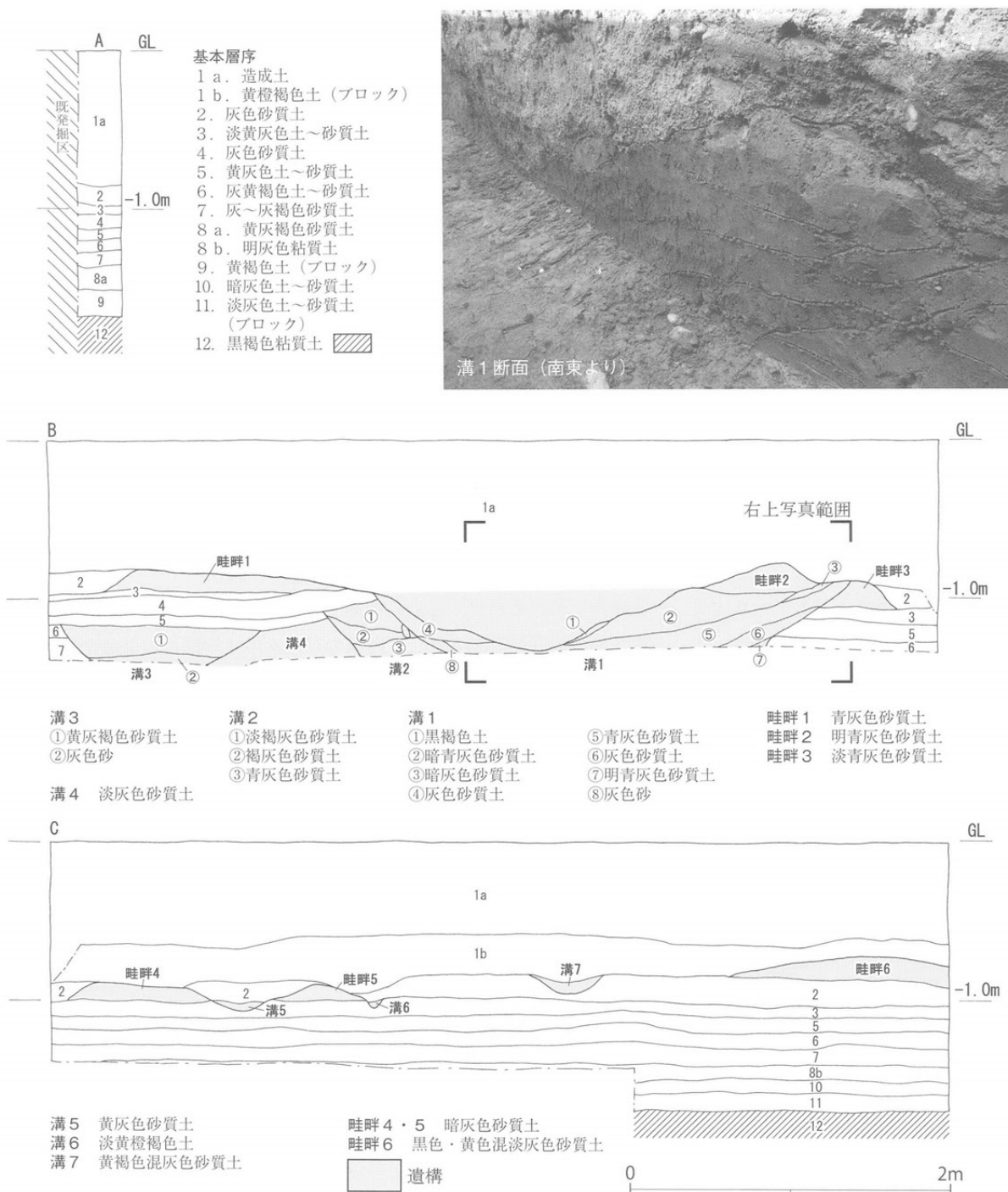


図21 断面図（縮尺 1/40）

～0.4m程度と推定される。埋土は2層に分けられ、下層には灰色砂がみられる。6層上面から切り込まれており、第3次調査との対応関係から中世段階の溝と考えられる。

溝4 B地点で検出した南北溝である。第3次調査の溝07bと同一の溝とみられる。東側の立ち上がりを溝2に、西側の立ち上がりを溝3に破壊されており、幅・深さとも不明である。埋土は淡灰色砂質土である。切り込み面を直接には把握できないものの、埋土上面のラインが6層上面ラインとつながるため、6層段階に掘削された溝

と考えられる。中世段階の溝と考えられる。

溝5・6 C地点の3層上面で検出した南北溝である。溝5が幅35cm、溝6が幅10cmを測り、深さはそれぞれ5cm程度である。埋土は両溝とも類似しており、黄灰色砂質土である。いずれも畦畔4・5に伴うものとみられ、最終的には基本層序の2層によって埋まっている。畦畔4は幅0.9m、高さ10cm、畦畔5は幅0.6m、高さ10cmである。検出面から近世段階に構築されたものと考えられるが、2層段階の耕作による破壊を受けていないことから近代段階まで継続して機能していたようである。

溝7 C地点の2層上面で検出した南北溝である。幅45cm、深さ10cmである。埋土は黄褐色混じり灰色砂質土である。近代の耕作痕跡（畝）と考えられる。

畦畔 畦畔1～5の詳細については付随する各溝の項で先述したとおりである。これらはすべて南北方向の畦畔である。畦畔6は、C地点の2層上面で検出した。包含層をブロック状に含んでおり、盛土と判断した。ただし、他の畦畔と異なり、北・南の両壁面での位置の確認ができなかったため、南北方向の畦畔かどうかは不明である。検出面から近代のものであろう。同時期の畦畔間の関係がわかるのは、3層上面で確認した畦畔3と4・5である。畦畔4・5をセットの畦畔として扱うなら、これらの間隔は東西方向に6.0mを測る。また、溝1の芯（肩上端の中点）を基準にするなら、畦畔4・5との間隔は7.4mを測る。

c. まとめ

本調査地点のもっとも大きな成果は、B地点における中世から近代の南北溝4条の検出である。これらはいずれも第3次調査によって確認されていた溝と同一のものとみられ、各時期の里境を示す遺構との評価がされており¹⁾、南北方向の条里を復元する際の基準の一つとなっている遺構である²⁾。一方で、第3次調査の成果は、これらの溝が調査範囲の東端に位置していたため、規模の把握や、より東側の遺構の分布状況の把握に課題を残していた。今回の調査によって、精度に制約はあるものの近世段階の溝1の規模および溝群以東の土地利用の状況について新たに情報を得ることができた。中世～近代の溝1～4は、わずかに位置を移しながらも繰り返し掘削されており、条里の重要な基線であったことを改めて認識させる。これら溝群の東側には、第3次調査で確認した西側と同様の耕作域が、耕作面に多少の高低差をもちつつ展開していたと考えられる。

註1) 山本悦世 1992『津島岡大遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

2) 野崎貴博 2003「津島岡大遺跡における近世の条里遺構について」『津島岡大遺跡12』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

池田晋 2009「津島岡大遺跡における古代から近代の条里遺構」『津島岡大遺跡19』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

3. 教育学部体育館他耐震改修工事（動物室）：AY01区〈調査番号43〉

a. 調査地点の位置と経過

本調査は、津島北地区の南東部に位置する教育学部体育館とその周辺施設の耐震改修工事の一環として実施されたものである。関連工事と本調査地点の位置関係を図22に示す。本調査地点では、動物室の既存基礎の撤去に伴って2.9×5.3mの範囲で道路面から深さ0.7mまでの掘削が設計された。面積がやや広いものの大半は既存基礎による既干涉範囲であったこと、掘削深度がそれほど深くないことから立会調査での対応となった。掘削の結果、「黒色土」の上面が一部で確認でき、東壁を除く各壁面においても包含層の堆積を確認した。そのため、人力掘削により「黒色土」を全面で検出し、遺構の有無の確認および壁面の記録をとることとなった。調査は、下層の堆積状況確認のためのサブトレンチの掘削・記録までを実施して終了した。調査期間は2009年2月16・17日で、

最終的な掘削深度は道路面から0.85mである。

調査の結果、「黒色土」上面において弥生時代のものとみられる水田畦畔を確認した。また、サブトレンチ内では縄文時代後期の基盤層までの堆積状況を把握している。以下で調査成果を報告する。

b. 調査成果

(1) 層序 (図23)

包含層が残存するのは既存の建物基礎が露呈する東側以外の各壁面で、15枚の堆積層を確認した。記載する断面の平面的位置関係は図25に示した。

1層は旧陸軍による造成土および岡山大学設立以後の造成土を一括したものである。2層は近代の耕作土で、調査範囲の全体に広がっていたようである。3層は鉄分の沈着が著しく、近世の耕作土とみられる。AY-9ラインより南側で観察される。4～8層は、いずれも北壁を中心にしてAY-9ラインより北側で観察される層である。4・5層にはいずれも鉄分の沈着がみられ、3層に対応する近世の耕作土と考えられる。6層は中世の耕作土とみられる。7・8層は似た層相を呈すものの、7層にマンガンが帯状に含まれる点で区別される。やや粘性をもち、8層中から土師質土器碗の底部が1点出土しているため、古代末～中世の耕作土と考えられる。9～13層はいずれもAY-9ラインよりも南側を中心に堆積が観察され、北壁には11層が部分的に広がっているのみである。9～12層は、津島岡大遺跡の基本層序としている耕作土とはやや様相を異にする堆積層で、全体に砂質が強く、しまりがなく、ブロック土は含まないものの汚れた印象の層相を呈す。9層はマンガンを多く含み、耕作土であった可能性がある。10層は土器小片・炭化物を含む。12層は炭化物をまばらに、土師器・須恵器などの土器片を多く含む。土器は小片ばかりで図化できるものはないが、古代後半のものである。9～12層は二次堆積の可能性もあるため出土土器が必ずしも層の堆積時期を示すとは限らないが、上下層との関係とあわせると、古代後半～中世の範囲に収まると考えられる。13層は14層をブロック状に含み、下層を攪拌して形成されたとみられる層で、14層上面で検出した水田畦畔機能時の耕作土と考えられる。14層はいわゆる「黒色土」と呼んでいる弥生時代早～前期の土壌化層である。上面で畦畔を確認した調査区南側では淡褐色を呈し、脱色化しているようである。上面観察だけだが、本層には土器小片がかなり含まれている状況が確認できた。15層は調査区南東隅で部分的に確認したのみで、縄文時代後期の基盤層とみられるが、14層の漸移層になる可能性もある。

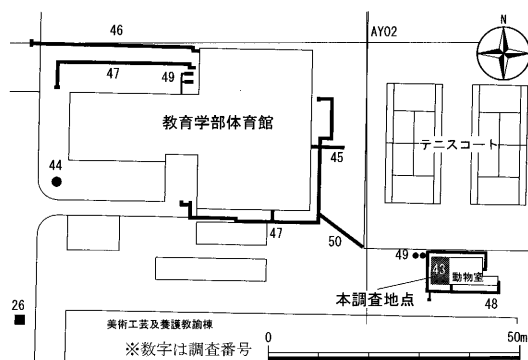


図22 調査地点の位置 (縮尺 1/1,500)

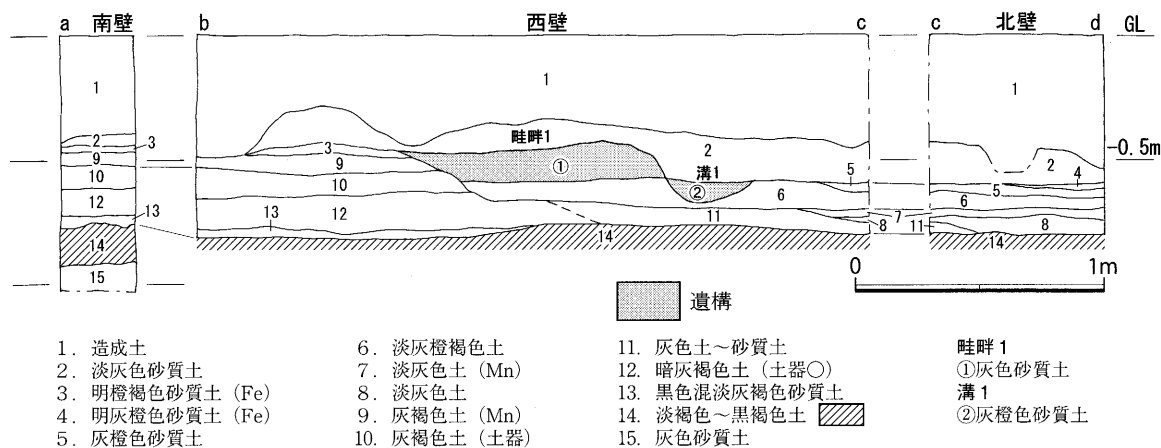


図23 断面図 (縮尺 1/30)

以上でみてきたように、調査範囲の北側では津島岡大遺跡で広くみられる耕作土の堆積が古代から近代まで確認できる一方で、南側には耕作土とはやや異質な堆積土の拡がり確認された。9～12層は、二次堆積あるいは盛土の可能性も考えられるが、ブロックがみられず比較的均質なため、現状では居住活動などの人為的な攪拌によって形成された堆積層と考えておきたい。なお、調査範囲の北側では14層の直上に古代以降の耕作土4～8層が堆積し、明瞭な不整合面が存在する。14層の上に8層が堆積する地点では畦畔が検出されなかったため、8層の堆積時期以前に土地の削平が存在したと考えられる。北側の耕作土と南側の堆積土の各層の時期的な対応関係は必ずしも明らかではないが、3層と4・5層はいずれも近世の耕作土とみられ、少なくとも近世段階では同時期の生活面に南北でレベル差が生じていたと考えられる。また、9～12層の時期が古代後半～中世の範囲に収まることをあわせ考えると、南北の段差は8層の堆積以前の削平の時から継続していた可能性が高く、南北の段差の構築と調査範囲北側の削平は有機的な関係を有していたものとみられる。

(2) 遺構 (図23～25)

14層上面畦畔 (図24・25) 南北方向、東西方向にそれぞれ1条ずつ確認した。東西方向のものは北側の肩を検出できなかったが、これは先述の削平のためと考えられる。南北方向のものはわずかに北から東に振れており、正方位を指向した畦畔とはみられない。畦畔は高さ2、3cm程度で残存状況はそれほど良くないものの、田面部分では上層からの踏み込み・攪拌が著しく (図24)、それを手がかりの一つとして検出した。時期は、畦畔機能時の耕作土とみられる13層からの遺物の出土が無い場合、詳細は不明である。上下層の関係および弥生時代早～前期の「黒色土」上面に直接畦畔が残存していることから、弥生時代の範囲に収まると考えられる。

畦畔1・溝1 西壁の6層上面で確認した。畦畔1の北側直下に溝1が掘削されているため、互いに関連する遺構とみられる。畦畔1の盛土が近世の耕作土である3層の上に堆積しているため、これらの遺構は近世段階のものと考えられる。なお、西壁での位置確認ができなかったため、これらの遺構の走向方向は不明である。また、条里地割との位置関係を検討してみたが、1町・半町の区画線とは一致しない。

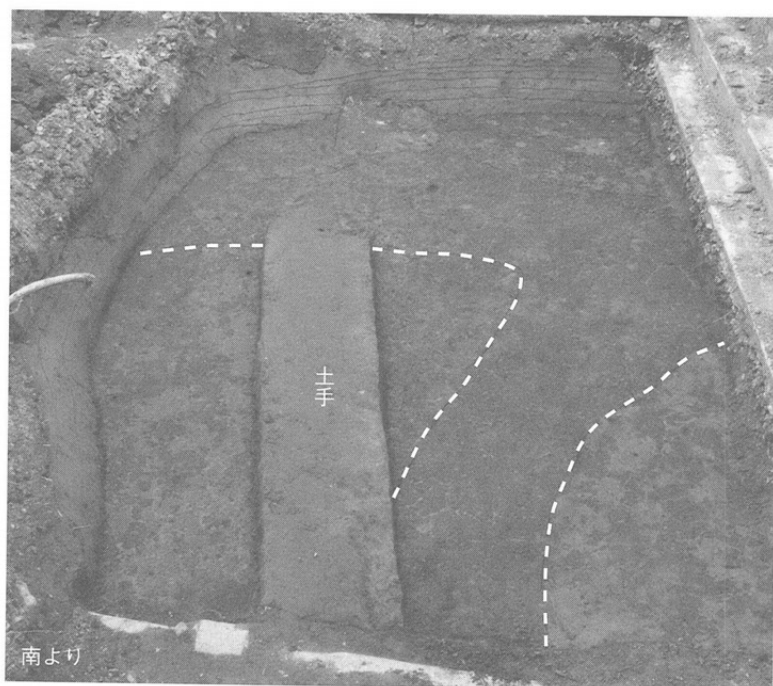


図24 14層上面水田畦畔

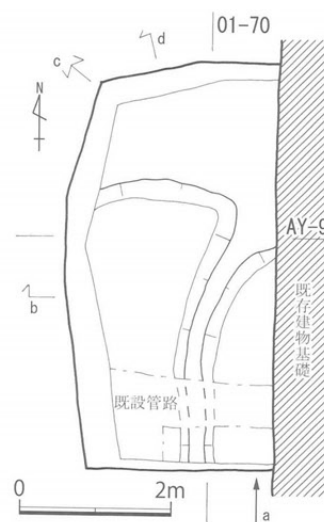


図25 検出遺構平面図 (縮尺 1/100)

c. まとめ

本調査地点が位置する津島北地区の南東端の一帯は、これまでに発掘調査・試掘調査とも行われておらず、わずかな立会調査の実施があるのみで、調査のまばらな地域になっていた。今回の調査は限られた面積ではあったが、本地点周辺が旧地形の微高地になっていることを確認した。本地点の西側約80mに位置する総合研究棟（教育系）改修機械設備工事（都市ガス）〈調査番号26〉地点（図22）においても道路面から深さ0.95mで「黒色土」を確認しており、一連の微高地となる可能性がある。また、耕作土とは異質な堆積土が本地点よりもさらに南側に広がっているとみられること、土器片の出土が小片ばかりではあるものの、比較的多いことを考慮すると南側の近辺に生活域が存在する可能性が考えられる。古代後半～中世を上限として想定される土地の削平および段の構築は、津島岡大遺跡一帯では比較的古い時期の土地造成の痕跡になる可能性もあり、拡がりや時期の検討が今後の課題となろう。

4. 大学会館他改修工事（一般教育講義棟ガス設備）：BB10～11区〈調査番号52〉

a. 調査地点の位置と経過

本調査は、大学会館およびその周辺施設の改修工事の一環として実施された一般教育講義棟のガス設備工事に伴うものである。南西20mの地点に第10次調査地点¹⁾（保健管理センター）、南側では2004年度に立会調査を実施している〈総合番号152〉（図26）²⁾。西端の既設管への接続部（A地点）では1.5m四方の範囲で道路面から深さ1.4mまで、新設の管路部分では幅0.5mで深さ0.75mまでの掘削が計画された。調査の結果、接続部の掘削は深さ1.2mで完了し、ほぼ既設範囲内に収まったものの、北壁の一部で包含層の残存を確認した。管路部分では、攪乱されている地点もあったものの、深さ0.7mまで掘削し、0.5m前後より下層で包含層が確認された。そのほか、土坑1基、溝2条を確認した。調査期間は2009年3月2・3日である。

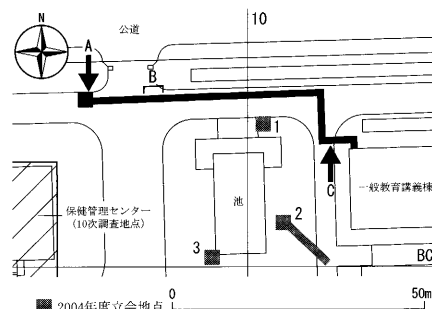


図26 調査地点の位置（縮尺 1/1,500）

b. 調査成果

(1) 層序（図27）

断面を記載する地点の位置関係は図26に示したとおりである。A地点では、ごく限られた観察範囲ではあったものの基盤層と考えられる礫層までの堆積状況が確認できた。ここでは、第10次調査、2004年度立会調査の成果を参考にしながら、A地点の層序を中心に報告する。

1層は旧陸軍による造成土および岡山大学設立以後の造成土、および既設埋土を一括したものである。2層は近代の耕作土である。3層は近世の耕作土で、B地点より東側で確認した。4層は暗褐～褐色の砂質土で、1～3cm大の礫を含む。A地点では層厚4cmと薄いものの、B・C地点においても観察され、東西約50mの範囲に拡がりを確認した。2004年度立会調査の基本層序3層に対応するとみられる層で、津島岡大遺跡において一般的に観察される耕作土とは層相が異なる。砂質が強く、ブロックを含まない均質な層相を呈し、色調から土壌化作用を受けているものとみられる。わずかな色調の濃淡や礫の多寡によって、地点によっては細分が可能であったが、観察できる層厚が薄く上下関係がはっきりしないためここでは一括して扱った。堆積時期は、2004年度の調査成果で中世～近世の範囲が考えられている。今回の調査でも遺物の出土がないため上下層の関係でしか時期を検討できないが、A地点において近世の耕作土である3層が本層上に堆積しているため、近世の耕作地化以前に

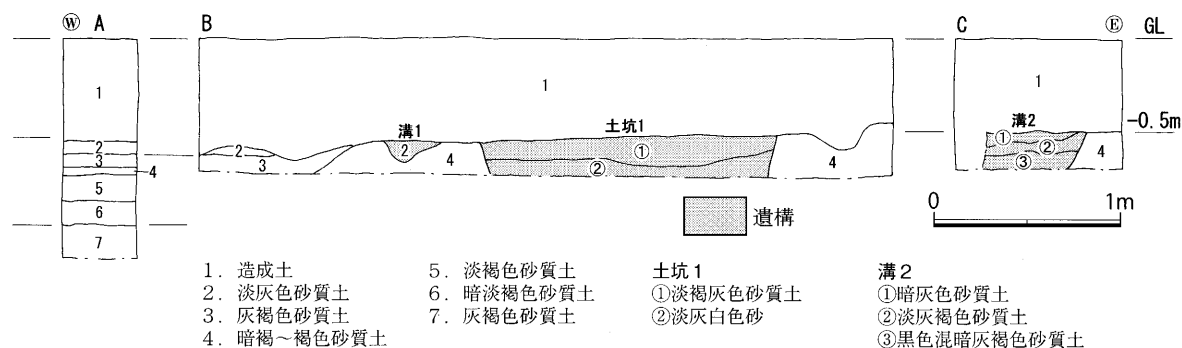


図27 断面図 (縮尺 1/40)

は本層が堆積していたことが新たに知りうる。5・6層は淡褐色砂質土で、5層に微量の炭化物、6層に明灰色の砂質土ブロックがわずかにみられることから細分している。A地点のみで確認した。5・6層とも3～5cm大の円礫をまれに含み、上層よりも色調が淡くなる。第10次調査の基本層序〈8層〉に対応するとみられ、弥生～古墳時代の層と考えられる。7層は3～10cm大の重円礫～円礫を非常に多く含む層で、基盤層となる礫層と考えられる。道路面から7層上面までの深さは1.0mを測り、浅い位置での検出である。正確な標高の比較はできないものの、第10次調査地点の基盤層上面よりも30～40cm高くなるとみられる。

B地点を境に西側では近世・近代の耕作土である2層・3層を確認したものの、東側では段差を生じており、堆積を確認できなかった。東側では4層より上層が削平されている可能性も考えられるため、2・3層相当の耕作土が本来存在していたかどうかはわからないが、少なくとも近世・近代の段階では調査範囲の東側がより高い地形であったと考えられる。2004年度立会調査第2地点(図26)においても近代層の標高が西側約50mに位置する第10次調査地点よりも40cmほど高くなることが指摘されており、一致する成果といえよう。

(2) 遺構 (図27)

土坑 1 B地点の4層上面で検出した。直径は確認できる範囲で1.6m、深さは不明である。埋土は2層確認でき、下層には淡灰白色の砂がみられる。検出面からは4層の堆積時期以降、すなわち中世以降としか判断できないが、津島岡大遺跡において中世に遡る土坑はほとんどみられないことを考慮すると、帰属時期は近世の可能性が高い。

溝 1 B地点の4層上面で検出した。幅30cm、深さ12cmを測る。近代の耕作土である2層によって埋まっていることから、近世～近代に機能していた溝と考えられる。耕作に伴う遺構の可能性が考えられる。

溝 2 C地点の4層上面で検出した。現存で幅50cm、深さ20cmである。立ち上がりがやや緩やかであること、平面観察の限りラインが南北に直線的に走ることを根拠に溝と判断したものの、幅50cmの管路の範囲での観察のため土坑の可能性も捨てきれない。検出面以外に時期を判断する材料はほとんどないが、埋土の特徴から近世段階のものと推測される。条里地割との関係を検討したものの、1町・半町のラインにはあたらない。

c. まとめ

本調査地点では、津島岡大遺跡一帯にみられる「黒色土」は確認できず、基盤層と考えられる礫層上には褐色系砂質土の堆積がみられた。同様の堆積状況は、第10次調査地点においても確認されており、旧地形の微高地上にあたと考えられている。第10次調査地点の基盤層上面は北に向かって高まっていることから、その北側約20mに位置する本調査A地点は一連の微高地のさらに頂部に近い部分に相当するとみてよい。

東西約50mの範囲に拡がりを確認した4層は、西側で堆積が薄くなっており、第10次調査地点では確認されていない。したがって、現状では第10次調査地点の東側から北東側に分布する層といえる。この層の性格について

て、2004年度立会調査では道路用の造成土や土盛りの可能性が考えられているが、今回の調査成果をあわせるとBB10～BC10付近を中心にかなりの拡がりをもつものと推測され、局所的な造成の痕跡とは考えにくい。また、耕作土とは異質な層相を呈す一方で、ブロックが顕著に観察されない均質な堆積層であることも造成土とは断定しにくい特徴の一つである。この層の分布する範囲に典型的な耕作土の形成が認められるようになるのは、現在までの成果によると近世以降のことで、津島岡大遺跡内でこの一帯は耕作地としての利用が遅れた一角であった可能性が考えられる。そうであるなら、4層は必ずしも造成によるものとは限らず、他の地点に比べて耕作活動の影響を受けないために土壌化および人間の居住活動などによる攪拌が母材となる砂礫層に継続的に作用して形成されたものとも考えられよう。いずれにしても、本地点の成果は2004年度立会調査で確認された3層の性格・分布について新たなデータを補足するものである。

註1) 山本悦世・岩崎志保 2003『津島岡大遺跡11』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

2) 光本順 2006「津島キャンパス環境整備（留学生センター西）に伴う立会調査」

『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

5. その他の調査地点

津島地区の立会調査では、上述の3件のほか、中世層にまで掘削が達した地点が12件ある〈調査番号7・21・22・26・28・32・33・39・40・44・49・53〉。大学生協福利厚生施設東棟新築関連の工事〈39・40〉については、本章第1節において詳細を報告した第31次発掘調査地点の隣接地にあたり同様の堆積状況を確認したのみなので、ここでの報告は割愛したい。以下には、アースオーガ掘削工法などのため調査成果の限られたものを除いた、

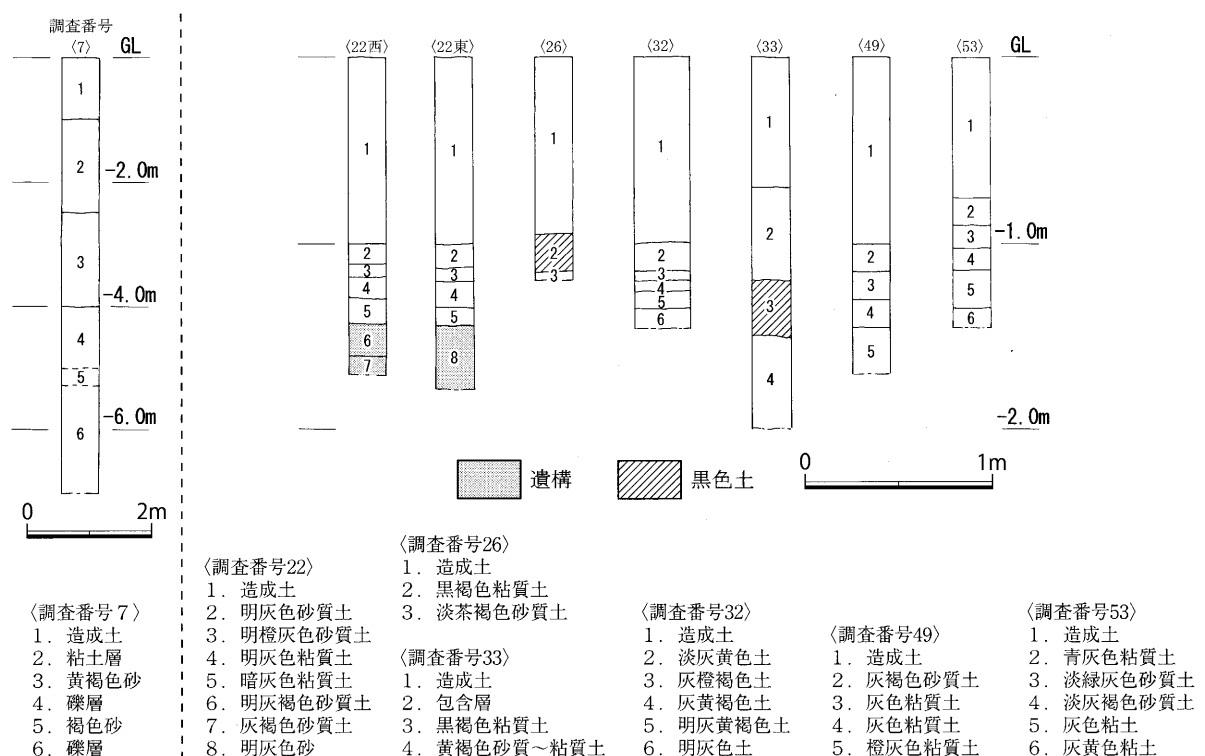


図28 その他の調査地点の断面柱状図（縮尺 1/120、1/40）

残り7件（8箇所）の成果を断面柱状図でまとめた（図28）。観察地点の位置については、図30に示している。

理学部ヘリウム液化装置基礎工事〈7〉では、道路面から深さ7.0mまで掘削が行われた。オーガ工法のため、層の観察およびレベルの記録は多分に不確実な部分を含んでいるものの、地下7mまでの堆積状況の観察を行う機会はそれほど多くないためここで報告しておくことにしたい。道路面から約2.5mを測る3層以下が基盤層と考えられ、砂層・礫層が続く。「黒色土」はみられず、西側に隣接する第19次調査地点で確認された弥生時代の河道内に位置する可能性が考えられる。

総合研究棟（教育系）改修電気設備工事の接地極埋設〈22〉では、2地点を掘削し、いずれの地点でも古代の耕作土とみられる5層より下位において溝もしくは河道の埋土と考えられる砂質土を確認している。総合研究棟（教育系）改修機械設備工事の都市ガス設備〈26〉では、道路面から深さ0.95mで「黒色土」上面、1.15mで基盤層上面が確認された。先述の教育学部体育館他耐震改修工事（動物室）〈43〉地点で確認した微高地の拡がりを検討する上で重要なデータである。一方、同じ教育学部体育館周辺でありながら教育学部体育館他改修電気設備工事の接地極埋設〈49〉では、道路面から深さ1.7mまで掘削が行われたが「黒色土」は確認されなかった。プール系統水道メーターボックス取設工事〈32〉、南宿舍電柱設置工事〈33〉はいずれも津島地区内で既往の調査の少ない一角での実施となった。前者では、5・6層が中世の耕作土に相当するとみられる。後者は、オーガ工法で実施されたため正確なレベル記録ではないものの、現地表面から比較的浅い位置で「黒色土」が確認できた。そのほか、中世層が確認されたのは、工学部屋外ガス配管改修工事〈53〉である。5・6層が中世の耕作土に相当するとみられる。

（池田 晋）

表1 2008年度津島地区調査一覧

番号	種類	調査地区	構内座標	所属	調査名称	細目調査名称	調査期間	掘削深度 (GL-m)	内 容
1	発掘	津島北	AX04	生協	福利厚生施設東棟新営に伴う発掘調査		6.17~8.22	2.7~3.0	古代の溝群、弥生時代前期の水田畦畔などを確認
2			BC19			抜根	4.3	0.5~0.55	造成土内
3	立会	津島南	BC19	イ	岡山・岡大連携型インキュベータ建築工事	配管	4.3・4.8	1.15~1.2	近世層上面まで確認
4			BC18・19			雨水排水橋設置	7.8・23	1.0	近世層まで確認
5	立会	津島南	BC18	イ	岡山・岡大連携型インキュベータ電気設備工事	外灯設置	5.28	0.78~1.0	造成土内
6	立会	津島北	AZ02~03	教	教育学部改修に伴う打合室設置工事	仮電柱設置	5.28	1.0~1.1	近代層まで確認
7	立会	津島北	AZ09	理	理学部ヘリウム液化装置基礎工事	基礎杭設置	7.2	4.0	黒色土なし、GL-4m以下で礫層を確認
8			AZ09			杭周りの根切り	7.7	0.7	造成土内
9	立会	津島北	AX08・13 AY13 BB07 BC13 BD10・12・13	事	環境整備(案内板等)新設工事		7.7~9	0.6	造成土内
10	立会		AV01			敷地造成(池部分)	7.7・11	0.75~0.9	造成土内
11	立会		AW00			〃(腐食株除去)	7.10	0.6	造成土内
12	立会		AV01			〃(ハンドホール新設)	7.16	0.9	造成土内
13	立会		AV00			〃(水銀灯撤去)	7.16	1.05	既設内
14	立会	津島北	AW01	環	水辺環境(教育・研究)施設整備工事	給水配管	8.7	0.9	造成土内
15	立会		AW00~AX02			排水設備	8.20~9.1	0.55~1.05	集水樹1地点で近代層まで確認
16	立会		AW00・01			電気設備 (ハンドホール新設)	8.22	0.85~0.9	造成土内
17	立会		AW02			〃(既存ポール灯移設)	9.8	0.97	造成土内
18	立会		AZ04			中庭植栽移植	7.14・17	0.5~0.7	造成土内
19	立会	津島北	AY04	教	総合研究棟(教育系)改修工事(教育学部本館)	耐震ブレース部分掘削	8.11	0.85	既設内
20	立会		AZ05			側溝新設・外部シャフト基礎など	12.2・11	0.67~0.9	側溝新設部で近代包層確認
21	立会	津島北	AY03・AZ03・BA03	教	総合研究棟(教育系)改修電気設備工事	建柱掘削	8.1	2.0	3地点掘削し、北地点では黒色土みられず
22	立会		AY04			接地極埋設	10.23	1.7~1.78	古代層下に溝もしくは河道の埋土とみられる砂層を確認
23	立会		AY05			都市ガス設備	10.6	0.8~1.15	近世層まで確認
24	立会	津島北	AY05	教	総合研究棟(教育系)改修機械設備工事	屋外排水管	11.14	0.6	造成土内
25	立会		AY04			給水及び消火配管	10.29・11.7	0.6~0.96	造成土内
26	立会		AZ03			都市ガス設備	12.25	1.2	GL-0.95mで黒色土を確認

27	立会	津島南	BB12	KDDI	KDDI無線基地局新設工事	管路	9.22・24・25	0.7～1.21	近世層まで確認
28			BB12			建柱		1.8	灰褐色砂質土層まで確認、黒色土未確認
29	立会	津島北	BB05～10	事	総合教育棟Ⅱ期（共通教育）改修電気設備工事	高圧ケーブル埋設配管	10.9	0.7～0.85	造成土内
30	立会	津島南	BF12	施	南北道路水道管復旧工事		10.24	0.7	造成土内
31	立会	津島南	BF15	事	農学部水道管復旧工事		10.24	0.9	造成土内
32	立会	津島南	BB04	事	プール系統水道メーターボックス取設工事		11.7	0.9～1.5	中世層まで確認
33	立会	津島南	BJ17	事	南宿舍電柱設置工事		12.1	2.0	およそGL-1.2～1.5mで黒色土確認
34	立会	津島北	AV8・7	工	工学部10号館電気工事		12.4	0.6～1.1	既設内
35	立会	津島北	AU03～AX03	生協	大学生協福利厚生施設棟新築工事	仮電柱設置	12.8	1.0	10地点を掘削し、2地点で近代層まで確認
36	立会		AX04			基礎杭設置	12.24・26	1.0	既設内
37	立会		AX04			給水管	2.17	0.88～1.15	近世層まで確認
38	立会		AX04			玄関設置	2.17	0.88	近代耕作土層まで確認
39	立会		AX04			ガス管	2.18	0.85～1.21	中世層まで確認
40	立会		AX05			外灯移設	3.5	1.1～1.2	2地点掘削し、古代層まで確認
41	立会	津島北	AU13 AV13	図	中央図書館他耐震改修工事	仮電柱設置	1.19	0.6～0.8	3地点掘削し、造成土内
42	立会	津島北	AW00～01	事	新技術センター公共下水道接続工事		2.2～4	0.85～1.75	中世～近代の里境を示すとみられる南北溝4条を検出 黒色土上面まで確認
43	立会	津島北	AY01	教	教育学部体育館他耐震改修工事	動物室	2.16～17	0.85	黒色土上面で弥生時代の水田畦畔を確認
44	立会	津島北	AY03 BA03	教	教育学部体育館他改修機械設備工事	仮電柱設置	2.3	1.2～1.7	2地点掘削し、北地点では中世層まで、南地点では東西溝の埋土を確認
45	立会		AY02			消火配管切替	3.19	0.8	造成土内
46	立会		AY03			ガス管	3.10～11・19	0.8～1.2	近世層まで確認
47	立会		AY03			給水配管	3.10・13	0.35～1.07	近世層まで確認
48	立会		AZ01			動物室周囲給水・排水・ガス管	3.2	0.6	既設内
49	立会	津島北	AY02	教	教育学部体育館他改修電気設備工事	接地極埋設	3.5・16	0.3～1.7	古代層まで確認
50	立会	津島北	AY02			埋設電線管	3.5	0.3	造成土内
51	立会	津島南	BF15・17	農	農学部東屋設置工事		2.26～27	0.7	造成土内
52	立会	津島南	BB10～11	事	大学会館他改修工事	一般教育講義棟ガス設備	3.2～3	0.7～1.2	GL-1.0m以下で礫層、土坑1基、溝2条を確認
53	立会	津島北	AV04～06 AW04	工	工学部屋外ガス配管改修工事		3.16～19	0.8～1.48	一部で中世層まで確認
54	立会	津島北	AU08 AX08	工	工学部カーブミラー設置工事		3.30	1.3	2地点を掘削、北地点ではGL-0.5m以下で岩盤が露呈、南地点では近代層まで確認

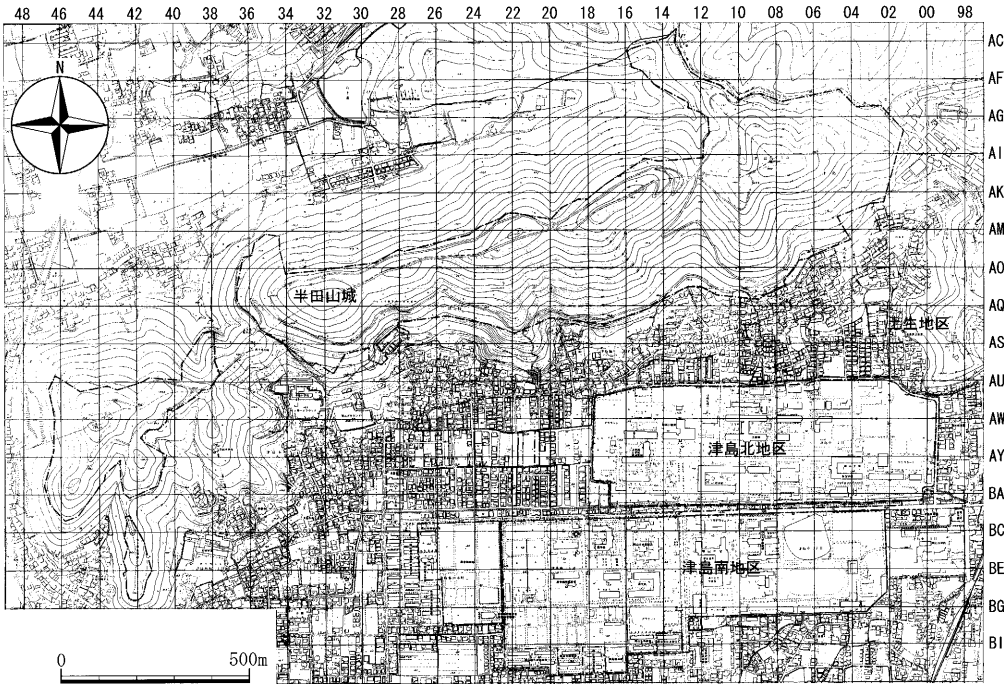
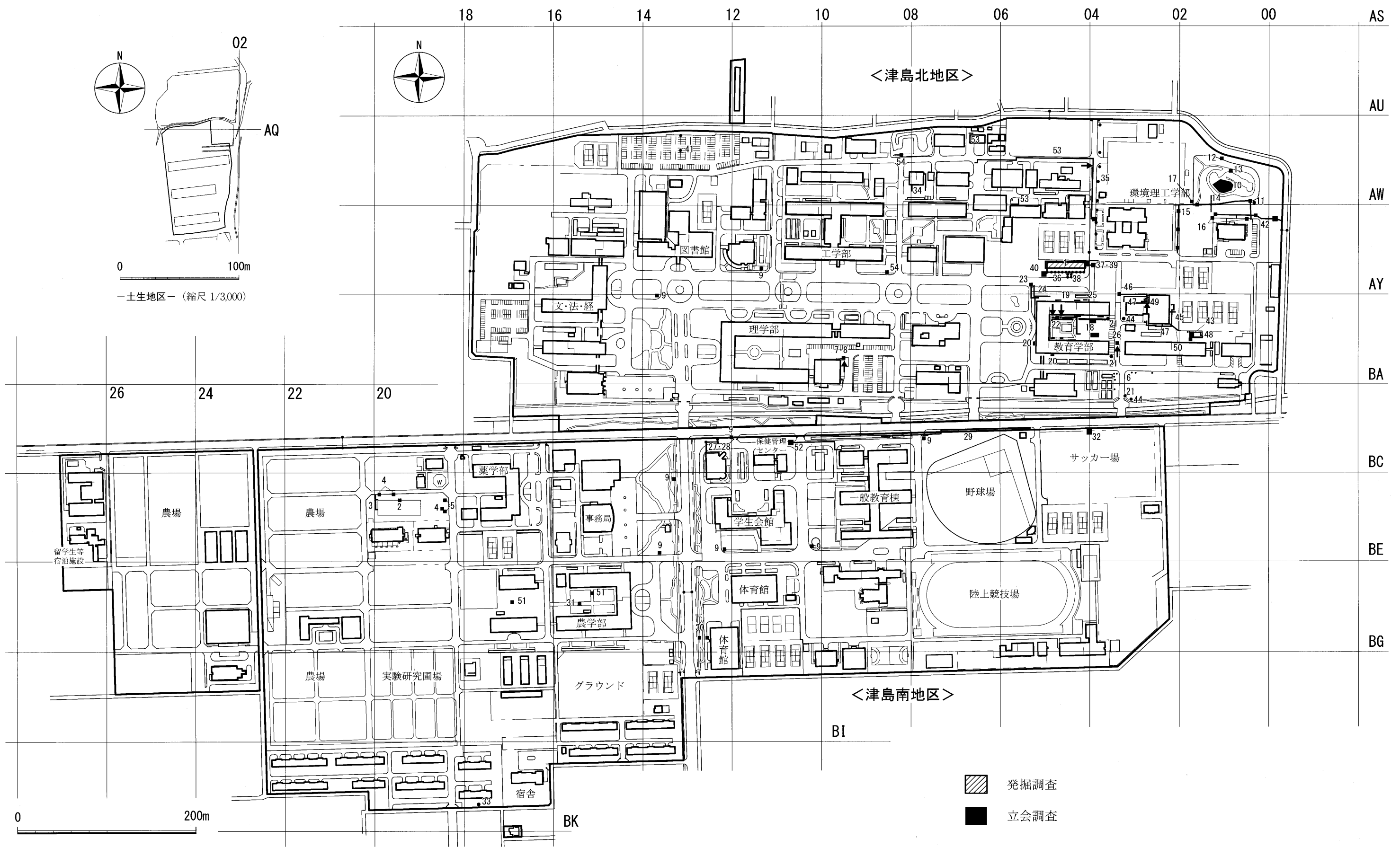


図29 津島地区全体図（縮尺 1/20,000）



発掘調査
立会調査

※番号は表1の調査番号に対応する。

図30 2008年度の調査地点【1】－津島地区－（縮尺 1/4,000）

第2章 鹿田遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要

1. 鹿田遺跡第19次調査（歯学部渡り廊下新営：鹿田AW～AY22～23区）

a. 調査の成果

弥生時代後期・古墳時代後期・古代・近世の遺構・遺物を検出した。そのうち、弥生時代後期では、土器・礫で被覆され、微高地から河道に向かって構築された堤状の立体的な構造を有する特異な遺構である「方形高まり」を確認した。「方形高まり」の頂部には貝塚が形成されているうえ、盛土内には壺棺・焼土遺構が構築されている。各種の遺構が複合的に確認されることも本遺構の特異性を示す。また、河道に向かい構築されるという立地上の特徴からは、川との関係を強く想起させる遺構でもある。このような遺構の類例は管見になく、その機能や役割については明らかでない点も多いが、鹿田遺跡は瀬戸内海や旭川に近接した位置に立地する水上交通の利便性に富んだ環境にあり、本調査の成果が臨海性集落としての鹿田遺跡の性格を考えるうえで重要な資料となる。

古墳時代後期では土坑と溝を確認した。これらの遺構から出土した遺物はこれまでの鹿田遺跡の調査で知られていた古墳時代後期の遺構・遺物よりもやや古いものである。古代では蹄脚硯脚部破片が出土した。蹄脚硯は都城や国府等、全国的にも出土する遺跡が限られている。今回出土した蹄脚硯は藤原摂関家殿下渡領である鹿田庄の成立を考えるうえでも注目される。

調査期間：2008年6月26日～9月12日

調査面積：80㎡

調査担当：野崎貴博（主任）・山本悦世・池田晋・岩崎志保・光本順

主な遺構・遺物：＜弥生＞「方形高まり」1基（貝塚1基・壺棺1基・焼土遺構2基を含む）・土坑1基・溝2条・弥生土器、＜古墳＞溝5条・土坑3基・須恵器、＜古代＞ピット3基・蹄脚硯、＜近世＞土坑2基

b. 調査の経過

岡山大学病院外来診療棟と歯学部棟を結ぶ渡り廊下の立体交差化が計画され、橋脚基礎構築のための掘削が必要となった。これまでの調査により、外来診療棟周辺では弥生時代以降、遺構・遺物が濃密に分布していることが明らかとなっている。また、本調査地点では1983年度の立会調査の際に弥生時代後期の土器や分銅形土製品の出土、貝層の堆積などが確認されていた。そこで、対象面積は狭小であったが、発掘調査を実施することとした。

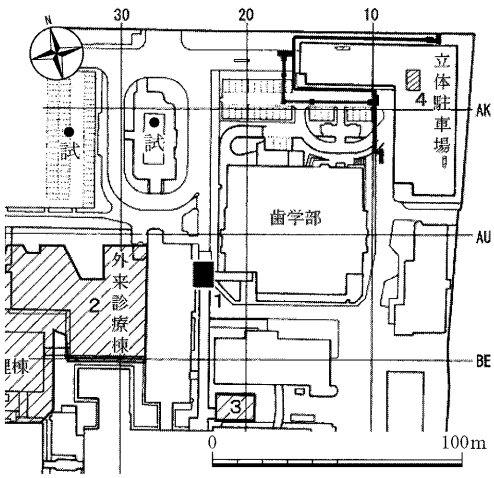
まず、2008年6月16～25日まで重機による表土掘削を行った。発掘調査は6月26日から実施し、近世、古代、古墳時代、弥生時代の遺構・遺物を確認して、9月12日に終了した。その間、予想以上に濃密な内容を確認したため、7月からは調査員3名、8月中旬以降は調査員5名の体制をとった。調査区のほぼ全域で検出した弥生時代後期の土器・礫群については、8月7、8日にレーザーによる三次元計測を実施し、微細な位置情報の網羅的な採集を行った。なお、8月9日に現地説明会を実施し、約100名の見学者があった。

c. 調査の概要

(1) 調査地点の位置 (図31)

本調査区は岡山大学鹿田地区の中心部よりやや北東に位置し、西に外来診療棟地点（第1次調査：弥生時代中期～中世の集落を確認）が、南にNMR-CT室地点（第2次調査：弥生時代後期～古墳時代初頭、古代～中世の遺構を確認）があり、本調査区の西から南にかけては弥生時代中期以降、核となる集落が展開した微高地が広がっていたことが知られる。

一方、本調査区の北～北東部では、立体駐車場地点（第16次調査）や周辺の試掘調査の成果から、中世以前には深い谷や河道などの低地部が広がっていることが判明している。中世以前、本調査区は集落が展開する安定した微高地と深い谷状の地形が入り込む低地部の中間に位置していることとなる。



1. 第19次調査（本調査地点・歯学部渡り廊下）
2. 第1・5次調査地点（外来診療棟・管理棟）
3. 第2次調査地点（NMR・CT室）
4. 第16次調査地点（立体駐車場）
試：試掘地点

図31 調査地点の位置（縮尺 1/3,000）

(2) 層序 (図32・33)

調査区北・南・東辺と、調査区中央に南北方向の土層観察用土手を設定して堆積状況を確認した。ここでは北・南壁、南北中央断面で確認した本調査区の基本土層を示す。

- 1層 近・現代の造成土で、1922（大正11）年の医科大学設立以降の盛土である。特に西側の外来診療棟側に造成土が高く盛られている。上面の標高は約2.9～3.4mである。
- 2層 明灰白色砂質土である。やや砂質が強い。上面の標高は約2.0mである。近代層と考えられる。
- 3層 灰茶褐色砂質土である。調査区北部の一部で確認し、上面で古墳時代後期の溝と土坑を検出した。古墳時代後期を下限とする土層である。
- 4層 黄茶褐色砂質土である。上面の標高は1.6～1.88mで、調査区の北に向かってやや下がる。調査区北半では厚く堆積する。古墳時代の土層と考えられる。
- 5層 灰～灰茶褐色砂質土である。上面の標高は1.37～1.67mであり、南から

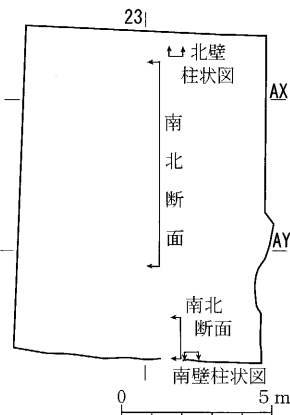
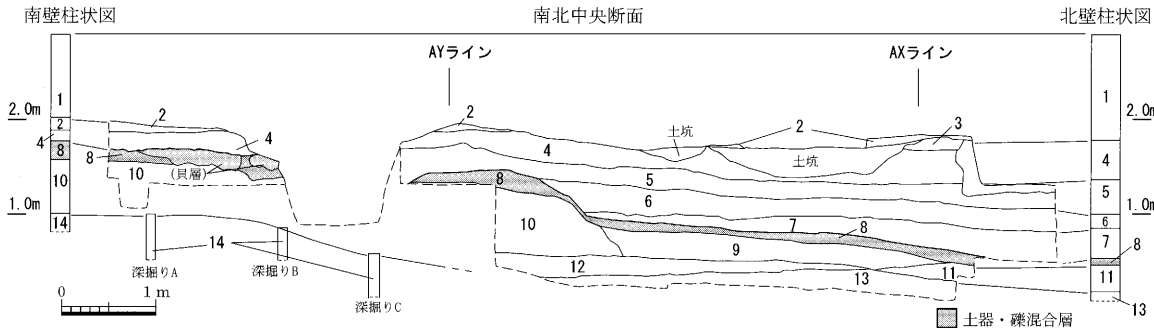


図32 断面の位置（縮尺 1/250）



- 1. 造成土
- 2. 明灰白色砂質土
- 3. 灰茶褐色砂質土
- 4. 黄茶褐色砂質土
- 5. 灰～灰茶褐色砂質土
- 6. 明灰茶褐色砂質土
- 7. 淡灰茶褐色砂質土
- 8. 土器・礫混灰褐色砂質土
- 9. 淡灰褐色砂質土
- 10. 明灰褐色砂質土
- 11. 暗灰色粘質土
- 12. 灰色・灰褐色粘質土
- 13. 青灰色～灰色粘質土
- 14. 明茶褐色～灰茶褐色砂質土

図33 土層断面・柱状図（縮尺 1/80）

北に下がる。5層が確認されなかった調査区南側では削平された可能性がある。遺物の出土はないが、古墳時代初頭から形成された土層と考えられる。

6層 明灰茶褐色砂質土である。上面の標高は1.0～1.36mであり、南から北に下がる傾斜を有している。「方形高まり」高まり部の周囲に堆積する土層である。遺物の出土はないが、古墳時代初頭の土層と考えられる。

7層 淡灰茶褐色砂質土である。上面の標高は0.83～1.07mである。南から北に下がる傾斜を有する。遺物の出土はないが、古墳時代初頭の土層と考えられる。

8層 土器・礫混灰褐色砂質土である。含まれる土器には、弥生時代後期から古墳時代初頭までのものがみられる。「方形高まり」の外表を形成する盛土である。上面の標高は0.55～1.7mである。弥生時代後期～古墳時代初頭の土層である。

9層 淡灰橙色砂質土である。「方形高まり」高まり部の端部周辺に堆積しているが、調査区北壁までは延びない。「方形高まり」の基部を覆う盛土である。上面の標高は0.5～0.87mである。弥生時代後期の土層である。

10層 明灰褐色砂質土を主体とする土層である。「方形高まり」高まり部を形成しており、ブロック状の土層が積み上げられている状況から盛土と判断した。上面の標高は約1.2～1.55mである。弥生時代後期の土層である。

11層 暗灰色粘質土で、木質を含むことや、グライ化した土壤状態を示すことから、低湿地状の地形の堆積土であると考えた。弥生時代後期の土器を含む。上面の標高は0.42～0.5mである。弥生時代後期の土層である。

12層 灰色～灰橙色粘質土である。白色細砂ブロックを含む。「方形高まり」高まり部端部周辺と、高まり部盛土である10層の下位に堆積し、調査区北壁までは分布しない。上面の標高は0.42～0.6mである。

13層 青灰色～灰色粘質土で、グライ化した土壤である。整地以前の低湿地の堆積層であると考えられる。上面の標高は0.17～0.42mである。

14層 明茶褐色～灰褐色砂質土である。マンガンの集積が発達している。上面が硬く、微高地側の基盤層上面と認識した。上面の標高は0.85～0.99mである。微高地部の基盤層である。

(3) 遺構と遺物

①弥生時代 (図34)

弥生時代の遺構として、「方形高まり」、溝、土坑、杭を確認した。「方形高まり」では、頂部や盛土内で貝塚、壺棺、焼土遺構を検出した。

「方形高まり」 調査区南東の高まり部から北半の低位部で確認した土器・礫で覆われる特異な遺構で、調査区外へと広がる。盛土で形成される高まり部から低位部まで、土器・礫の堆積が途切れずに連続しており、高低差をもつ一体的な構造物であると考えている。そこで、ここでは土壇状の高まりを「高まり部」、高まりの周辺部を「低位部」と呼称し、「方形高まり」をそれらの総称として用いたい。

高まり部は、方形の平面形を呈し、南端から北北西に向かって突堤状に延びる。調査区内で確認できた規模は長さ約6m以上、幅約5m、高さ約0.8mである。頂部は南北約4.5m、東西約2.3mの広さを有する平坦面となっており、貝塚が形成されている。

外表を覆う土器・礫の厚みは、高まり部平坦面では約40～

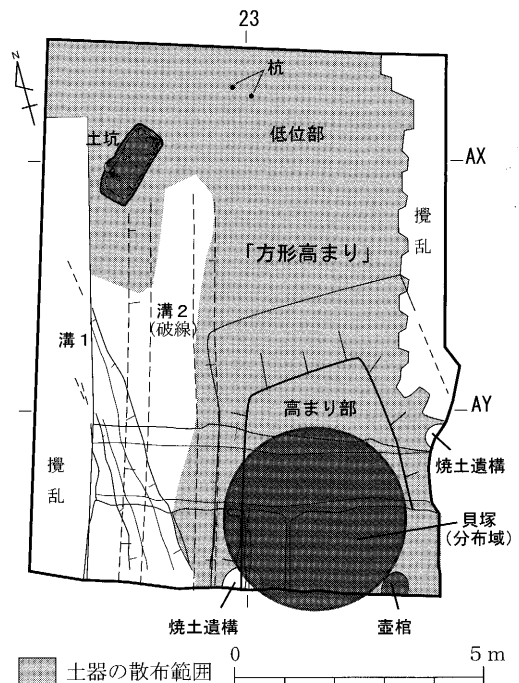


図34 弥生時代遺構配置模式図 (縮尺 1/150)

50cm、北側に広がる低位部では10~20cmを有する。これらの土器は壺・甕・高杯・鉢を主体とし、器台や製塩土器を含む器種構成である。時期的には弥生時代後期から古墳時代初頭のものを含んでおり、土器・礫混合層が長期にわたって形成されたことを示す。なお、土器・礫の量は約230箱（1箱：容量約30ℓ）にのぼる。

この土器・礫混合層を除去したところで、壺棺1基・焼土遺構2基を確認した。「方形高まり」の構築が祭祀や儀礼行為を織り交ぜながら進化したことをうかがわせるものである。頂部に形成された貝塚や土器・礫の被覆も合わせ、各種の遺構が複合的に形成されていることも特徴といえる。以下、「方形高まり」を構成するこれらの遺構について個別に記載する。

・貝塚（図35）「方形高まり」頂部に形成される。規模は東西約3m、南北約4mで、貝層の厚さは約0.2~0.3mである。シジミ・ハイガイを主体とし、カキや巻貝を少量含んでいる。一部に同一貝種の集中部もあり、貝塚の形成過程を考察する材料となる所見も得られている。その他、魚骨や植物の種子などの資料もわずかに出土した。

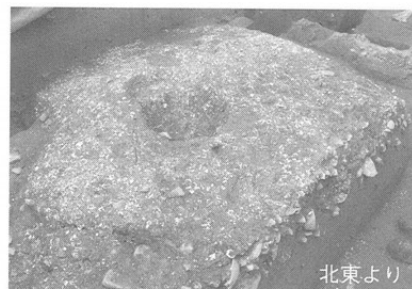


図35 貝塚検出状況

・壺棺（図36）土器・礫混合層を除去した段階で確認したが、掘削面のプランは不明瞭である。弥生時代後期前半の大形の壺を身に、大形の鉢を蓋に用いている。「方形高まり」の形成された時期を考えるうえで重要な資料である。



図36 壺棺出土状況

・焼土遺構 2基の焼土遺構は、土器・礫混合層を除去した段階で検出した。高まり部の東斜面際、および南西斜面際に1基ずつ構築されている。いずれも形状は不明瞭なうえ、調査区外へと延びるため正確な規模は明らかでない。南側の焼土遺構の平面形は不整形であるが、東西約1.8m、南北約1.2m以上の規模を有する。東側の焼土遺構は大きく攪乱を受け、残存部分の規模は、南北約0.75m以上、東西約0.65m以上で、不整な楕円形を呈する。東壁断面では、炉壁状に焼きしまった大型の焼土塊を多く含む層が認められた。

溝 調査区西半で上下に重複した2条の溝を検出した。溝1は北北西-

南南東方向に掘削された溝である。標高約0.9~1.0mで検出した。溝の方向は、「方形高まり」の軸方向に合致しており、両者が同時期に存在し、有機的な関係を持っていたことも想定される。幅約0.9~1.1m、深さ約0.5mで、断面形はU字形を呈し、法面は底部から急角度で立ちあがる。溝2は検出面の標高が約1.3m前後である。幅約1.5m、深さ約0.5~0.7mで、断面形は半円形を呈している。溝2の通る範囲は土器・礫の空白域にあたるが、これは溝2の構築により、高まり部西斜面や低位部の一部が失われたもので、本来は土器・礫が分布していたと考えられる。

土坑 調査区北西の低位部に位置する。土器・礫層を除去後、標高約0.4mで検出した。隅丸方形の平面形で浅い箱形の断面形を呈し、底面は平坦な土坑である。規模は長さ約1.6m、幅約0.8m、深さ約0.25mをはかる。埋土は暗褐色の粘質土が主体で土器片・礫・植物遺体を含む。

杭 杭は調査区北側の低位部で2本確認した。13層上面で検出し、検出標高は約0.3mである。杭の先端は標高約-0.1m前後にいたっている。本調査区では他に杭は確認されておらず、検出された杭が2本と少ないことから、護岸を目的とした杭列とは異なるものとみられる。

②古墳時代（図37）

古墳時代後期の遺構として、南北方向に走向する溝5条、土坑3基を検出した。

溝 調査区西半で繰り返し掘削された溝5条を検出した。溝は3・4層上面で2条、4層で3条を確認している。

幅約0.7～0.9m前後、深さ約0.25～0.5m前後で、断面形は半円形を呈している。6世紀後半～末にかけての須恵器が出土している。

土坑 調査区北半で3基を検出した。いずれも側溝等によってその多くを失っており、全形を確認し得ていない。そのうち、焼土や炭化物片を含む土坑は、平面的には周囲の土層と埋土の区別が困難で、炭・焼土の散布範囲から土坑の外縁を推定した。南北約1.7m、東西約1.3m程度、深さ約20cmで、古墳時代後期の須恵器を包含していた。6世紀後半代の須恵器であり、溝と同じ時期の所産である。

③古代 (図37)

古代の遺構の可能性のあるものとして、ピットおよび溝状の落ちがある。ピットは調査区南東区画で3基を検出した。検出面は4層であるが本来の構築面は削平により失われている。平面形はいずれもやや不整な円形で、径は約0.3～0.5m、深さ約0.2mである。調査区東辺で検出した溝状の落ちは、攪乱が各所におよんでおり、断続的に残存していたものである。検出面の標高は約1.7mで、幅約0.6m以上、深さ約0.2mをはかる。断面形は浅い皿状を呈している。埋土内から蹄脚硯脚部破片1点が出土した。

④近世 (図37)

調査区北端で土坑2基を検出した。楕円形の平面形を呈し、規模は直径約0.5～1.0m、深さは約0.2～0.4mである。埋土はいずれも明灰褐色砂質土である。1層を除去した4層上面で検出したが、近代以降の造成により本来の構築面は削平により失われており、埋土の特徴から近世に属するものと考えられる。

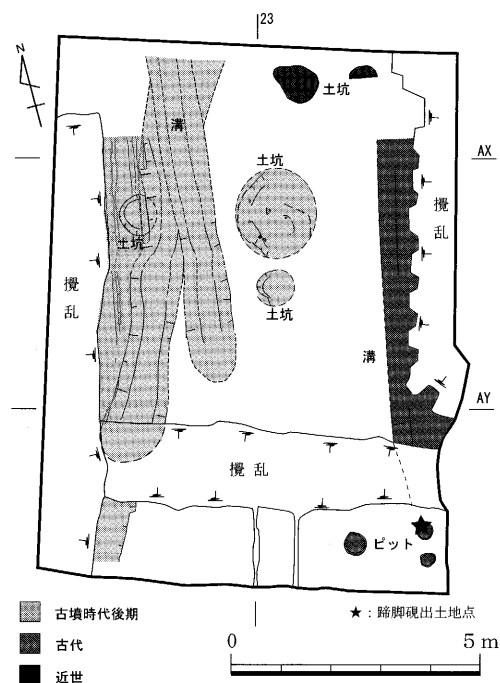


図37 古墳時代後期～近世の遺構 (縮尺 1/150)

d. まとめ

本調査地点は狭小な調査範囲であったが、重要な成果を得ることができた。まず、弥生時代の調査成果として、「方形高まり」の確認が挙げられる。「方形高まり」の構造的な特徴、立地の特徴は以下のようにまとめられる。

構造的な特徴として、盛土によって高まり部が構築されること、高まり部から低位部まで連続的に広がる土器・礫混合層によって被覆されること、高低差を有する立体的な構造物であることが挙げられる。さらに内部には壺棺や焼土遺構などの遺構が構築されたり、頂部に貝塚を形成したりするなど、さまざまな遺構が複合的に形成されていることもこの遺構の特徴である。

立地の特徴としては、集落のある南の微高地から北の河道に向かって突き出すようなかたちでつくられることが挙げられる。河道に向かってつくられた「方形高まり」は、川との関係を強く想起させる遺構といえる。さらに、鹿田遺跡は東を流れる旭川には至近の位置にあり、旭川を経由して瀬戸内海に至ることが可能な水上交通の利便性に富んだ環境にあるため、この「方形高まり」の機能や役割の解明が臨海性集落としての鹿田遺跡の性格を考える手がかりとなろう。今後、調査成果の分析を進め、「方形高まり」の機能や役割を明らかにしたい。

古代の遺構はピットと溝状の落ちのみで、貧弱な内容であったが、蹄脚硯の出土が特筆される成果である。蹄脚硯は都城や官衙に関する遺跡から出土する場合が多い。古代以降の鹿田遺跡の性格や「鹿田庄」の形成史を考えるうえで重要な資料となる遺物の出土といえよう。

なお、本調査の成果は整理途上にあり、本報告は現時点での暫定的な認識に基づくものである。(野崎貴博)

第2節 立会調査の概要

1. 調査の実施状況

2008年度の鹿田地区における立会調査の実施件数は6件である。そのうち4件は中央診療棟の新営および西病棟の取り壊しに関連する基幹整備工事である〈調査番号3～6〉。これらの工事では概して掘削深度の大きいものはなかったが、東側に隣接する第18次調査の成果を補足するデータを得ることができた。以下では、これらの基幹整備工事、および近世土坑が2基確認された基礎医学棟一部とりこわしに伴う支障ガス配管移設工事〈調査番号7〉の成果を報告することにしたい。

2. 基幹整備（西病棟とりこわし他）工事：BQ24～CD27区〈調査番号3～6〉

a. 調査地点の位置と経過

本調査は、4件の工事で構成され、仮設渡り廊下設置〈調査番号3〉・平板載荷試験〈4〉・現場打ち集水桝〈5〉については、中央診療棟と南病棟の間に位置し、ライトコート〈6〉については中央診療棟建物内に位置する（図38）。一連の工事は、西病棟の取り壊し後から新中央診療棟の建設が完了するまでの時期の仮設渡り廊下の設置と、それらに関連する環境整備の一環として計画されたものである。

仮設渡り廊下地点については、3.4m幅で現地表面から深さ0.75mの掘削が計画され、掘削深度が深くないこと、恒久的な施設ではないことから立会調査での対応となった。現場打ち集水桝地点については、既設管路によってすでに攪乱されていることが予想されたものの、既設管の撤去および桝の新設にあたって極力掘削範囲が狭くなるように協議し、桝部分は3.4×1.8mの範囲を現地表面から1.4mまで掘削することとなった。ライトコート地点は、中庭として利用していた場所に2階建て仮設渡り廊下の延長部の基礎を設置することになったために、4.3m四方の範囲に現地表面から0.75mでの掘削が必要となったものである。既存の建物に囲まれた狭い空間内での工事となったため土止め措置が必要となり、工法によっては地下の遺構・遺物、包含層が破壊されることが懸念された。

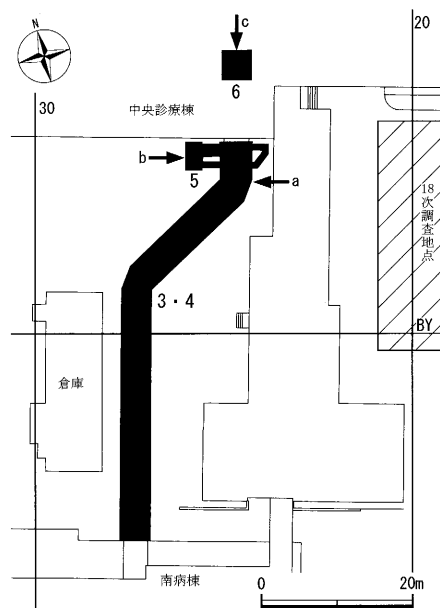


図38 調査地点の位置（縮尺 1/1,000）

土止めの工法および調査方針について協議を行った結果、土止めについては掘削深度がそれほど大きくないためベニヤ合板を径6cmの鋼管で固定して措置可能であり、地下への影響は最小限に抑えられること、仮設撤去にあたっては包含層を破壊せずに実施可能との回答を得、これらを確認の上、立会調査での対応となった。調査は、調査員の立会のもと重機で掘削を進め、断面記録の済んだ壁面から先述の土止め措置を行った。掘削完了後に遺構精査を実施し、下層の堆積状況確認のためのサブトレンチの掘削・記録までを行い、調査を終了した。

調査の結果、渡り廊下地点では南側の大半が西病棟および旧売店の基礎による既干渉範囲に収まっていたものの、北側の一部で近世層までの堆積状況を確認した。現場打ち集水桝地点についても大部分は既設管によって破壊されていたが、壁面の一部で包含層を確認した。ライトコート地点では、遺構は確認できなかったものの、湿地性堆積層の拡がりを確認した。なお、各地点の調査期間は表2にまとめている。

b. 調査成果

本調査地点では、遺構は確認されなかった。
また、4.3m四方の範囲で調査を実施したライトコート地点では北壁・西壁で包含層を連続的に観察できたものの、単純な水平堆積で調査範囲内での変化に乏しいため、柱状図で成果をまとめた（図39）。記載断面の位置は図38に示す。

a 地点では現地表面から0.95mまで掘削し、近世層までを確認した。1層が近代以降の造成土である。2・3層は近代の堆積土で、第18次調査地点の基本層序〈2層〉に相当す

る¹⁾。4層は近代の耕作土で、グライ化が著しい。〈3層〉に対応する。5・6層は近世の堆積層と考えられる。5層には土器小片が含まれており、第18次調査の〈4 a 層〉に対応するとみられ、上面の標高も約1.6mとほぼ一致する。b 地点では標高1.45mより上層は既設埋土、それより下層で包含層を確認した。2・3層は色調から第18次調査の〈5層〉に対応するとみられ、古代後半～中世前半の層と考えられる。4層はマンガン特徴的に含む土壌化層で、古墳時代初頭の層である。5層は基盤層までの漸移層とみられる。4・5層はそれぞれ〈6 a 層〉・〈6 b 層〉に対応すると考えられる。なお、4層の上面は標高1.2mを測り、第18次調査地点と比較して10cmほど低くなる。a 地点と b 地点の層序を上下につなげれば、本調査地点周辺の基本的な堆積状況は理解できよう。

一方、ライトコート地点（c 地点）では上記の2地点とは異なる堆積状況が確認された。1層は真砂土の造成土である。2層は部分的にしかみられず、ブロックを含むためやはり造成土と考えられる。3・4層は砂質土のブロックを含み、近代の耕作土に相当するとみられる。5層以下8層までは灰色・青灰色の粘土が互層となって堆積している状況が観察された。これらの堆積層は粘性が強く、とりわけ7層では生痕あるいは植物の根の痕跡とみられる黒色の小ブロックがよく含まれており、耕作土ではないと考えられる。これらの粘土層は、北壁、西壁、平面での観察の限り調査範囲全体に広がっており、遺構埋土の可能性は低い。本地点での遺物の出土はなかったため、各層の時期比定は周辺地点との対応関係で検討するしかないものの、層相・標高を比較しても本地点の堆積状況は鹿田遺跡で一般にみられる層序を示していない可能性が高い。現状では、近代の耕作土とみられる3・4層の堆積以前において湿地性の堆積が促進される環境が広がっていたと推測しておきたい。

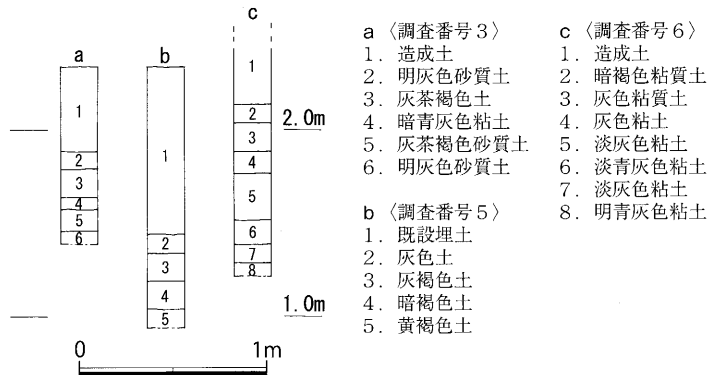


図39 各調査地点の断面柱状図（縮尺 1/40）

註1) 山本悦世 2008「鹿田遺跡第18次調査 A.中央診療棟建設地」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

3. 基礎医学棟一部とりこわしに伴う支障ガス配管移設工事：AL53～AP65区〈調査番号7〉

a. 調査地点の位置と経過

本調査地点は、鹿田地区の北西部に位置し、北側に医学資料室、南側に基礎医学棟がある（図40）。基礎医学棟建物北半部の取り壊しに伴ってガス配管の移設が計画されたことが調査原因である。東端の既設管への接続部では1.5m四方の範囲で道路面からの深さ1.0mまで、新設の管路部では幅0.5mで深さ0.8mまで総長約20mの掘削が計画された。掘削の結果、接続部では既設管撤去のために北に0.8mほど範囲を拡張することとなった。

調査の結果、東端の接続部で土坑2基および近世層までの堆積を確認した。それ以外の部分は、造成土あるい

は既設埋土の範囲内であった。調査期間は2008年11月10～14日である。

b. 調査成果

(1) 層序 (図41)

本調査地点では、東端の既設管への接続部で6層の堆積を確認した。北壁・東壁とも攪乱されていたため、南壁の堆積状況を記載する。1層は近代以降の造成土である。2層は1cm未満の細礫および中砂を多く含む層で、洪水砂の可能性がある。3・4層は近代の耕作土とみられる。5層は近世の耕作土とみられる。6層は上面を確認しただけだが、マンガンを僅かに含んでおり、やはり耕作土と考えられる。時期は中世～近世を考えておきたい。

(2) 遺構 (図41)

土坑1 管路部の5層上面において、平面形のみを確認したものである。木杵を伴う円形の土坑で、野壺の可能性が高い。埋土は杵内が灰褐色土、掘り形内が淡灰褐色土である。管路部では5層の上に直接1層が堆積しているため、本来は2～4層から掘り込まれた可能性もある。したがって、時期は近世以降が考えられる。

土坑2 接続部の5層上面で検出した。確認範囲から円形の土坑になるとみられる。埋土は1層のみ確認し、暗灰褐色粘質土である。検出面から帰属時期は近世と考えられる。

本地点の成果は、既往の調査のない鹿田地区北西部において近世～近代の耕作地の拡がりを見推測させるものである。 (池田)

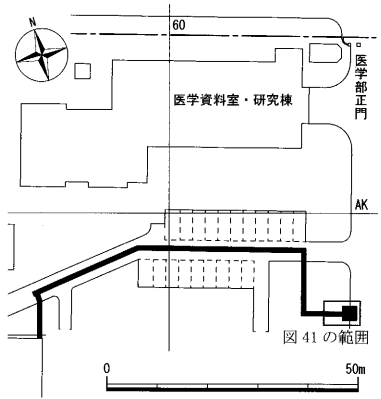


図40 調査地点の位置 (縮尺 1/1,500)

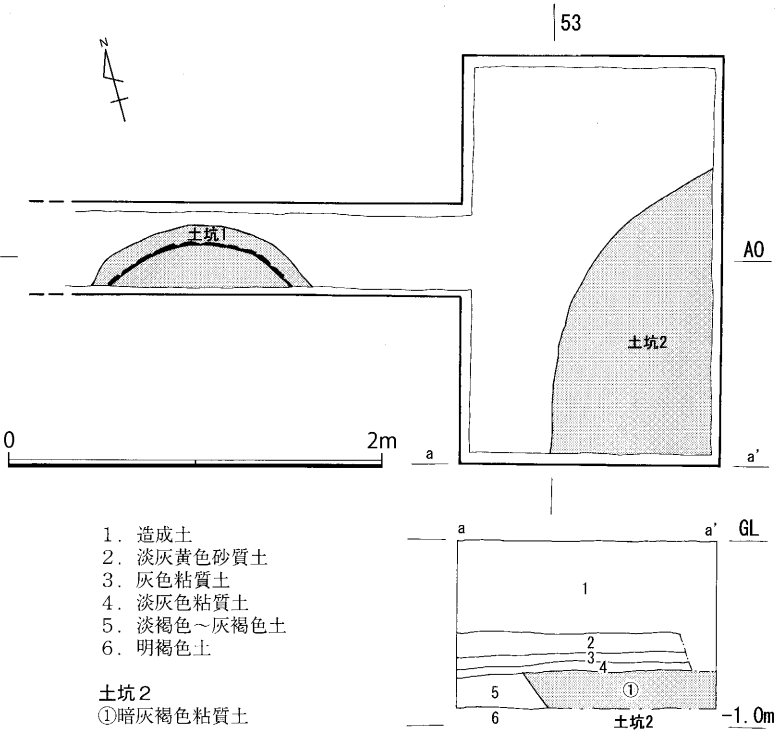
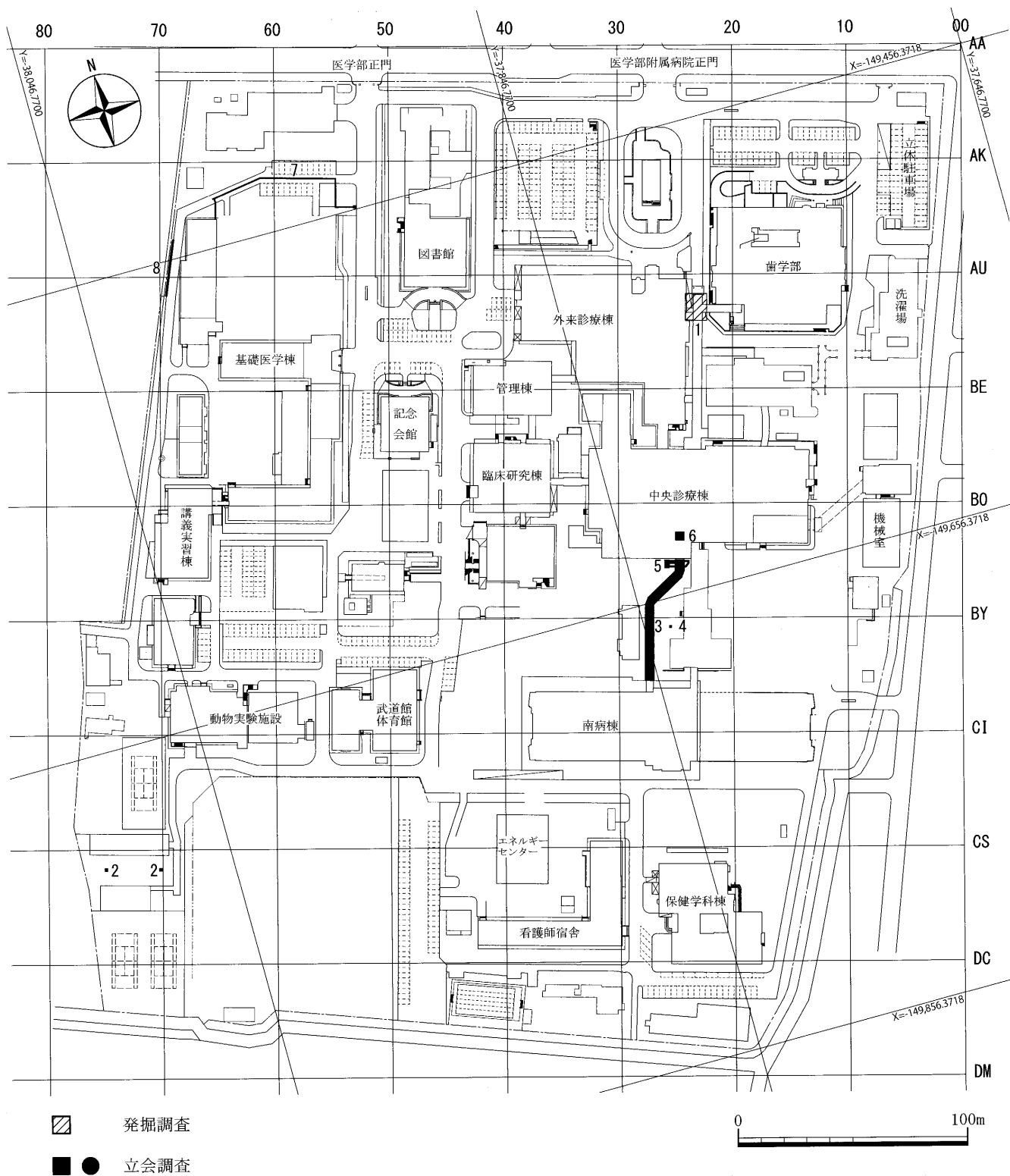


図41 検出遺構平・断面図 (縮尺 1/40)

表2 2008年度鹿田地区調査一覧

番号	種類	構内座標	所属	調査名称	細目調査名称	調査期間	掘削深度 (GL-m)	内容
1	発掘	AW～AY22～23	医病	歯学部渡り廊下新営に伴う発掘調査		6.26～9.12	3.4	弥生時代後期～近世の遺構・遺物、「方形高まり」・貝塚・壺棺などを確認、蹄脚礎が出土
2	立会	C T70・75	事	テニスコート地盤調査		8.19	0.7～0.8	造成土内
3	立会	BT24～CD27	医病	基幹整備 (西病棟とりこわし他)工事	仮設渡り廊下	10.29・11.14・18・20	0.75～0.85	近世～近代層を確認
4	立会	BT24～CD27			平板載荷	11.6	0.75～0.9	近世～近代層を確認
5	立会	BT24～25			現場打ち排水枡	11.10・14・19	0.98～1.4	弥生基盤層を確認
6	立会	BQ24 BR24			ライトコート	11.17～18	0.75	湿地性堆積層を確認
7	立会	AO53～54 AL54～AO54 AL54～61 AL62～AP65	医	基礎医学棟一部とりこわしに伴う支障ガス配管移設工事		11.10～14	0.76～1.0	近世層まで確認、土坑2基
8	立会	AR62～AP65	事	西側円障改修工事		09.2.23	0.62～0.66	既設内



※番号は表2の調査番号に対応する。

図42 2008年度の調査地点【2】－鹿田地区－（縮尺 1/2,500）

第3章 その他の地区の調査研究

第1節 試掘・確認調査の概要

1. 教育学部附属中学校校舎建て替えに伴う試掘・確認調査

a. 調査の経緯

岡山大学東山キャンパスに位置する岡山大学教育学部附属中学校で、校舎の建て替えが計画された。予定地に隣接する附属小学校では校舎建て替えに伴い2007年3月に試掘・確認調査を実施している。この試掘調査では4カ所に試掘坑を設定し（図43）、それぞれで約3mの深さまでの堆積状況を確認した¹⁾。その結果、北西の1カ所で近世～近代の溝、近世以前、中世に遡る可能性がある畦畔を確認した。それ以外の地点については、中世以前は湿地状の地形であったことがわかった。

この結果を受けて、今回の附属中学校建て替え予定地に2カ所の試掘坑を設定し（図43TP1・2）、調査を実施することとした。試掘・確認調査は2008年12月22日に実施し、調査員1名が担当した。

b. 調査の成果

(1) 調査地点の位置と経過（図43）

東山キャンパスは、岡山市の旭川東岸、操山山塊の西の山裾に位置する。同地に1910年（明治43年）に岡山県師範学校が移転して以降、学校用地として利用され、現在に至る。1910年以前については、前回の試掘調査の成果でも近代の水田層が確認されており、キャンパス一帯は水田として利用されていた。このことは明治期の地図上でも確認することができる。校舎は随時建て替え・増築が行われ、現在の中学校校舎のうち調査地点に近い北側の棟は1950（昭和35）～1952（同37）年に建設されたものである。新校舎は現在の中学校校舎の北側に計画された。調査は、建築範囲の東西に上面で2×3mの試掘坑を2カ所設定して実施した。西をTP1、東をTP2とする。それぞれ現地表面からの深さ2.3～2.4mまでの土層堆積状況を確認した。

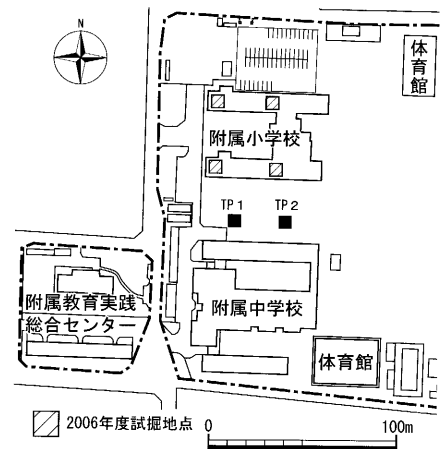


図43 調査地点の位置（縮尺 1/4,000）

(2) 層序と地形（図44）

本調査地点で確認された土層はTP1で13枚、TP2で10枚に分層した。いずれの層からも遺物の出土は見られず、時期については2006年度の調査成果も併せて推定した。各層は土質によって大きくV群にまとめた。I群：造成土、II群：近代の粘質土層、III群：近代以前とみられる茶褐色粘質土を主体とする層、IV群：灰褐～茶灰色粘質土を主体とする層、V群：灰色を呈する粘土層である。

I群（TP1－1層、TP2－1層） 岡山県師範学校が当地に移転してきた1910（明治43）年以降の造成土である。地表面の標高は3.06mで、層厚100cmを測る。TP1東壁では土管が埋設されており、1947（昭和22）年時の建物建設工事に伴うものと考えられる。

II群（TP1－2・3層、TP2－2・3層） 岡山県師範学校移転以前の近代の土層と考えられる。このうちグライ化により暗青灰色を呈する粘質土層（TP1－2・3層、TP2－2・3層）は水田層と考えられる。上面の

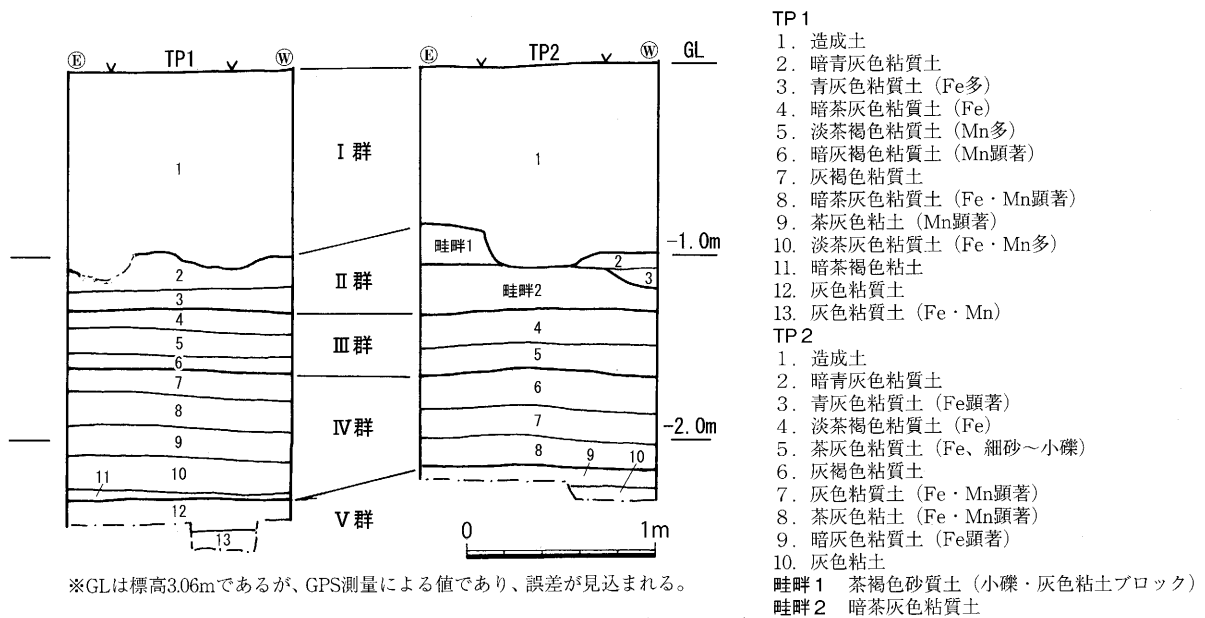


図44 土層断面図 (縮尺 1/40)

標高は2.06mである。TP1では2層の上面は後世の攪乱により凹凸があるが、その他の土層については水平堆積である。一方TP2のみで確認した茶灰色土層は畦畔（畦畔1・畦畔2）を成すものと考えられる。

Ⅲ群 (TP1 - 4～6層、TP2 - 4・5層) 茶褐色粘質土を主体とする土層で、近代以前の耕作土と考えられる。TP1では3枚に、TP2では2枚に細分した。Ⅲ群の上面の標高は1.76mを測り、水平に堆積する。

Ⅳ群 (TP1 - 7～11層、TP2 - 6～8層) 灰褐色～茶灰色を主体とする粘質土層で、鉄分・マンガンの沈着が認められており、水田層の可能性ある。標高1.35mを測り、水平堆積である。TP1では5枚、TP2では3枚に細分している。Ⅲ群・Ⅳ群はいずれも水田層の可能性があり、類似性の高い土層であるが、色調によって大別した。

Ⅴ群 (TP1 - 12・13層、TP2 - 9・10層) 灰色粘土を主体とする層である。上面の標高はTP1で0.81m、TP2で0.96mとTP1が少し下がっている。TP1・TP2ともに2枚に細分した。TP1 - 13層、TP2 - 9層では鉄分の沈着が認められる。

(3) 遺構 (図44)

TP2で南北方向の畦畔2面（畦畔1・畦畔2）を確認した。時期は近代のものと考えられる。

畦畔1は茶褐色砂質土で、やや粘性を帯びる。小礫、灰色粘土ブロックを含んでいる。上面の標高は2.21mを測る。調査区内で幅の確認はできなかったが、高さは25cmを測る。西側には幅40cm、深さ25cmを測る溝があり、畦畔の西側の脇溝にあたると考えられる。溝の底面の標高は1.96mである。溝の東側には本来畦畔が存在するはずであり、ここでは2層がその畦畔にあたる可能性が高いが、本調査区内では確定することができなかった。造成土で埋まっていることから、岡山県師範学校が移転する直前まで利用されていた耕作面であろう。

その下面の畦畔2は暗茶灰色粘質土で、鉄分を少し含む。上面が削平されているため高さの確認はできないが、上面の標高は1.9mである。3層を耕作土とする畦と考えられる。この他に遺構・遺物は検出されなかった。

c. まとめ

従来の知見に加えて、以上の状況から本調査地点は近世～近代に水田として利用されていた。今回、南北方向の畦畔を確認したことで東山地区の近代の水田区画について新たなデータを得られた。2006年度の試掘調査では、

近世～近代の東西方向の溝が確認されている。附属小学校敷地と北側の附属幼稚園との間の車道の位置が旧国道二号線から南に2町、2006年度確認の東西溝は同じく2町半の位置にあたっていることから、この東西溝が主要な区画となっていた可能性が考えられていた。しかし、南北方向の区画についてはこれまで手がかりがなく、今後の検討のための有益な資料が得られたといえる。(岩崎)

註

- 1) 野崎貴博 2008「教育学部附属小学校校舎建て替えに伴う試掘・確認調査」『紀要2006』
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

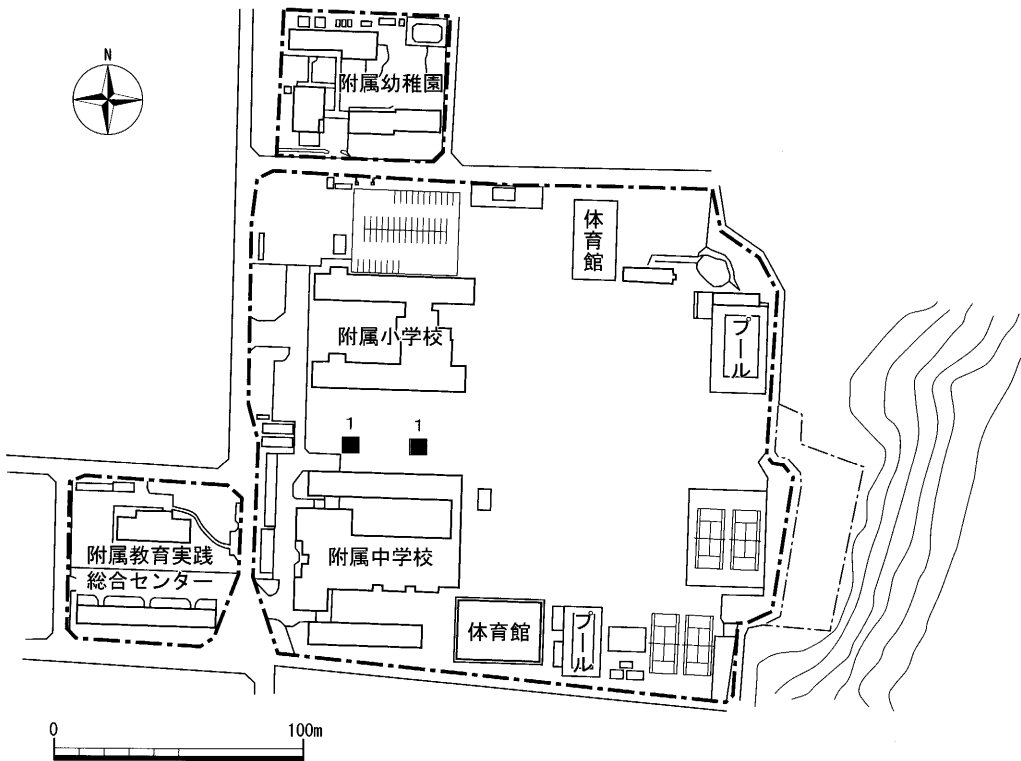


図45 2008年度の調査地点【3】－東山地区－（縮尺 1/3,000）

表3 2008年度東山地区調査一覧

番号	種類	所属	調査名称	調査期間	掘削深度	内容
1	試掘確認	教育	附属中学校校舎建て替え	08.12.22	2.4m	試掘坑2ヵ所設定、近代の畦畔確認

第4章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理・研究

1. 調査資料の整理

2008年度の調査資料の整理は、津島岡大遺跡第30次調査（岡山大インキュベータ）出土遺物の洗浄・注記、鹿田遺跡第9・11次調査（病棟）の古代末～中世土器の接合・復元、鹿田遺跡第13次調査（総合教育研究棟）の古墳時代初頭土器の接合・復元を実施した。そのほか、当初の事業計画には挙がっていなかったものの、津島岡大遺跡第31次調査（福利厚生施設東棟）の正報告を2009年度に刊行することになったために、2008年度において一部の整理作業を先行して実施した。

報告書の作成については、『津島岡大遺跡19』（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第25冊）を刊行した。『津島岡大遺跡19』は、岡山大インキュベータ新営に伴う津島岡大遺跡第30次調査（2007年度調査）の成果報告書である。同報告書では、古代の道路状遺構および中世以降の耕地利用の変化、弥生時代早期の遺物に関する成果を中心に報告をまとめた。（池田）

2. 調査資料の自然科学的分析

2008年度に実施した自然科学的分析は、津島岡大遺跡第30次調査の報告書作成作業に関連したものが中心となった。発掘調査は2007年度に完了しており、報告書刊行年度である2008年度に採取サンプルの分析を実施した。分析項目は、放射性炭素年代測定・珪藻分析で、(株)古環境研究所に依頼した。珪藻分析については、当センターにおいて今回が初めての実施となる。また、宮崎大学宇田津徹朗氏の科学研究費補助金によるプラント・オーバー分析に資料提供し（サンプル採取は2007年12月18日）、分析結果を寄稿いただいた。これらの分析結果の報告は、既刊の『津島岡大遺跡19』に掲載している。

そのほか、2008年度の整理作業に伴い、鹿田遺跡第13・15次調査出土の中世の木製品（約40点）、津島岡大遺跡第30次調査出土の近世～近代の水門部材（9点）を、森林総合研究所の能城修一氏に依頼し、有益な教示を得た。詳細な結果については、正報告を参照されたい。津島岡大遺跡第30次調査の分析結果については、紀要において後日報告を予定している。（池田）

3. 調査資料の保存処理

a. 木製品のPEG保存処理作業

2008年度における調査資料の保存処理としては、木製品のPEG保存処理作業の実施が挙げられる。

2007年8月9日から第8期の保存処理を開始しており、処理対象遺物は津島岡大遺跡第23次調査から出土した縄文時代の木材（河道出土の杭・流木）および同遺跡第15次調査で出土した弥生時代前期の杭（河道出土）である。PEG濃度は40%から開始し、1ヶ月に10%の濃度上昇を目安として作業を進めた（表4）。2008年5月にほぼ90%に達し、6月には最後のPEGを投入して95%とした。その後は、処理槽の蓋を開放した状態で残りの水分を飛ばし100%とした。第7期と同様に、8月に実施する博物館実習の講義の一環として、受講生の協力を得ながら4日間に分けて木製品を引き上げた。

表4 第8期のPEG保存処理工程

期	年 月 日	作 業 内 容
第8期	2007年8月9日	濃度 40%：処理開始
	2007年10月2日	濃度 50%
	2007年12月3日	濃度 60%
	2008年1月31日	濃度 70%
	2008年3月31日	濃度 80%
	2008年5月9日	濃度 90%
	2008年6月10日	濃度 95%
	2008年8月4・6・8・12日	濃度100%：博物館実習で引き上げ

表5 既往のPEG保存処理一覧

期	処理期間（延べ期間）	処 理 対 象 調 査
第1期	1992年2月～1993年11月 （1年9ヶ月）	鹿田遺跡第1次（附属病院外来診療棟）、第2次（NMR-CT室）
第2期	1994年6月～1996年8月 （2年2ヶ月）	鹿田遺跡第3次（医療短期大学部校舎）・第4次（医療短期大学部校舎周辺配管）・第5次（管理棟）、 津島岡大遺跡第3次（男子学生寮）・第5次（大学院自然科学研究科棟）・第6次（工学部生物応用工学科棟）
第3期	1996年12月～1999年6月 （2年7ヶ月）	鹿田遺跡第3次、津島岡大遺跡第3次・第6次
第4期	1999年7月～2000年12月 （1年5ヶ月）	鹿田遺跡第3次・第4次、津島岡大遺跡第3次
第5期	2001年1月～2002年3月 （1年2ヶ月）	鹿田遺跡第3次・第4次、津島岡大遺跡第3次・第9次（工学部生体機能応用工学科棟）・第10次（保健管理センター）・ 第12次（附属図書館）・第13次（福利厚生施設北棟）
第6期	2002年11月～2004年8月 （1年10ヶ月）	鹿田遺跡第7次（医学部基礎棟）、津島岡大第19次（コラボレーション・センター）・第22次（環境理工学部校舎Ⅱ期）
第7期	2005年11月～2007年8月 （1年9ヶ月）	津島岡大遺跡第23次・24次（文化科学系総合研究棟）

第9期として鹿田遺跡第9・11次調査出土木製品の処理を引き続き計画していたが、準備作業が間に合わず2008年度内に作業は開始していない。なお、2008年度は外部委託による保存処理の実施はなかった。（池田）

第2節 調査成果の公開・活用

1. 公開・展示

a. 第11回 岡山大学キャンパス発掘成果展「水と循環」

2008年度は、2009年1月8日～12日までの5日間、岡山大学創立50周年記念館会議室において、毎年恒例の岡山大学キャンパス発掘成果展を開催した。第11回目にあたる。見学者の数は308名を数える。

今回の展示会のテーマとして「水と循環」を取り上げたきっかけは、岡山大学構内に設定している「構内遺跡保護区」の場所に、環境理工学部が水循環施設（「誕生池」）を設置したことにある。同地点一帯では、発掘調査によって縄文時代の水辺遺構が調査されており、まさに、「水と循環」という点で過去と現代が合致した状況となったのである。また、現代社会において重大な課題となっている環境問題に関して、考古学的視点から取り組むことができるテーマではないかということから、従来とは異なった切り口による展示を目指すこととなった。ただし、そうした内容を十分に描き出すためには、考古学だけでなく自然科学系などを含む多分野の研究成果による多角的な取り組みが必要となるのであるが、時間的制約もあり、今回はその序章ともい



図46 「水と循環」広報ポスター

うべき展示内容にとどめることとした。

(1) 展示内容

会場展示では、環境の中で中心となる「水」に注目し、空（空気中）から山へ、そして平野を流れて海へという地球上における水循環の中に、人間の営みを組み込むような展示を目指した。水は、地面の上に存在する「地表水」と地面の下にもぐっている「地下水」に大別されることから、入り口部分で2つのコースに分かれる展示ルートを設定し、会場を回遊するように遺構・遺物の展示を行った。

「地表水」コースでは、「農耕」と「灌漑用水路」に特に注目した展示とした。本センターでは津島岡大遺跡において弥生時代前期以降の水田関連遺構の発掘調査を継続的に行っていたからである。こうした調査で出土した遺構・遺物から、長年にわたって継続されてきた「人と水との関わり」を具体的に体感できる工夫として、弥生時代前期の水田畦畔と水田面のはぎ取りを会場に敷き詰めるという床面展示、あるいは出土した木製品を使った堰の復元を行った。その展示によって、見学者は水田農耕開始期にあたる弥生時代前期の地面を歩き、用水路に設置されていた弥生時代前期の井堰や平安時代の杭列そして近代の水門を、発掘調査現場さながらに見ることができた。また、杭の先端加工などを実際に手にとって観察できるコーナーも設置した。

一方、「地下水」コースでは、水に関わる「まつり」に注目し、地面によって浄化された「地下水」に対する人びとの「想い」を彷彿とさせる展示を試みた。資料としては、本センターで保管している鹿田遺跡（弥生時代～中世の集落）の豊富な井戸の資料を利用し、「井戸のまつり」を中心とした内容となった。展示にあたっては、弥生時代や平安時代の実物の井戸枠を展示し、土器や木器以外に、植物の種子（モモ）や牛馬の骨あるいはイラストなども加え、まつりの様子を具体的に描き出した。

展示遺物総数は約125点であったが、その中には種子なども含まれており、一般的な展示品ともいえる土器・石器・木製品の点数は比較的少なめとなった。しかし、代表的なものに絞り込んだ遺物を配置したことで、ゆったりとした空間をもつ展示会場を設営することができ、その結果、手にとつての遺物観察も十分に可能とすることができた。また、展示遺物の数に頼らないイラストや模型あるいは床面展示などを組み込んだ多彩な展示方法は、見学者に個々の遺物の印象を強く与える効果もあったことが、アンケートからも読み取ることができる。

(2) ワークショップ

展示会場と同室の一角にコーナーを設置した。ワークショップでは、本センターの展示会で恒例となってきた土器の接合体験のほかに、机2個分を占める大きさの「環境双六」を作成し、ゲーム感覚で楽しみながら「水



図47 第11回発掘成果展「水と循環」会場風景

の循環」と「人間の営み」の関係について理解を深めるという企画を行った。また、水の浄水実験コーナーを設けて、実際に手にとって体験できるような工夫も行った。特に、「環境双六」コーナーでは性別・年齢の別なく多くの見学者が時間を忘れて楽しまれているのが印象的であった。

(3) アンケート結果

受付付近に休憩コーナーを設置し、「鹿田遺跡の紹介」映像をモニターで放映したことによって、見学者の方々は、展示見学を終えた後、見晴らしや日当たりがよい場所でゆったりとした時間を持ちながら、アンケートを書くという流れを生み出すことができた。その結果、235名の方からアンケートが寄せられた。その回収率は76%という高い数値を示しており、展示に対する関心の高さが窺われる。

アンケートからは、リピーター率の高さ(44%)や男性比率の高さ(66%)が示された。ただ、男女比では40代を境に、それ以上の年齢層では男性率がきわめて高いのに対して、10~30代層では50%程度と同率に近づく点は興味深い。展示内容はわかりやすさが際立つ結果を得た。そのほかに、多くのコメントが書き添えられており、展示に対する生の声を聞くことができた点は貴重である。実物を間近に観察できた感動、調査員の説明のわかりやすさ、あるいは展示方法などに関する点での大変好意的な意見や今後に向けての期待などである。また、テーマに関するコメントも多く含まれており、その反応の良さには、現代社会における問題点を取り上げるという挑戦が、多くの人にとって身近の問題となって感じられたのではないかと考えている。

また、受付では当センターからの展示案内の希望や展示に関する意見や質問などが、数多く寄せられた。

(4) おわりに

「水と循環」という環境に関わるテーマを、考古学的視点から取り上げるにあたり、環境学研究科の教員の方々から多くの教示を受けた。その内容の多くは次回へ引き継がれることとなり、自然科学系など多分野の研究成果を複合的に取り入れた2009年度の展示会へと展開することとなる。同展示会に向けて、水と人びとの暮らしから環境問題を考えるという方向性を確かめることができた点で、意義深い展示会であったといえそうである。

(山本悦世)

2. 資料・施設等の利活用

a. 教育機関への支援(授業などの受け入れ)

①博物館実習：8月1~12日、9月29・30日(補講)

例年通り、岡山大学文学部が開講している学芸員資格取得のための講義(博物館実習)の受け入れを行った。期間は8月1~12日のなかでの8日間である。受講生全体を1班10名前後とする4班に分けて、各班2日間の受講日程を組んだ。



図48 博物館実習報告会風景

実習1日目の内容は、同期間中に実施していた津島岡大遺跡第31次調査現場における発掘調査の体験である。博物館における一次資料の収集に相当する部分の学習を目的としたものである。2日目は、考古資料の取り扱いに関する専門的知識の修得を目指した構成とし、基礎的な整理作業となる土器・石器の洗浄、注記、接合作業などの室内作業を実施した。そのほか、木器の取り扱いに関する内容として、PEGによる保存処理の済んだ木器の処理槽からの引き上げ作業を実施し、当センターで実施している保存処理の方法・工程を学習した。また、今回から新たに、2日目の

最後に、実習のまとめとして受講生による報告会の時間を設けた。受講生を3グループに分けて、それぞれ発掘調査、土器・石器の取り扱い、木器の保存処理について学習内容や感想を報告してもらった(図48)。実施方法についてはさらに工夫の余地があるものの、実習内容の復習に効果があるだけでなく、受講生からのフィードバックを受けて今後の講義内容を計画していくうえでも有益な試みといえそうである。担当教員は、山本悦世(教授)・岩崎志保(助教)・光本順(助教)・池田晋(助教)である。また、同期間に受講が困難であった学生1名に対して、9月29・30日に補講を行った。

②中学生の職場体験：11月12～14日(岡山市立竜操中学校、生徒3名)

11月19～21日(岡山市立高松中学校、生徒3名)

例年通り、岡山市内の中学校2校から、「中学生の職場体験」の受け入れ依頼があった。受け入れ期間は各校とも3日間である。遺物の洗浄・復元や土器と礫の仕分けなどの整理作業に加えて、今回からはより研究活動に近い作業を体験してもらう目的で木製品の計測や土器片の重量計測作業を取り入れた(図49)。研究活動の具体的な内容を知ってもらうだけでなく、互いの分担を相談・試行錯誤しながら共同で仕事を進めていくことが生徒にとっては新鮮な体験となったようである。そのほか、3日目の最後に簡単な反省会を行い、感想等を述べてもらった。

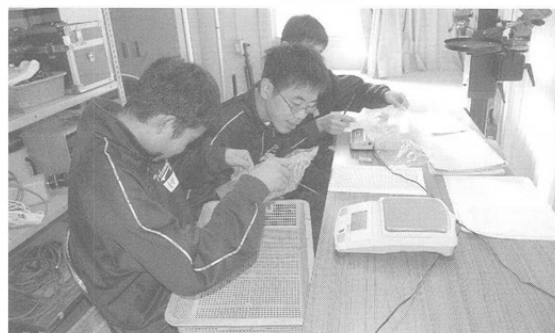


図49 職場体験風景(土器の重量計測)

③2009年度非常勤講師への委嘱依頼

岡山大学文学部長より、表6の要領にて博物館実習における非常勤講師への委嘱依頼を受け(2009年3月16日)、承諾した。

表6 2009年度非常勤講師への委嘱依頼内容

職名	氏名	担当科目	委託期間	備考
教授	山本 悦世	博物館実習	平成21年4月1日～平成22年3月31日	通年(水曜日3・4・5限)
助教	岩崎 志保	博物館実習	平成21年4月1日～平成22年3月31日	通年(水曜日3・4・5限)
助教	野崎 貴博	博物館実習	平成21年4月1日～平成22年3月31日	通年(水曜日3・4・5限)
助教	光本 順	博物館実習	平成21年4月1日～平成22年3月31日	通年(水曜日3・4・5限)
助教	池田 晋	博物館実習	平成21年4月1日～平成22年3月31日	通年(水曜日3・4・5限)

b. 調査・研究への支援

①資料調査および見学・視察

- ・赤磐市教育委員会 伴祐子氏(2008年4月)
赤外線カメラによる、江戸～大正時代の木札等に残る墨痕の観察
- ・森林総合研究所 能城修一氏(2008年8月)
津島岡大遺跡第15次調査出土アンペラ破片資料提供(アンペラの素材同定):5点
- ・オープンキャンパス参加高校生(2008年8月)
津島岡大遺跡第31次調査現場にて地層断面などを見学
- ・鳥取県教育委員会 濱田竜彦氏(2008年9月)
津島岡大遺跡第3次・第23次調査出土突帯文土器の資料調査:17点
- ・愛媛大学学部4回生 内田優人氏(2008年11月)
津島岡大遺跡第12次調査出土木製品の資料調査:4点

- ・大分市教育委員会 五十川雄也氏・山本哲也氏（2008年12月）
鹿田遺跡第1・2次調査出土土器の資料調査：11点
 - ・岡山大学埋蔵文化財調査研究センター教授 山本悦世（2008年10月～2009年2月）
津島岡大遺跡第5・6・9・15次調査出土土器（縄文後期～弥生前期）の種子圧痕の調査
- ②図書の外部貸出：50件（岡山大学文学部学生ほか）

c. 資料の提供・貸し出し

①出版物等への資料提供

- ・真言宗御室派 長泉寺：開山500年記念 岡山平野復元絵図参考
展示会パネル「縄文時代後期の岡山平野」・「弥生時代前期の岡山平野」
- ・佛教大学教授 門田誠一氏：『文学のなかの考古学』（佛教大学通信教育部）への掲載
『鹿田遺跡5』p.171－図154に掲載の猿形木製品の実測図
- ・松江市歴史資料館整備室：棒火矢レプリカ作成のための参考
『津島岡大遺跡11』・『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第30号』を寄贈

d. マスメディアへの公開

- ・Oniビジョン 「とことん鹿田」番組制作にかかる取材の依頼（2008年7月）
鹿田遺跡の調査成果についての取材に対応
- ・岡山日日新聞 コラム「岡大構内遺跡の一品」の連載依頼（2008年12月）
2008年12月26日からの1年間、毎月1回（第4金曜日）当センターの関連記事を寄稿

e. 学術成果リポジトリでの刊行物公開

岡山大学附属図書館から岡山大学学術成果リポジトリへの電子的形態での刊行物の登録および公開に関して依頼を受け、10月8日付で協定を交わした。登録・公開する刊行物は、以下のものである。今後、準備の整った刊行物から順次公開していくこととなった。

- | | |
|----------------------|------------------------|
| ・岡山大学構内遺跡発掘調査報告 | ・考古学資料データベース |
| ・岡山大学構内遺跡調査研究年報 | ・岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年 |
| ・岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 | ・岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年 |
| ・岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 | |

（池田）

第3節 2008年度調査研究員の個別研究活動

1. 科学研究費採択状況

山本悦世：基盤研究A「レプリカ・セム法による極東地域先史時代の植物栽培化過程の実証的研究」

（研究代表者：小畑弘己）研究分担者

野崎貴博：基盤研究A「造山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時空間研究の刷新」

(研究代表者: 新納 泉) 研究分担者

光本 順: 基盤研究A「造山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時空間研究の刷新」

(研究代表者: 新納 泉) 研究分担者

2. 論文・資料報告

光本 順: 「古墳時代研究の動向」『日本考古学年報』58(2006年度版) 日本考古学協会

池田 晋: 「『20年の発掘成果展』における展示活動と評価—見学者アンケートの分析から—」

『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

「津島岡大遺跡における古代から近代の条里遺構」『津島岡大遺跡19』

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

『津島岡大遺跡19』(編集) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

3. 研究発表など

山本悦世: 「津島岡大遺跡における土器の圧痕の様相」九州古代種子研究会(熊本大学3月7日)

岩崎志保: 「中国漢代の画像石」考古学研究会岡山12月例会(岡山大学12月13日)

光本 順: 「弥生時代人物全身画の出現と展開」日本考古学協会第74回総会(東海大学5月25日)

「可能性としてのクィア考古学」クィア学会第1回大会(広島修道大学11月9日)

4. 講演など

山本悦世: 「中・四国地域における縄文後期集落の特徴と問題点」中四国縄文研究会(香川大学6月28日)

5. 資料収集・実態調査

山本悦世: 津島岡大遺跡における土器圧痕調査

九州地域の縄文時代～弥生時代における農耕に関する調査

岩崎志保: 中国東周～漢代遺物の実見・資料調査(京都府・滋賀県)

中国漢代墓誌の資料調査(岡山市)

野崎貴博: 中・後期古墳の踏査・埴輪の実見(長崎県・福岡県・奈良県・京都府・岐阜県)

光本 順: 弥生時代絵画資料に関する資料調査(福岡県小郡市)

古墳時代石棺および直弧文に関する資料収集・資料調査(福岡県・熊本県・大阪府・福井県)

古墳時代副葬品に関する資料調査(徳島県)

池田 晋: 弥生時代武器形石器・木器の資料調査(大阪府・京都府・山口県)

縄文時代打製石器の資料収集(中国地方)

第5章 2008年度における調査・研究のまとめ

調査 2008年度には、2件の発掘調査を実施した。津島岡大遺跡第31次調査（福利厚生施設棟新営）を2008年6～8月に、鹿田遺跡第19次調査（歯学部渡り廊下新営）を2008年6～9月にそれぞれ実施した。いずれの調査も発掘面積は小規模なものであったが、とりわけ鹿田遺跡第19次調査においては当初の予想を上回る重要な成果を上げることができた。立会調査については、津島地区において実施件数が多く、既往の調査が希薄であった津島北地区南西部（教育学部一帯）の旧地形に関する良好なデータを蓄積することができた。

津島岡大遺跡の調査では、古代の溝群を確認した。これらの溝群は、これまでの調査成果から道路状遺構や柵列の可能性が指摘されているもので、古代の条里地割に合致する地点での検出である。南北方向の地割を復元するデータとして貴重なもので、条里の基線を表示する遺構の類例を検討する上でも興味深いものである。

鹿田遺跡の調査では、集落の確認されている微高地から河道へ下がっていく地点において、弥生時代後期～古墳時代初頭の多量の土器・礫に覆われた盛土遺構を確認した。この遺構の頂部では貝層・壺棺も確認している。遺構の性格や形成過程については、今後の整理および採取サンプルの自然科学的分析などから多角的に検討していく必要があるが、集落付近の水辺における特殊な土地利用の様相を示すものとみられる。また、盛土遺構における土器・礫の出土状況の記録には、レーザーによる三次元計測を試験的に導入し、今後の分析・活用方法の開拓が期待されよう。その他の出土遺物にも特筆すべきものを含んでおり、古代の蹄脚硯は小片ではあるが、鹿田庄との関連をつよく推測させるものである。

研究 2008年度の刊行物として、例年通り、発掘調査報告書1冊（『津島岡大遺跡19』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第25冊）および紀要1冊（『紀要2007』）、そしてセンター報2冊（『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報40号』『同41号』）を刊行した。『津島岡大遺跡19』では、古代の道路状遺構の報告、および津島岡大遺跡における古代～近代までの条里地割の推移をまとめた。紀要では、当センター20周年記念事業の一環として2007年度に開催した展示会の展示方法・アンケート結果を分析し、展示評価をまとめた。

公開・展示 毎年恒例のキャンパス発掘成果展の第11回目として、「水と循環」を開催した。現代の環境問題と考古学の研究成果の接点を探る、これまでにない視点での取り組みとなった。時間的制約もあり、テーマの咀嚼が十分行き届かなかった面はあるものの、多くの見学者には親近感をもって受け止められたようである。なにより、周辺分野の研究者との協同の視点を模索できた点は、今後の普及活動を計画する上でも意義深い。

そのほか、例年通り、教育機関への支援として、博物館実習や中学生の職場体験を受け入れたほか、津島岡大遺跡第31次調査・鹿田遺跡第19次調査の進行中に両遺跡の現地説明会を同日開催し、多くの参加者を得た。また、岡山大学附属図書館が推進する学術成果リポジトリへの登録・公開は、今後当センターの刊行物がインターネット上で広く閲覧・利用されることを可能とするもので、公開方法における大きな変更点といえよう。

2008年度は、6月から2件の発掘調査を地区を違えて実施し、調査研究員の大半が発掘調査に携わるなかで通常業務・室内整理を並行して進めていくこととなった。鹿田地区の発掘調査においては、膨大な量の出土遺物・サンプルが得られたが、成果はそれに見合うだけの重要なものとなった。調査の多忙さと引き換えに、新たな測量機器の導入やレーザー三次元計測の実施および調査時の記録方法の検討など、調査の効率化および新たな分析視点の開拓のための試行錯誤や議論を重ねることができた点は評価できよう。一方、膨大な資料の今後の整理・分析の方針および保管スペースの確保については、引き続き検討課題を残している。

以上のように、2008年度は調査において充実した成果が上がる一方で、研究・普及活動の面でも着実に経験を蓄積することができた年度となった。近年、通常業務の量は増加傾向にあり、今後さらに各調査研究員の目的意識を明確化した業務の推進が必要となろう。

（池田）

付 編

1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程

(1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

(平成16年4月1日)
岡大規程第93号

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人岡山大学管理学則（平成16年岡大規則第1号。以下「管理学則」という。）第26条の規定に基づき、管理学則第21条の規定により学内共同利用施設として置かれる岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、岡山大学（以下「本学」という。）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項。

(自己評価等)

第3条 センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

2 前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けることを原則とする。

(教育研究等の状況の公表)

第4条 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

(センター長)

第5条 センターにセンター長を置く。

2 センター長は、国立大学法人岡山大学役員規則（平成16年岡大規則第3号）第5条第1項第5号に規定する財務・施設担当理事をもって充てる。

3 センター長は、センターを代表し、その業務を総括する。

(副センター長)

第6条 センターに副センター長を置く。

2 副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。

3 副センター長は、センター長の職務を助ける。

4 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(調査研究室)

第7条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。

3 室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。

5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

(調査研究専門委員)

第8条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

2 専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(管理運営の基本方針等)

第9条 センターの管理運営の基本方針等は、役員会で審議する。

(運営委員会)

第10条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。

(事務)

第11条 センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

(雑則)

第12条 この規程に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

(2) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会内規

（平成16年4月1日）
学 長 裁 定

(趣旨)

第1条 この内規は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（平成16年岡大規程第93号）第10条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

(組織)

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
- 二 埋蔵文化財調査研究センター副センター長
- 三 岡山大学の教授のうちからセンター長の命じた者若干名
- 四 センターの調査研究専門委員のうちからセンター長の命じた者1人
- 五 センターの調査研究室長
- 六 施設企画部長

2 前項第3号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときには、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(事務)

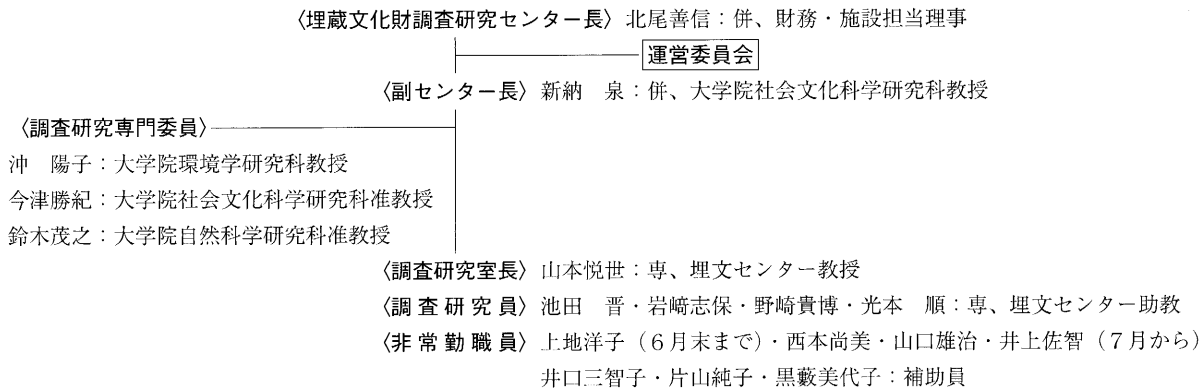
第6条 運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

附 則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

2. 2008年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織

(1) センター組織



(2) 運営委員会

【委員】

北尾善信	財務・施設担当理事（センター長）	大塚愛二	大学院医歯薬学総合研究科教授
新納 泉	大学院社会文化科学研究科教授（副センター長）	沖 陽子	大学院環境学研究科教授（調査研究専門委員）
久野修義	大学院社会文化科学研究科教授	山本悦世	埋蔵文化財調査研究センター教授（調査研究室長）
柴田次夫	大学院自然科学研究科教授	山下隆幸	施設企画部長

【2008年度協議・報告事項】

第65回2008年10月29日	協議事項	・岡山大学埋蔵文化財調査研究センター教員選考に関する申し合わせについて ・助教の採用について ・平成19年度決算について
	報告事項	・平成20年度予算について ・発掘調査について ・ビオトープ池設置工事について
第66回2009年2月17日	協議事項	・平成21年度予算（案）について ・人事について
	報告事項	・平成21年度埋蔵文化財調査研究センター事業計画について

3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

平成12年5月15日
埋蔵文化財調査研究センター長
施設部長

I. 請負業者が留意すべき事項

1. 請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
2. 発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること。
3. 工事用電力の保安責任者をおくこと。
4. 非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。

5. 重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

II. 発掘現場で注意すべき事項

1. 服装・装備・用具等

- 1) 安全で機能的な服装にする。
- 2) 平坦面から2m以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
- 3) ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
- 4) グライNDERを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
- 5) スコップ・草刈りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。

2. 掘削

1) のり面の角度

造成土：通常の土壌の場合は50～60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。

堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。

発掘区の壁際を深さ1.5m以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の中は、60cm以上とする。

2) のり面の保護

のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。

3) 深い遺構（深さ1.5m以上の遺構）

遺構掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。

なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。

3. 高所（高さ2m以上の場所）での作業

- 1) 作業中には安全帯を使用する。
- 2) 架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
- 3) 2段以上の架台は、分解して移動させる。

4. 発掘用機械類の操作

（ベルトコンベアー・ポンプ等）

- 1) 調査用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
- 2) ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。
- 3) ベルトコンベアーを重ねたつなぎ目の部分には、なるべく土が落ちないように措置をする。
- 4) 原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
- 5) ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。

（重機関係）

- 1) 重機の免許所有者以外は運転しない。
- 2) 運転者は、周囲の安全に注意する。
- 3) 稼働中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。

5. 健康管理

- 1) 作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

III. その他

- 1) 作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
- 2) 調査区の状況や遺構などの特殊性・重要性等により、上記の2の1)～3)どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

付 表

付表1 1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）

年度	地 区 名		種類	所属	調 査 名 称	調 査 組 織	調査面積 (㎡)	文献	備 考
1980	鹿 田		立会	菌	同附属病院棟新営	岡山市教育委員会	8		
1981	津島南	BD26	〃	農	寄宿舎新営	〃			
	津島北		〃	文法	合併処理槽施設	〃			
	津島北		〃	文法経	合併処理槽施設	〃			
	津島南	BD09、 BC09～11	〃		基幹整備（共同溝取付）	〃			
	津島南	BD～BE04～ 07	〃		陸上競技場改修（配水管施設）	〃			
	鹿 田		〃	医病	高気圧治療室新営	〃			
	〃		〃	〃	動物実験棟新営	岡山県教育委員会			大学が市教委への確認調査の依頼をせずに掘削。その後、岡山市・岡山県教委が残存壁面等の調査を実施
	〃		〃	〃	病理解剖体臓器処理保管庫新営	岡山市教育委員会			
〃		〃	医	運動場改修	〃				
1982	津 島	AV06・10、 AW05・14、 AX08、BD07、 BE10	試掘		排水基幹整備	〃			津島AW14区で弥生時代包含層確認、協議→津島岡大遺跡第1次調査へ
	津島北	AW14	発掘	法文	排水集中槽（NP－1）埋設	岡山大学	24.0	3	小橋法目黒遺跡：津島岡大第1次調査
	津島南		試掘	学	武道館新営	岡山市教育委員会	2.3		
	津島北	AY15・16	〃	法経	校舎新営	〃	7.0		
	鹿 田		〃	医	標本保存庫新営	岡山県教育委員会	8.0		
	〃		〃	医病	外来診療棟新営	〃 岡山市教育委員会	4.0	2	
	〃		立会	医	動物実験施設関連排水管・ガス管理設	岡山県教育委員会		1	
鹿 田	AE～AN22、 AE22～26	〃	菌	電話ケーブル埋設	〃 岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室				

- 文献
1. 光永真一 1983「岡山大学医学部附属病院動物実施施設新営工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会
2. 河本 清 1983「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会
3. 古留秀敏 1985「岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1集 岡山大学埋蔵文化財調査室

付表2 2007年度以前の構内主要調査（1983～2007年度）

* 凡例		・総合番号：調査の地区別通し番号（立会調査は選択的に保存） ・津島岡大遺跡第1次調査は本機関設置以前の調査であることから、総合番号を※1として区別している。 ・発掘調査には番号に○を付している。 ・確認調査のうち、その後の発掘調査範囲内に入った場合は、範囲内の番号記載を省き、全てが範囲内に含まれた場合には総合番号に（ ）を付している。 ・立会調査で、付表に保存する基準：①中世土層以下を確認した調査 ②明確な遺構・遺物を確認した調査 ・番号：年度別報告番号 ・文献：付表4・5の番号に対応する。
------	--	--

付表2－(1) 発掘調査

<津島地区：津島岡大遺跡>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	調 査 期 間	面積 (㎡)	概 要	文献
*1	1982	－	AW14	文	小橋法目黒遺跡（津島岡大遺跡第1次調査） ：排水集中槽（NP-1）埋設	82.10.28～11.24	24	弥生時代中期・古代溝	3
①	1983	11	BE14・18、 BF17・18、BG14 BH14・15	農	津島岡大遺跡第2次調査 ：排水管埋設	84.1.9～3.5	265	弥生時代早～前期集落	4
②	1983	12	BH13	農	津島岡大遺跡第2次調査 ：合併処理槽埋設	11.14～11.22 84.1.9～3.5	276	弥生時代早～前期水田関連遺構（溝他）	4
⑮	1986 1987	2 1	AV00、AW00・01	学	津島岡大遺跡第3次調査 ：男子学生寮	12.1～87.6.18、 8.24～9.5	1550	縄文時代後期～弥生時代早期の貯蔵穴と河道および集落、弥生時代の前期～近代の水田・溝、古代の条里関連溝	19
⑯	1986	3	BF・BG09	学	津島岡大遺跡第4次調査 ：屋内運動場	87.1.19～1.22	70	弥生時代前期の溝、中世河道	6
⑳	1988	1	AY06～08、 AZ06・07	大白	津島岡大遺跡第5次調査 ：自然科学研究科棟	6.27～89.3.19	1537	縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴と河道・弥生時代末～近世の水田関連遺構	27
㉑	1988 1989	2 1	AV・AW04・05	工	津島岡大遺跡第6次調査 ：生物応用工学科棟	9.20～89.5.31	600	縄文時代後期の貯蔵穴と河道、古代条里関連溝、弥生時代前期～近世の水田・溝	35
㉒	1988	3	AV・AW05・06	工	津島岡大遺跡第7次調査 ：情報工学科棟	10.12～89.3.31	800	縄文後期集落、弥生時代前期～近世水田	35

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	調 査 期 間	面積 (㎡)	概 要	文献
③⑨	1990	1	AY・AZ08	大自	津島岡大遺跡第5次調査 ：自然科学研究科棟	4.3～4.21	90	古墳時代後期の溝	27
④④	1991	2	BD18・19	農・薬	津島岡大遺跡第8次調査（A地点） ：遺伝子実験施設	7.23～12.25	650	縄文時代の土坑、弥生時代～近世の溝	32
④⑤	1991	3	BH13	農・薬	津島岡大遺跡第8次調査（B地点） ：合併処理槽	7.23～12.2	140	弥生時代溝、古代～近世水田	32
⑤⑩	1992	1	AU～AW04	工	津島岡大遺跡第9次調査 ：生体機能応用工学科棟	7.1～93.1.29	650	縄文時代後期の貯蔵穴と河道、弥生時代～近世の水田址	47
⑤⑪	1992 1993	2 1	BB～BC10～11	保	津島岡大遺跡第10次調査 ：保健管理センター	93.2.1～3.31、 4.17～7.31	400	弥生時代後期～古墳時代集落、近世耕作 関連遺構	64
⑤④	1993	2	AV～AW11～12	情	津島岡大遺跡第11次調査 ：総合情報処理センター	9.14～94.1.11	640	縄文後期遺構	36
⑤⑤	1993 1994	3 1	AV～AW13～14	図	津島岡大遺跡第12次調査 ：図書館	94.2.9～3.31、 4.1～11.30	1472	弥生時代前期水田、弥生時代中期～ 古墳時代溝、古代～近世溝（条里関連）	64
⑥④	1994 1995	2 1	AW～AX11～12	事	津島岡大遺跡第13次調査 ：福利厚生施設北棟	10.6～11.30、 95.7.10～10.4	816	縄文時代後期ピット、弥生時代水田、弥 生～古墳時代溝、近代耕作面	41
⑥⑨	1995	2	BB～BC12・13	事	津島岡大遺跡第14次調査 ：福利厚生施設南棟	10.25～96.2.14	856	弥生時代前期水田、弥生～古墳時代の溝	46
⑦⑩	1995 1996	3 1	AW00・01	サ	津島岡大遺跡第15次調査 ：サテライトベンチャービジネス ラボラトリー	96.1.16～4.25	1600	縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴と 河道、縄文時代後期集落、弥生時代前期 水田、古墳～中世水田・溝	38 72
⑦④	1996	2	BD19～20	農 業	津島岡大遺跡第16次調査 ：動物実験棟新宮	96.5.7～15	30.3	A地点：縄文時代と古墳時代の土坑、 B地点：中世の溝、古代の柱穴列、弥生 時代の木田	44
⑦⑤	1996	3	AW02～04	環	津島岡大遺跡第17次調査 ：環境理工学部新宮	96.5.21～1.9	1451	縄文時代後期の集落、弥生時代の溝・水 田、古代の水田	44
⑧⑤	1998	2	BB11	事	津島岡大遺跡第18次調査 ：福利施設（南）新宮に伴うポン プ槽取設	98.4.7～4.10	16	古代の溝状遺構	53
⑧⑥	1998	3	ΛZ09・10	理	津島岡大遺跡第19次調査 ：コラボレーションセンター	98.7.27～99.2.18	1019	縄文後期遺構、弥生前期の河道、古墳時 代・中世の溝、近世道路状遺構・溝	65
⑧⑦	1998	5	AY07	環	津島岡大遺跡第20次調査 ：校舎（Ⅰ期）新宮に伴うポンプ 槽取設	98.10.19～28	16	黒色土上面に溝、中世溝	53
⑧⑧	1998	6	AX09	工	津島岡大遺跡第21次調査 ：エレベーター設置	98.11.6～24	30.2	縄文時代中期土坑、弥生時代早期～前期 溝、古代土坑・溝	65
⑧⑨	1998 1999	8 2	AW02・03	環	津島岡大遺跡第22次調査 ：校舎（Ⅱ期）	1999.3.1～7.12	773.5	縄文後期河道・集落、弥生時代河道・水 田畦畔、古墳時代溝、古代～近世溝（条 里関連）・水田畦畔	53
⑩④	1999 2000	5 1	AZ15・BA14	大文	津島岡大遺跡第23次調査 ：総合研究棟	00.2.3～7.28	1339	縄文時代後期河道・杭列、弥生前期河道・ 堰・溝、弥生中期～近世溝	56
⑩⑪	2000	3	AZ14	大文	津島岡大遺跡第24次調査 ：総合研究棟渡り廊下建設	00.12.5～14	34.2	縄文時代後期河道・杭列	61
⑩⑫	2000	4	BA15	農	津島岡大遺跡第25次調査 ：散水施設設置	01.1.29～31	20.0	中世～近世の溝・杭	61
⑩⑬	2000 2001	5 1	BC～BD14～15	事	津島岡大遺跡第26次調査 ：事務局	01.3.26～9.30	1550	縄文～弥生時代の河道・貯蔵穴・土坑・ 炉、近世の溝・堰	56 61
⑩⑭	2001 2002	2 1	BB～BC14～15	一	津島岡大遺跡第27次調査 ：創立50周年記念会館	02.2.1～6.24	1648	縄文時代後期の炉、弥生時代・古墳時代 の溝、中世の畦畔（条里関連）	66 68
⑩⑰	2002	2	AW～AY06～08	大自	津島岡大遺跡第28次調査 ：自然科学系総合研究棟	4.30～9.20、 11.28～03.1.15	1798	弥生時代前期の畦畔、中世～古代の畝・ 溝	71
⑩⑱	2002	4	BF16	農	津島岡大遺跡第29次調査 ：共同溝	02.9.18～10.3	62.6	弥生～古墳時代の溝・ピット	71
⑩⑲	2007	1	BC19・20	イ	津島岡大遺跡第30次調査 ：岡山大インキュベータ	8.1～12.17	1035.4	縄文～近代の遺構・遺物、古代の道路状 遺構、弥生～古墳の溝	93

< 鹿田地区：鹿田遺跡 >

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	調 査 期 間	面積 (㎡)	概 要	文献
①	1983 1984	9	AU～BD28～40	医病	鹿田遺跡第1次調査：外来診療棟	7.27～11.22 84.1.9～8.31	2188	弥生時代中期後半～中世集落	7
②	1983	10	BG～BI18～21	医病	鹿田遺跡第2次調査：NMR-CT室	8.1～12.30	176	弥生時代後期～中世集落	7
⑩⑩	1986	1	CN～CU27・28、 CT～CY19～27、 CX～DD16～25、 DD～DG22・23	医短	鹿田遺跡第3次調査：校舎	6.2～11.29	2390	中世の集落、古代の河道と橋脚	10
⑩⑫	1987	3	DD～DF25、 DG～DI27・28	医短	鹿田遺跡第4次調査 ：校舎周辺の配管	11.2～11.21	30	古代の河道	10
⑩⑬	1987	2	BB～BH35～42	医病	鹿田遺跡第5次調査：管理棟	10.6～88.3.2 88.3.23～3.31	1192	弥生時代中期後半～中世の集落	24
⑩⑰	1990 1991	2 1	BW～CC67～71	ア	鹿田遺跡第6次調査 ：アイソトープ総合センター	11.20～91.6.30	690	弥生～古墳時代の集落、中世集落	40
⑩⑲	1997 1998	4 1	BR55～BX61、 BY56～57	医	鹿田遺跡第7次調査：基礎医学棟	98.2.27～8.6	829	古墳時代初頭・中世の集落、近世の水田・ 溝	50 53
⑩⑲	1998	4	BP～BS30～32	医病	鹿田遺跡第8次調査：RI治療室	98.7.28～9.1	165	古墳時代溝・中世溝	53

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	調 査 期 間	面積 (㎡)	概 要	文献
㊸	1998 1999	7 1	CD33～37、 CE・CF28～37、 CG～CJ20～37、 CK・CL25～37	医病	鹿田遺跡第9次調査：病棟	98.11.27～99.5.11	2088	弥生時代水田・溝、中世～近世集落	53
㊹	1999	3	CD・CE10～12、 DD～DF16～22	医病	鹿田遺跡第10次調査：共同溝関連	99.5.7～99.10.14	244.1	古代の杭列（河道内）、弥生時代ピット、近世溝	56
㊺	1999	4	CD～CM19～42	医病	鹿田遺跡第11次調査：病棟	99.8.19～12.22	2020	弥生時代水田畦畔、古代池状遺構、中世～近世集落	56
㊻	2000 2001	2 -	CO～CV35～44、 CN・CM38～41、 CN28～38	医病	鹿田遺跡第12次調査： エネルギーセンター	00.10.2～01.05.10	1897	弥生時代溝・河道、古墳時代・中世集落、近世土坑・溝	56 61
㊼	2002	3	BL～BR46～51	大医 菌	鹿田遺跡第13次調査： 総合教育研究棟	02.4.30～10.25	934	弥生時代の溝、古墳時代の土器溜まり・溝中世の集落、近世土坑群	71
㊽	2003	1	CD～CM12～20	医病	鹿田遺跡第14次調査： 病棟（Ⅱ期）	03.7.31～12.17	1331	弥生～古墳時代の畦畔・溝、中世の井戸・土坑・溝・近世のため池・土坑	71
㊾	2003	2	BQ～BS45・46	大医 菌	鹿田遺跡第15次調査： 総合教育研究棟外構工事	03.10.16～10.29	30.4	古墳時代初頭の井戸・溝、中世溝群	71
㊿	2004	1	AH～AI6・7 AF12・13、 AN～AO4	医病	鹿田遺跡第16次調査： 立体駐車場新営工事	04.10.21～11.8	49.15	近世～近代の畦畔・溝・畝・土坑、中世の土坑、弥生～古墳の河道	81
㊽	2006	1	BR～BY60～64	医病	鹿田遺跡第17次調査： 総合研究棟（医学系）	06.7.10～11.14	642	古墳時代住居址、古代溝状遺構、中世井戸・溝・建物、近世土坑・溝	88
㊾	2007	1a	BT13～BY20	医病	鹿田遺跡第18次調査： 中央診療棟	10.10～08.3.14	872.2	弥生時代後期～近世の集落、井戸・溝	92
㊿	2007	1b	CG～CI9・10	医病	鹿田遺跡第18次調査： 防火水槽	10.16～11.1	43.2	古代後半井戸、近世入江状遺構・護岸施設	92
㊽	2007	1c	CM～CN9・10、 CO10・11	医病	鹿田遺跡第18次調査： 用水路改修	12.27～08.1.16	56	弥生時代土坑・溝	92

＜三朝地区：福呂遺跡＞

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	調 査 期 間	面積 (㎡)	概 要	文献
①	1997	1・2	-	固	福呂遺跡第1次調査：実験研究棟	97.5.10～20、 7.28～31	269	縄文時代早期・弥生時代中期・中世・近世集落	55
②	1997	3	-	固	福呂遺跡第2次調査：実験研究棟 新営に伴う工事スロープ部分	97.11.25～12.5	120	近世・中世・古代の集落	55

付表2-(2) 試掘・確認調査

＜津島地区：津島岡大遺跡＞

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
(3)	1983	1	BH13	農	合併処理槽予定地	2.5	-	→津島岡大第2次調査：1983年度	1
4	1983	2	BF17	農	排水管中間ポンプ槽予定地	3.5	-	-	1
5	1983	3	BE～BG14、 BE・BH15、BE18、 BF16～18、BC18	農	排水管理設予定地	2.0	-	29ヶ所で試掘→津島岡大第2次調査：1983年度	1
6	1983	4	BF22・23	農	農場畜舎新営予定地	2.0～3.0	0.6	2ヶ所、土器片<1987年度工事立会>	1
(7)	1983	5	BC・BD15	事	大学事務局新営予定地	2.0～3.0	0.9	2ヶ所、→津島岡大第26次調査：2000年度	1
(8)	1983	6	BB10	保	保健管理センター新営予定地	2.0～3.0	0.8	→津島岡大第10次調査：1999年度	1
9	1983	7	BI16	事	津島宿舎新営予定地	0.9	0.9	土器片<1987年度工事立会>	1
10	1983	8	AW05	工	校舎新営予定地	3.0	1	土器片	1
12	1985	1	BE08	教養	講義棟予定地	3.5	1.2	遺構など未確認<1986年度工事立会>	5
13	1985	2	AX02	教育	研究棟予定地	2.6～3.4	1.2	3ヶ所、縄文～弥生土器出土	5
14	1985	3	AV・AW99～01	学	男子学生寮新営予定地	2.0～3.0	1	→津島岡大第3次調査：1986年度	5
(17)	1986	3	BF・BG09	学	屋内運動場新営予定地	2.4、1.2～1.7	1.1	→津島岡大第4次調査：1986年度	6
(18)	1986	4	AY・AZ07	大自	自然科学研究科棟新営予定地	1.6～3.2	0.6～0.8	→津島岡大第5次調査：1988年度	6
22	1987	4	AP02（土生地区）	事	外国人宿舎建設予定地	2.2～2.8	-	縄文時代・弥生時代・近世の遺構面	8
(23)	1987	5	AV11	情	総合情報処理センター新営予定地	2.0～3.0	2	→津島岡大第11次調査：1993年度	8
24	1987	6	AY09	理	身体障害者用エレベーター建設予定地	3.0～3.5	約1.0	中世・近世の遺物、古代・中世の水田<継続して調査>	8
25	1987	7	BD09	教養	身体障害者用エレベーター建設予定地	2.5	0.7	縄文時代遺構、縄文・中世・近世土器<継続して調査>	8
29	1988	17	AX04・06、AW04	工	校舎建設予定地	2.0～3.5	-	→津島岡大第6・7次調査：1988年度	11
30	1988	19	BD18・19	農・業	動物実験飼育施設・遺伝子実験施設	2.3	1.1～1.2	→津島岡大第8次調査：1991年度	11
31	1988	20	BC29	事	国際交流会館	2.5	1.2	中世・近世の遺物出土<1988年度工事立会>	11
33	1989	2	AZ・BA05	教育	身体障害者用エレベーター	2.5	0.8	縄文時代後期・弥生時代早期の落込み、縄文時代後期～中世土器片<継続して調査、面積38.5㎡>	14
34	1989	3	AZ17	大自	合併処理槽設置予定地	4.0	1.6～2.0	中世～明治の水田の畦畔・溝<1989年度工事立会>	14

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
35	1989	4	BD02	学	学生合宿所予定地	2.0～3.2	1	弥生時代早・前期の畦畔 <1989年度工事立会>	14
(36)	1989	5	AV・AW13	図	図書館新営予定地	3.0	1.4～1.6	→津島岡大第12次調査：1993年度	14
40	1990	3	BC02	学	学生合宿所ポンプ槽予定地	2.5	1.1	弥生時代前期畦畔、中世土器片	18
41	1990	6	AW・AX11	事	福利厚生施設予定地	3.9	1.4～1.6	→津島岡大第13次調査：1994年度	18
56	1993	3	BE～BF22～23	農	農学部汎用耕地実験実習施設	1.5		中～近世耕作土	30
65	1994	3	BD20	農・薬	動物実験施設	2.0	0.9	GL-1.4mで黒色土、縄文土器1点出土 <盛り土保存>	33
71	1995	4	BE26	事	国際交流会館新営予定地	4.1・2.4	1.6	明治～中世の土層確認、以下は湿地状態、 遺構・遺物無し（明治畝のみ） <工事立会>	38
72	1995	5	AW02・03	環	環境理工学部新営	2.4	1.2	→津島岡大第17次調査：1996年度	38
73	1995	6	BF07	学	ボクシング部ボックス移設	3.0	3	標高2.5mで黒色土、弥生～古墳時代の溝 2条、古代溝1条	38
(90)	1998	9	AZ09	理	コラボレーションセンター新営に伴う 試掘調査	2.7～3.4	1.3	→津島岡大第19次調査：1998年度	53
(91)	1998	10	AW02・03	環	校舎（Ⅱ期）新営に伴う調査	4.5	1.2	→津島岡大第22次調査：1998年度	53
92	1998	13	AW04	工	システム工学科棟新営に伴う調査	2.8	1.0	GL-1.8mで黒色土、縄文後期の遺構	53
93	1998	14	AU02・03・06、 AV03	事	遺跡保護区整備に伴う調査	2.4～3.8	0.8～1.6	5ヶ所、TP1・3・5：微高地状、TP2・4 は低湿地状、TP1で弥生溝、TP3で弥生 溝・ビット、TP4で中世溝	53
(105)	1999	6	AZ15、BA14	文・ 法・経	総合校舎新営に伴う調査	2.7、3.5	0.81.1	→津島岡大第23次調査：1999年度	56
106	1999	7	AV08	工	電波暗室新営に伴う調査	1.2	0.2	現表土以下、基盤となる岩盤層	56
114	2000	6	AV00、 AX00・02・03、 AZ06、AW08	-	縄文～弥生時代における環境復元 に伴う調査	2.6～3.2	1.7～0.9	6ヶ所掘削、縄文・弥生時代の微高地、 古代溝を確認	61
115	2000	7	BB14	-	創立50周年記念館新営に伴う調査	2	0.8	→津島岡大第27次調査：2001年度	61
129	2002	5	BD15	事	事務局旧本部棟移転に伴う調査	2.1		黒色土の落ち検出	71

<鹿田地区：鹿田遺跡>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
(4)	1984	1	BU30・31	医病	西病棟北側受水槽予定地	1.4	0.5～0.7	中世土器・包含層確認<盛土保存>	2
(5)	1984	2	CT・CU25、 CZ19・20・23・24	医短	医療短期大学部校舎新営予定地	2.7	0.8～1.0	→鹿田第3次調査：1986年度	2
6	1985	4	AJ33、AI40、 AJ・AK26	医病	外来診療棟環境整備工事に先立つ 範囲確認調査	2.2～3.0	0.9～1.4	弥生時代～中世の遺物	5
(17)	1990	5	BY・BZ68	ア	アイソトープ総合センター予定地	2.3	1.2～1.3	→鹿田第6次調査：1990年度	18
(26)	1997	8	BT57	医	基礎医学棟	2.2	0.9	→鹿田第7次調査：1997年度	50
29	1998	11	CF・CG43・44、 CH25・26、 CK35・36、CK15	医病	病棟新営に伴う調査	2.0～2.4	1.0	→鹿田第9次調査：1998年度	53

<倉敷地区>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
1	1990	4	-	資生 研	資源生物科学研究所遺跡確認調査	2.5	0.7	中世後半以降の土器片	18
2	1998	12	-	資生 研	バイオ実験棟新営工事に伴う調査	1.5	0.4	近世干拓地内、遺構未確認	53

<東山地区>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
3	2006	1	-	教育	附属小学校校舎建替え工事に伴う 調査	3.0	0.3～0.5	4ヶ所、近世・近代溝3条、中世？畦畔	88

<三朝地区：福呂遺跡>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
3	1997	5・6	-	固	実験研究棟新営工事に伴う試掘調 査	1.66～2.1	0.8	2ヶ所→福呂第2次調査：1997年度	50
5	2004	1	-	固	三朝宿泊所増築工事に伴う試掘・ 確認調査	1.3	0.5～0.9	3ヶ所、遺構・遺物・遺物包含層確認さ れず	81
6	2004	2	-	固	高圧線・電話線切替工事	1.0	0.85	1ヶ所、河床礫、段丘礫層確認	81

付表2-(3) 立会調査

<津島地区：津島岡大遺跡>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
11	1984	20	BI15~17	事	南宿舍合併処理槽関係配水管埋設	1.0~2.2	1.0	溝・土坑、弥生土器・須恵器	2
19	1986	12	BE08・09	教養	校舎新営	2.3	1.3	中・近世の溝・土器	6
20	1986	21	BG08	学	ハンドボールコート新設	0.2~2.0	0.8	黒色土確認	6
21	1986	26	BF07・08	教養	校舎新営に伴う電気配管	1.8	0.9	中世包含層	6
32	1988	17	BG10・11	教養	テニスコート夜間照明施設	2.2	1.5	GL-約2mで黒色土、西に向かう落ちを推定	11
37	1989	8	AZ08	大白	自然科学研究科棟新営 ：工事用道路	1.4		弥生時代後期水田・溝	14
38	1989	10	AU05	工	校舎新営に伴う電柱架設	1.9	1.0	黒色土確認	14
42	1990	16 19	AV04~10	事	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う 補償工事Ⅰ：電柱移設	0.4~3.0	0.6~1.4	5ヶ所、黒色土、糸里南北溝	18
43	1990	20	BC02~04、 BD03・04	事	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う 補償工事Ⅰ ：学生合宿所給排水管設置	2.3	1.2	GL-2.3mで黒色土	18
46	1991	9	BC18	農・業	防火用水撤去	2.0	0.8	基盤層まで掘削、石礫出土	21
47	1991	17	BB16	事	津島地区基幹整備（電気） ：ハンドホール・アース板	1.7~1.8	0.5	2ヶ所、明治層〜淡灰色粘土層	21
48	1991	19	BD15	事	津島地区基幹整備（電気） ：アース板	1.7	1.0	GL-1.5mで黒色土	21
49	1991	40	BC・BE・BF12	事	南北道路街灯設置	1.5		3ヶ所、GL-1.4mで古代層	21
52	1992	15	BD18	農・業	遺伝子実験施設ハンドホール設置	1.5	0.75~ 1.1	縄文後期層まで掘削、溝2本	25
53	1992	34	AV12	事	附属図書館北側駐車場整備	3	1.7	造成土以下は粘土層	25
57	1993	17	BB~BC10~12	保	保健管理センター新営に伴う外構 工事はか：電気配線	1.8	0.6~0.7	保健管理センター本調査と同じ層序、黒 褐色土はGL-1.15~1.7m、その直下に基 盤層	30
58	1993	19	BB11	保	保健管理センター新営に伴う旧棟 改修：電気配線	1.1	0.8	弥生土器片、工法変更	30
59	1993	23	BA07	事	津島地区基幹整備：RⅠ共同利用 施設排水処理施設他設置	3.2	-	明治〜中世層・暗褐色土層、古代溝？、 縄文晩期？土器片	30
60	1993	28	BD~BE13	事	津島地区環境整備：南北道路沿水 路ボックスカルバート敷設	1.5	1.0	近世〜中世層を確認	30
61	1993	33	BB~BG12~13	事	津島地区環境整備：水銀灯設置	1.8	0.5~1.2	10ヶ所、近世〜中世層まで掘削、一部で 暗褐色土層を確認	30
62	1993	34	BD~BE12・13	事	津島地区環境整備：信号機設置	1.6	1.0	近世から中世層、一部で暗褐色土層	30
63	1993	39~ 41	BB05~07、 BC05・41	学	野球場バックネット・防球ネット 改修	2.0~3.2	1.0	GL-1.2~2.0m付近で黒色土、以下は黄 色砂〜青灰色粘土	30
66	1994	9	BD・BE・BF04~07	事	陸上競技場照明灯設置	2	0.96	オーガー掘削（径80cm・深さ10m）、GL -1.92~2.0mで黒色土	33
67	1994	13	AV10、AW10、 AU11	情	総合情報処理センター新営電気工 事	2.2	1.5	近世2面、中世（近世か？）1面、GL- 1.7mで黒色土、近世溝	33
68	1994	20	BD20	農	焼却場	2.2	1.5	GL-1.9mで黒色土	33
76	1996	4	BC18	農・業	動物実験棟新営に伴う造成土取り	2.2	1.9	黒色土層付近まで掘削	44
77	1996	5	BD16~19	農・業	動物実験棟新営に伴うハンドホー ル設置工事	1.3	-	4ヶ所、造成土以下に5層確認	44
78	1996	12	AV02、AV03、 AV04、AV99、 AW02、AW04	サ	サテライトベンチャービジネスラ ボラトリー新営：外灯設置工事	1.0~1.5	0.76~ 1.1	6ヶ所、明治層2面・近世層2面・中世 層？1面・弥生層？1面	44
79	1996	13	AV03~AW03	サ	サテライトベンチャービジネスラ ボラトリー新営：配管設置工事	2	0.95	弥生時代層まで掘削、古墳時代前期の遺 構・遺物	44
80	1996	18	AW03	環	校舎新営予定地電柱移設工事	2	-	黒色土まで掘削	44
81	1996	25	AV13	図	附属図書館新営 ：雨水樹・外構工事	1.3	1.0	造成土以下に青灰色粘質土・黄褐色粘質 土・灰褐色粘質土	44
82	1997	16	BB13~BH13	事	南北道路ガス管理設工事	1.5	-	中世層まで掘削	50
83	1997	19	AW11~BA13	事	南北道路ガス管理設工事	1.5	-	中世層	50
84	1997	24	BC12	事	福利厚生施設新営に伴う共同溝新 設工事	2.0	0.8	GL-1.65mで黒色土、古代〜近世の溝	50
94	1998	15	BA09	事	構内外灯設置工事	1.47	1.0	GL-1.42mで黒色土	53
95	1998	22	AZ09、BA09	理	コラボレーションセンター支障配 管布設替工事	1.4	1.0	GL-1.4mで黒色土	53
96	1998	24	BB12、BC12	事	南福利街灯設置工事	1.4	0.95	中世層まで掘削	53
97	1998	31	AY06	環	校舎新営に伴うガス管理設工事	1.2~1.4	0.65~ 0.95	中世層まで掘削、10ヶ所	53
98	1998	34	BC10	事	学生会館改修に伴うトラップ柵撤 去工事	2.2	1.45	GL-1.7mまで灰褐色粘質土層、GL-2.2m まで青灰色粘質土層	53
99	1998	35	BA00	事	NTT電柱移設工事	1.5	0.9	造成土以下に褐色系粘質土	53
100	1998	41	AX03~AY07	環	実験排水管理設工事	1.4	0.6~1.4	10ヶ所、5地点で中世層、2地点で古代 層、1地点で古墳時代層まで掘削	53
101	1998	42	AU02	環	馬場移設に伴う樹木移植	2.2	1.1~1.3	GL-2mで弥生後期層、GL-2.2mで縄文 基盤層	53
102	1998	44	AV03、AW03	環	校舎新営に伴う生活排水柵設置工 事	1.97	1.4	古墳時代層まで掘削、須恵器・土師器	53
103	1998	48	AW03	環	校舎新営に伴うガス管理設工事	1.45	1.0	中世層まで掘削	53
107	1999	8	AY00、AZ01・03	施	構内外灯設置工事	1.15~1.35	0.5~1.2	3ヶ所で黒色土（GL-0.85~1m）確認	56

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
108	1999	12	AZ08・09	理	コラボレーションセンター新営工事に伴うハンドホール	1.48～2.1	1.03～1.16	2ヶ所、1ヶ所で古墳時代層まで掘削	56
109	1999	13	AW02	環	校舎(Ⅱ期)新営に伴うスロープ設置工事	3.5	1.2	調査面積25㎡、黒色土下面まで調査、近代土坑・古代溝・縄文後期ピット	56
110	1999	42	AZ09	理	コラボレーションセンター新営に伴う排水樹	1.0～1.2	0.8～1.0	6ヶ所、1ヶ所で黒色土対応層まで掘削	56
116	2000	17	BA12	事	津島地区電柱工事	1.6	1.0	造成土下に灰色粘質土・暗茶褐色粘質土層	61
117	2000	23	AY09	理	校舎改修工事 ：理学部本館基礎補強工事	1.3	0.9	造成土下に暗青灰色粘質土・褐色粘質土・灰色粘質土	61
118	2000	28	AX10、AY10	理	校舎改修機械設備工事：電気	0.85～1.60	0.8～1.1	南側ハンドホールはGL-1.6mまで掘削、GL-1.52mで中世溝（南東から北西方向に向かって走行）	61
119	2000	42	AW08、AX08	工	精密応用化学科棟都市ガス改修工事	1.6～2.05	1.45	GL-1.82mで明灰褐色粘土（中世?）	61
120	2000	44	BA16	大文	総合研究棟仮設電柱建柱工事	1.5～1.7	1.0	GL-1.4mで中世層?、家庭園の築山、土塁を一部掘削	61
122	2001	4	AZ10	理	校舎改修電気設備工事	1.6	1.0～1.2	ハンドホール部分で中世溝	66
123	2001	11	BB～BC16	事	本部棟電柱設置工事	1.5～2.1	1.2～1.4	2ヶ所、GL-1.4mで灰色粘土、GL-2.1mまで谷部か?	66
124	2001	27	BB・BC13	事	本部棟車庫移設工事	0.5～1.6	1.0	2ヶ所、中世層まで掘削	66
125	2001	30	BB14	事	本部棟樹木移植	1.6	0.65～0.8	GL-1.4mに灰色粘質土層（古代）を確認	66
126	2001	31	BB14	事	本部棟車庫移設工事に伴う旧変電室基礎解体工事	1.05	0.45～0.75	12ヶ所掘削、中世層まで掘削	66
130	2002	29	BE15	農	校舎改修電気設備工事	1.8	1.5	3ヶ所、古代・古墳層まで掘削	71
131	2002	34	BC13～15	事	本部棟新設工事：排水樹・管路	1.2～2.5	0.7～1.2	突帯文土器・石器がまをもって出土、近世溝・弥生溝	71
132	2002	51	BB13	事	本部棟新営その他工事 ：雨水排水樹・管路	1.57	0.8	中世層と古代・古墳層を確認	71
133	2002	54	BB13・BD14	事	本部棟新営その他工事：外灯	0.95～1.9	0.8	2ヶ所で中世層と古代層まで掘削、GL-1.3mで黒色土	71
134	2002	55	BC07・09	教養	一般教育棟B棟外灯設置工事	1.0～1.26	0.95	4ヶ所、中世層まで掘削	71
135	2002	57	BB～BC14～15	事	創立五十周年記念館新築工事 ：汚水排水	1.0～2.3	0.85～1.0	一部黒色土上面まで掘削	71
136	2003	1	BB13～15	五十	創立五十周年記念館新築に伴う掘削（雨水排水樹・管理設工事）	1.3	0.7～0.8	中世層まで掘削	74
137	2003	4	AX06	工	総合研究棟新営機械設備工事（ガス配管埋設工事）	1.4	0.9	古代層?まで掘削	74
138	2003	6	BC15	事	旧事務局庁舎改修電気設備工事	2.43	0.85	GL-1.9mで黒色土、GL-2.1mで縄文基盤層確認	74
139	2003	7	BB,BC18	農	農学部総合研究棟改修電気設備工事（仮設電力・電話引き込み建柱工事）	1.7	0.7	径0.5m、GL-1.2m前後で黒色土層、GL-1.5～1.6m前後で縄文後期基盤層確認	74
140	2003	8	AX06～BA06	工	総合研究棟新営その他工事（雨水排水）	1.7	0.7～0.8	標高3.3～3.4mで黒色土、弥生～古代の東西溝多数、近世・近代の東西溝・畦畔	74
141	2003	14	AW,AX06,07	工	総合研究棟新営電気設備工事（外灯）	1.4	-	中世層まで掘削	74
142	2003	15	AW～AX06～07	工	総合研究棟新営その他工事（排水）	0.5～2.5	1.6	樹で縄文基盤層まで掘削した箇所あり、弥生溝	74
143	2003	17	BC～BD15	事	旧事務局庁舎改修電気設備工事（外部給水・消火配管）	2.75	1.1	樹で、縄文基盤層確認	74
144	2003	21-1	BG～BH13	事	公共下水樹接続工事No.1区間 農学部合併処理槽	1.8	0.9	縄文基盤層まで掘削	74
145	2003	21-2	BE～BG10	事	公共下水樹接続工事No.2区間 体育館東～武道場西	1.95～2.25	0.8～0.9	樹で縄文基盤層、管路で弥生早・前期まで掘削、弥生溝・縄文土坑	74
146	2003	21-4	AZ16	事	公共下水樹接続工事No.4区間 文・法・経2号館西	2.45	1.5	縄文基盤層まで掘削、弥生溝確認	74
147	2003	21-5	BA10	事	公共下水樹接続工事No.5区間 理学部	1.9	0.7	中世頃の庭土川を確認	74
148	2003	21-6	BG22	事	公共下水樹接続工事No.6区間 農学部4号館東	1.5～1.9	0.9～1.4	縄文基盤層まで掘削、弥生～古墳初頭ピット、近代畦畔状遺構	74
149	2003	21-7	BI16	事	公共下水樹接続工事No.7区間 津島宿泊所	1.15～1.3	0.8	中世層まで掘削	74
150	2003	21-8	BI15	事	公共下水樹接続工事No.8区間 南宿舎	2.0～2.45	1.1	縄文基盤層まで掘削	74
151	2004	1	BB～BD26	事	公共下水樹接続工事 留学生等宿泊施設	1.22～1.68	1.0	中世層まで掘削	81
152	2004	6	BB9・10	事	津島キャンパス環境整備留学生センター西	0.5～1.15	0.4～0.6	弥生後期包含層・遺構・礫層確認	81
153	2005	3	AV08	工	工学部総合研究棟改修工事（仮設電柱掘削取り付け）	8.5	1.5	GL-0.9mまで造成土、以下、青灰～白灰色の粘質土3層を確認、「黒色土層」は確認されず	83
154	2005	5	AW09	工	工学部総合研究棟改修電気設備工事（アース板設置）	1.8	-	基盤層～黒色土～明治の土層堆積確認	83
155	2005	9	BE02、BG07	事	キャンパス環境整備（門扉改修等）工事	1～1.3	0.7	東07地点：GL-0.7mで明治耕土と畦畔・溝、-1mで中世層確認、東08地点：近世畦畔、中世層確認	83

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
156	2005	13	BC～BE03、BB・BC02	事	プール改修（排水管改修）工事	0.75～2.4	0.8～1.3	縄文基盤層～近代層の堆積確認。「黒色土」確認、弥生～古墳の溝多数、近世土坑、近代大畦畔・溝	83
157	2005	14	BB・BC04	事	サッカー場防球ネット設置工事	2.0～2.2	－	オーガーによる掘削、一部で「黒色土」確認	83
158	2006	2	AX10	工	工学部総合研究棟Ⅱ期改修工事 ：耐震工事に伴う支障物撤去・PC耐震柱基礎掘削	8.18～21.98	1.8	近代耕作土層以下、中世層まで5枚の層を確認。近世面で南北方向の溝	88
159	2006	3	AZ～BA02～04	教育	教育学部公共下水樹接続工事	9.4～21	2.3	樹1箇所、深さ2.3m。配管、深さ1.05～1.92m。黒色土層あるいは基盤層まで掘削。東西方向の溝	88
160	2006	5	BA・BB02、BC02	事	プール改修配管接続工事	9.28～10.3	1.7	黒色土層あるいは基盤層まで。古墳時代頃の溝状遺構	88
161	2006	11	AX08～09	工	工学部総合研究棟Ⅱ期改修工事 ：耐震工事に伴うPC耐震柱基礎掘削	12.25～27	1.8	古墳～弥生層	88
162	2006	12	BF16	農	農学部2号館南電柱移設	07.2.23	2	中世層まで	88
164	2007	4	BA12	理他	公共下水道接続工事（理学部他）	2.0	0.8～0.9	GL－1.6mで黒色土確認、弥生時代の溝	92
165	2007	8	AV・AX07・08	工	総合研究棟Ⅲ期改修 ：電気設備・外灯基礎及び管路掘削工事	1.4～1.7	1.2	近世～中世層確認	92
166	2007	10	AW07・08	工	総合研究棟Ⅲ期改修 ：外構柵・配管（東半部）	1.1～1.4	0.9	近世層確認、土坑1基	92
167	2007	13	BA～BC20	イ	インキュベーション施設外構配管工事	1.2～1.4	0.6～0.8	縄文時代～近代土層確認、中世、近代の溝	92

＜鹿田地区：鹿田遺跡＞

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
3	1983	23	AO～AW22	医病	外来診療棟蒸気配管埋設	1.3	－	弥生時代後期土器・分銅形土製品、貝集積	1
7	1985	6	AW～BH23、BH・BI24	医病	外来診療棟関係屋外排水管理設	1.3～1.7	0.7～1.3	中世・弥生の遺構・遺物	5
8	1985	12	AG31、AG24、AF23	医病	基幹環境整備緑化工事 ：電気配線ハンドホール掘削	1.2～1.7	0.9～1.3	3ヶ所、中世包含層・ビット	5
9	1986	9	BI～BN4	医病	記念館東側污水管改修工事	0.8～1.3	0.8	中世包含層、土器出土	6
11	1986	24	CL～CR12、CR～CX13、CX～DA14	医短	護岸及び開墾工事	2	0.8～1.0	中世包含層	6
14	1987	8	BC37	医病	管理棟新営に伴う基礎杭確認	2.5	－	弥生時代包含層・遺構	8
15	1989	46	CE30・37・44、CJ・CK45、CL28・29	医病	旧管理棟跡地環境整備：外灯基礎	1.2～1.5	0.7～1.0	2ヶ所、中世層を確認	14
18	1992	29	BW71	ア	アイソトープセンターL形側溝・集水枡	1.4～1.5	0.9	中世溝1条	25
19	1992	41	CI73	医	テニスコート脇電柱埋設	1.2	1.0	古代土器1点	25
20	1994	5	DH60～62	医	護岸改修工事	1.5	0.8	近世層以下はすべて遺構埋土の可能性あり、溝3条・ビット9基	33
21	1995	11	BG・BI18	医病	鹿田地区基幹整備 ：附属病院連絡通路新設	1.5	1.0	造成土以下に茶褐色土・青灰色粘質土層、遺物なし	38
22	1995	14	CD07・08	医病	鹿田地区基幹整備 ：液酸タンク設置工事	2.3	1.0	中世2面確認、溝3条、溝内から中世・古代の土器出土	38
23	1995	17	CD08～CC11	医病	鹿田地区基幹整備：附属病院液酸タンクU字溝埋設工事	1.23	0.85	包含層確認、中世土器細片、既設管・工事基礎などで区間全長の1／2程度は破壊	38
24	1995	23	DF56～67	医	防球ネット取設工事	3	0.8	径60cmを12ヶ所、その内4ヶ所で土器片・石器出土、調査区西寄り、GL－2m以下は旧河道か。	38
30	1998	36	BV73、CN78	医	校舎新営に伴う仮設電柱工事	1.2	1.0	中世層まで掘削	53
33	1999	15	BV65～71	医	研究棟新営に伴う給排水樹・管路	1.2～1.4	0.9	中世層まで掘削	56
34	1999	18	BU65	医	研究棟新営に伴う検水槽	2.2	1.1	面積8.2㎡、近世溝、中世溝・ビット	56
35	1999	27	BY42・43、BI43・44	医病	基幹整備（電気設備）：地中配管	1.25～1.45	0.45～0.5	2ヶ所、中世層まで掘削、時期不明の遺構	56
36	1999	41	CF21～28、CF～CL28、CD～CF28～33	医病	病棟新営に伴う共同溝解体	1.7	－	面積18㎡、鹿田11次調査3区南側部分で中世ビット	56
37	1999	46	CN46～DE49	医病	病棟新営に伴う污水樹・管路	2.3	1.2	古墳時代の井戸1基・土坑1基・中世溝等	56
38	1999	47	CM・CN・CP・CR・CT58、CV・DA・DC・DD・DF59	医	グラウンド防球ネットポール	2.0～2.3	－	11ヶ所、南側6ヶ所は河道、7～10ヶ所付近は微高地、最北端は河道	56
39	1999	48	BT51	医病	病棟新営に伴う污水検水樹	2	1	造成土以下7層確認、古墳時代層まで掘削か。	56
41	2000	25	CD41～CN45	医病	病棟新営その他工事 ：管路・雨水樹	1.6～1.8	－	溝と思われる遺構など確認	61
42	2000	26	CN15・21・27、CO31・42、CS45、DV45	医	電柱及び外灯の埋設工事	1.6	－	7ヶ所、灰白色土層・淡褐色砂質土層・暗褐色砂質土層を確認、微高地部か。	61

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
43	2000	29	DI27	医	医学部ガス配管切り離し用バルブ 取付工事	0.8～1.15	0.7	GL-0.85mで黄灰色粘質土	61
44	2000	47	DG～DJ28～67	医病	鹿田団地南側用水路境界擁壁改修	2.1～2.3	1.3～1.5	幅120mの壁面調査、古代の遺構・河道	61
45	2001	37	BR～CA43、CA43 ～55、CA44～ CL45、BR～CA55	医	総合教育研究棟埋蔵文化財発掘調 査に伴う機械設置工事	1.65	0.7～0.9	中世層まで掘削、中世土器が多数出土し た地点あり。	66
47	2002	10	CH11～CN22	医	鹿田団地ガス配管埋設工事	1.0～1.3	0.87	中世層まで掘削	71
48	2002	19	BT・BU11	医病	鹿田団地ガス配管埋設工事	0.5～1.8	－	2ヶ所、GL-1.22mまで掘削した地点で 中世または古代層確認	71
49	2002	22	CQ41～42	医病	エネルギーセンター棟新営その他 工事：共同溝排水管	1.5	－	1ヶ所、包含層まで掘削	71
50	2002	25	CG41、CO34、 CF43、CO38	医病	エネルギーセンター棟新営その他 工事：外灯	1.47～1.66	－	4ヶ所、中世層まで掘削	71
51	2002	27	CV36～45	医病	エネルギーセンター棟新営その他 工事：外溝	0.9～1.9	0.9	中世の井戸・柱穴・溝	71
52	2002	36	BI～BS45～53	大医 菌	総合教育研究棟新営その他工事	1.85～2.0	0.8～1.0	5ヶ所、中世層まで掘削	71
53	2002	52	DC67	事	本部棟新営その他工事：植採移植	1.25	－	中世層	71
54	2002	56	BG18	医病	旧混合病棟クリーストラップ改修	1.68	－	底面で弥生～古墳層、土器小片	71
55	2003	5	BS～BZ45、CA～ CO46、CO45	医	総合教育研究棟新営その他工事 (屋外排水)	1.7	0.7～1.0	弥生中期?包含層まで掘削、近世土坑・中 世ビット多数、低地部確認	74
56	2003	9	BL～BS45～53	医	総合教育研究棟外構工事 (雨水・汚水・実験排水)	0.8～1.75	0.7～0.9	弥生中期包含層まで掘削した箇所あり、 古墳時代溝、中世井戸、近世土坑等を確 認	74
57	2003	10	BR～BS50～54	医	総合教育研究棟給水配管埋設工事	1.33	0.8	一部で中世層確認	74
58	2003	13	BR53、BL54	医	総合教育研究棟外構工事（外灯）	1.4	0.8	中世層まで掘削	74
60	2004	3	AF16、AF～ AJ17、AJ9～16	医病	医病構内支障ガス配管替工事	1.0～1.9	0.7～0.8	接続部で近世～近代の水田層、中世の畦 畔を確認。弥生～古墳の河道と推定され る砂層を確認。	81
61	2004	5	AE4～16、AF～ AI16、AI9～15、 AJ～AO09	医病	医病構内支障給水管配管替工事	0.9～1.9	0.85	櫛で中世?～近代の畦畔確認。弥生～古 墳の河道と推定される砂層を確認。	81
62	2005	3	DH～DJ18、DJ19	医	医学部変電所ビット周辺高圧ケー ブル設置工事	1.1～2.5	0.7～1.1	一部で弥生～近代層確認	83
63	2006	6	CT～CU45	医病	エネルギーセンター棟新営に伴う 工事	2.5	0.9	鹿田第12次調査地点と重複、同様の状況	88
67	2007	4	CCI3～20、 CD13～20	医病	基幹環境整備（道路等）工事	1.2～2.2	0.9～1.2	基盤層まで掘削、中世東西・南北溝確認	92
68	2007	5	AS03～07、AV～ AX07、AY・BB09	医病	中診療屋上防水改修その他工事	0.6～0.9、1.4、1.8	0.7	ガス管1：GL-1.8m、中世東西溝、古墳 時代南北溝確認	92
69	2007	7	BT11	医病	中央診療棟新営工事 ：ガス管切断工事	1.28	0.5	中世溝埋土確認	92
70	2007	10	CO42、CV36	医病	基幹整備（電気設備）工事	1.3～1.65	1.3	中世層まで掘削、遺構埋土確認	92
71	2007	11	CG08、CF09・10、 CG・CH11、CH11	医病	環境整備（道路等）工事 ：ガス配管1	0.85～1.3	0.9	GL-0.85～1.3m、中世井戸（または墓）・ ビットなど確認、GL-1.0～1.3m、中世 溝・ビット確認	92
72	2007	17	CL12、CMI3、 CN14・15	医病	環境整備（道路等）工事 ：ガス配管2	1.0～1.2	0.4	中世層、中世遺構埋土確認	92
73	2007	27	BT・BU65	医	総合研究棟（医学系）新営その他 工事	1.35	1.0	中世層確認	92
74	2007	28	CJ7～CP12	医病	用水路改修工事	1.7～2.0	0.6～0.8	包含層及び枝川東側で微高地確認	92
75	2007	30	BE33	医病	高エネルギー治療室改修工事	1.4	0.6～0.7	中世～近代の畦畔・溝確認、弥生後期土 器出土	92

<東山地区>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
1	1983	13	－	教育	附属中学校新営	4.0～5.0	－	シルト層中	1
2	1997	29	－	教育	附属小・中学校他四階改修工事	1.2	0.79	GL-1.1mで近世水田層、溝1条	50

<三朝地区：福呂遺跡>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
4	1997	18	－	固	実験研究棟新営に伴う電気埋設管 路工事	1.0	－	GL-1.0mで中世包含層は東に向かい土 昇	50

付表3 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要(2008年度現在)

所属	種類	調査名・地区名	箱 数 (1箱:約30リットル)							備考 (主要時期・特殊遺物)	文献
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	サンプル*		
医病	発掘	鹿田第1次調査(外来診療棟)	598	493	15.5	60	0.5	1	28	弥生中期～中・近世、木製短甲・人面線刻土器・ガラス滓等	7
〃	〃	鹿田第2次調査(NMR-CT室)	118.9	94	0.4	20	0.5		4	弥生後期～中世、田舟・木簡等	〃
医短	〃	鹿田第3次調査(校舎)	131.6	36	0.3	90	0.3		5	古代～中世、石帯	10
〃	〃	鹿田第4次調査(配管)	3.5	2	0.3		0.2		1	古代、鹿角製品	〃
医病	〃	鹿田第5次調査(管理棟)	130	87	2.5	20	1.5		19	弥生後期～中・近世	24
ア	〃	鹿田第6次調査 (アイソトープ総合センター)	62	59	0.5	1	1.5			中世、青銅製碗	40
医	〃	鹿田第7次調査(基礎医学棟)	81	66		10		1	4	弥生～近世、猿形木製品	53
医	〃	鹿田第8次調査(RI治療棟)	8	8						弥生～中世	53
医病	〃	鹿田第9次調査(病棟Ⅰ期)	120.1	96	0.1	13		9	2	弥生～近世、木簡3点	56
医病	〃	鹿田第10次調査(共同溝)	2	2						古代～近世	56
医病	〃	鹿田第11次調査(病棟Ⅰ期)	74	66		4		2	2	弥生～近世、木簡1点	56
医	〃	鹿田第12次調査 (エネルギーセンター)	147	77	1	54			15	弥生～近世、櫛	61
医病	〃	鹿田第13次調査(総合教育研究棟)	254	211	5	10			28	弥生～近世	71
医病	〃	鹿田第14次調査(病棟Ⅱ期)	66	54		3			9	中世～近世	74
医	〃	鹿田第15次調査 (総合教育研究棟関連)	4	4						古墳初頭・中世	74
医病	〃	鹿田第16次調査 (立体駐車場エレベーター他)	1	1						弥生～近世	81
医	〃	鹿田第17次調査 (総合研究棟(医学系))	111	68	4	8		1	30	弥生～近世	87
医病	〃	鹿田第18次調査(中央診療棟関連)	184	116	19	18			31	弥生～近世	92
医病	〃	鹿田第19次調査(歯学部渡り廊下)	375	136	1	4			234	弥生後期～近世、壺棺、線刻土器、蹄脚硯	本紀要
全	〃	津島岡大第1次調査(NP-1)	5	0.5	0.5	4				弥生中期～古代	3
農	〃	津島岡大第2次調査 (農学部合併処理槽・配管)	17.5	12	1.5				4	弥生早期～弥生前期	4
学生	〃	津島岡大第3次調査(男子学生寮)	67	49	1.5	2	4.5		10	縄文後期～古墳初頭、古代～近世 石製指輪、蛇頭状土器片	19
〃	〃	津島岡大第4次調査(屋内運動場)	1	1						弥生早期～弥生前期<試掘調査遺物を含む>	6
大自	〃	津島岡大第5次調査 (大学院自然科学研究科棟)	82	68	3	1	8		2	縄文後期～古墳、古代～近世、耳 栓・木製櫛(縄文)、堅果類	27
工	〃	津島岡大第6次調査 (生物応用工学科棟)	49	33	1	9	6			縄文後期～近世、人形木器、アン ペラ、人形土製品	35
工	〃	津島岡大第7次調査 (情報工学科棟)	31.5	10	0.5	1			20	縄文後期～近世	35
全	〃	津島岡大第8次調査 (遺伝子実験施設)	11.5	10	0.5				1	縄文後期～近世	32
工	〃	津島岡大第9次調査 (生体機能応用工学科)	50.5	30	2.5	3			15	縄文後期～近世	47
全	〃	津島岡大第10次調査 (保健管理センター)	87	78		7			2	弥生前期～近世	65
〃	〃	津島岡大第11次調査 (総合情報処理センター)	5.5	3	0.5				2	縄文後期～近世	36
〃	〃	津島岡大第12次調査(図書館)	55	24	1	20			10	縄文後期～近世	65
〃	〃	津島岡大第13次調査 (福利厚生施設北)	12.5	12	0.5					縄文後期・古墳前期・中世	41
〃	〃	津島岡大第14次調査 (福利厚生施設南)	13	12					1	弥生～古墳	46
〃	〃	津島岡大第15次調査 (サテライトベンチャービジネスラ ボラトリー)	68	14	10	20			24	縄文後期～中世、縄文後期・弥生 早期遺物、アンペラ、堅果類	72
農業	〃	津島岡大第16次調査(動物実験棟)	0.3	0.3						縄文後期・弥生～中世	44
環	〃	津島岡大第17次調査 (環境理工学部校舎Ⅰ期)	85	62	11				12	縄文後期～近世	77
全	〃	津島岡大第18次調査 (南福利ポンプ槽)	1	1						縄文後期～近世	53
理	〃	津島岡大第19次調査 (コラボレーション・センター)	31	21	1	4		2	3	縄文後期～近世	64
環	〃	津島岡大第20次調査 (環境理工学部ポンプ槽)	1	1						縄文後期～近世	53
工	〃	津島岡大第21次調査 (工学部エレベーター)	7	5	2					縄文中期～近世	64
環	〃	津島岡大第22次調査 (環境理工学部校舎Ⅱ期)	37	26	4	3		1	3	縄文後期～近世、古代埴部材、曲 げ物	77
文法経	〃	津島岡大第23次調査(総合研究棟)	90.5	20	0.5	60	2		8	縄文後期～近世、杭(縄文)、石棒	80
文法経	〃	津島岡大第24次調査 (総合研究棟渡り廊下)	2.1	1	0.1	1				縄文後期～近世、杭(縄文)	80
農	〃	津島岡大第25次調査 (農学部散水施設)	0.3	0.1		0.2				中・近世	61
事	〃	津島岡大遺跡第26次調査 (事務局本部棟)	33	17		5		1	10	縄文後期～近世	76

所属	種類	調査名・地区名	箱 数 (1箱:約30リットル)							備考 (主要時期・特殊遺物)	文献
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	サンプル*		
事	発掘	津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館)	15	14	1					縄文中期～近世	68
工	〃	津島岡大遺跡第28次調査 (自然科学系総合研究棟)	17	15	2					縄文後期～近世	71
農	〃	津島岡大遺跡第29次調査 (農学部共同溝)	2.1	2	0.1					縄文後期～近世	71
イ	〃	津島岡大遺跡第30次調査 (岡山大インキュベータ)	37.2	15	0.1	18			4.1	縄文後期～近世	93
生	〃	津島岡大第31次調査 (福利厚生施設東棟)	8	6	1				1	縄文後期～近世	本紀要
固	〃	福呂遺跡第1次調査(実験研究棟)	9	8					1	縄文早期・弥生中期・中世	55
固	〃	福呂遺跡第2次調査 (実験研究棟スロープ)	2.1	2				0.1		中世～近世	55
医病	試掘 確認	鹿田(駐車場)	1	1						弥生～中世	5
学生	〃	津島北(男子学生寮)	1	0.7	0.3					縄文後期～弥生前期	〃
大自	〃	津島北(自然科学研究科棟)	1	1						縄文後期～弥生前期	6
事	〃	津島土生(外国人宿舍)	1	1						縄文～中世	8
理	〃	津島北(身障者用エレベーター)	0.3	0.3						中・近世	〃
教養	〃	津島南(身障者用エレベーター)	0.7	0.7						縄文・中世	〃
工	〃	津島北(校舎)	1	1						縄文～近世	11
農業	〃	津島南(動物・遺伝子実験施設)	0.7	0.7						縄文～弥生、中・近世	〃
事	〃	津島南(国際交流会館)	0.3	0.3						中世	〃
大自	〃	津島北(合併処理槽)	0.2	0.2						中・近世	14
学生	〃	津島南(学生合宿所)	0.4	0.2					0.2	中世	〃
教育	〃	津島北(身障者用エレベータ)	0.3	0.3						縄文	〃
図	〃	津島北(図書館)	0.8	0.8						古墳～中世	〃
学生	〃	津島南(学生合宿所ボンブ槽)	0.4	0.4						縄文～中世	18
資生	〃	倉敷(資源生物科学研究所)	0.1	0.1						近世	〃
ア	〃	鹿田(アイントープ総合センター)	1	1						中世～近世	〃
事	〃	津島北(福利厚生施設)	0.5	0.5						弥生?～中世	〃
農	〃	津島南(動物実験施設)	0.1	0.1						縄文?～近世	33
環	〃	津島北(環境理工Ⅱ期)	0.1	0.1						—	53
工	〃	津島北(システム工学科棟)	0.1	0.1						—	53
教育	〃	東山(附属小学校校舎)	1.1	0.1					1		87
全	立会	83年度	2	2						分銅形土製品	1
〃	〃	84年度	1	1						—	2
〃	〃	85年度	1	1						—	3
〃	〃	86年度	0.5	0.5						—	6
〃	〃	87年度	0.5	0.5						—	8
	分布	89年度三朝・本島	0.3	0.3						—	14
全	立会	91年度92年度	0.3	0.3						—	21・25
〃	〃	93年度～99年度	0.8	0.8						—	30・33・ 38・44・ 50・53・ 56
〃	〃	00年度	3	3						—	61
〃	〃	02年度	8.5	2.5	6					弥生早期土器、中世、礎石	71
〃	〃	03年度	2	2						—	74
〃	〃	04年度	1	1						—	81
〃	〃	05年度	1.1	0.1					1	—	83
〃	〃	06年度	1.1	0.1					1	—	87
〃	〃	07年度	0.5	0.5						—	92
〃	〃	08年度	1	1						—	本紀要
総 箱 数			3442.4	2276.1	101.7	473.2	25	18.1	548.3		

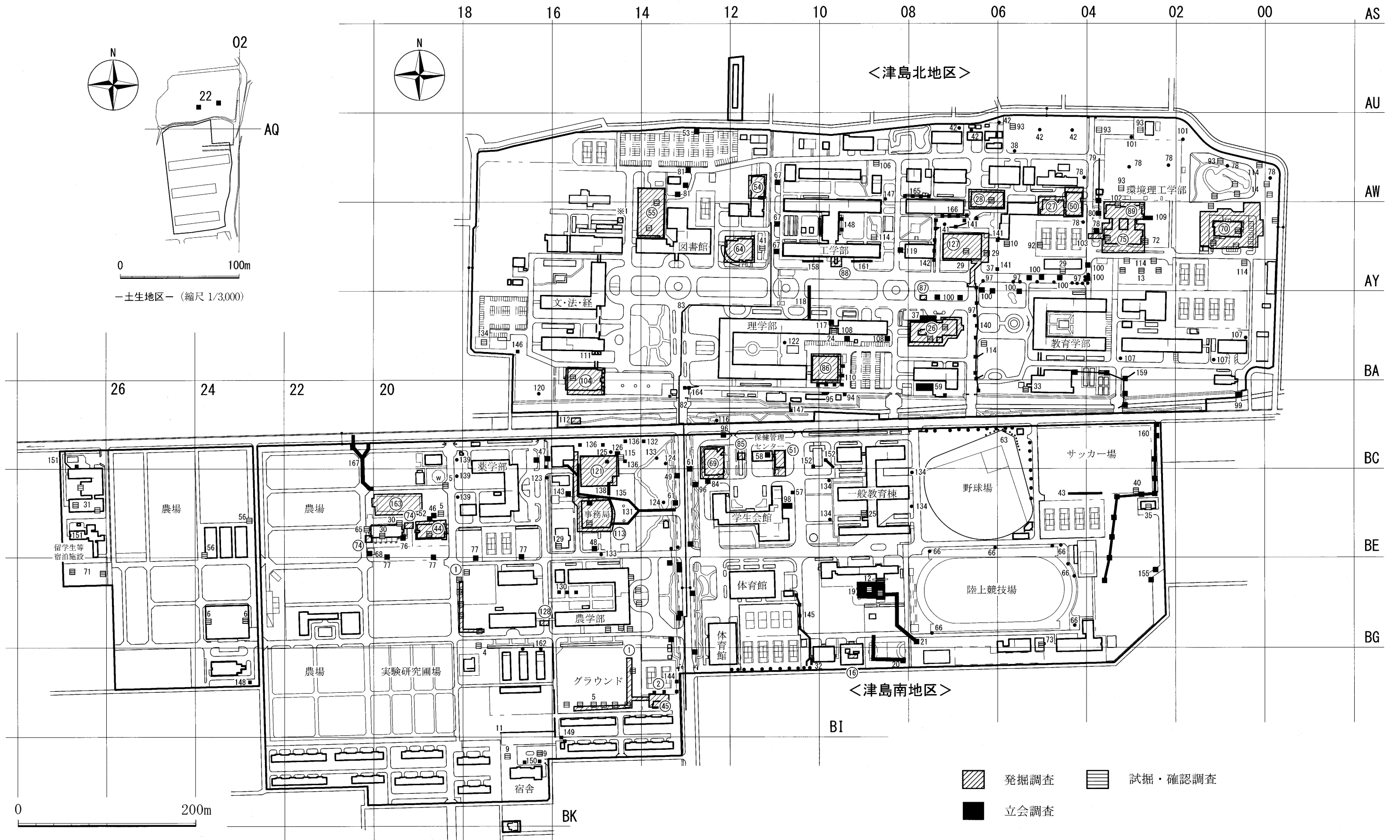
付表4 埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名	称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報 1	1983年度	1985年2月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報 2	1984年度	1985年3月
3	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集	1985年5月
4	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告Ⅱ(農学部構内BH13区他)	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第2冊	1986年3月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報 3	1985年度	1987年3月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報 4	1986年度	1987年10月

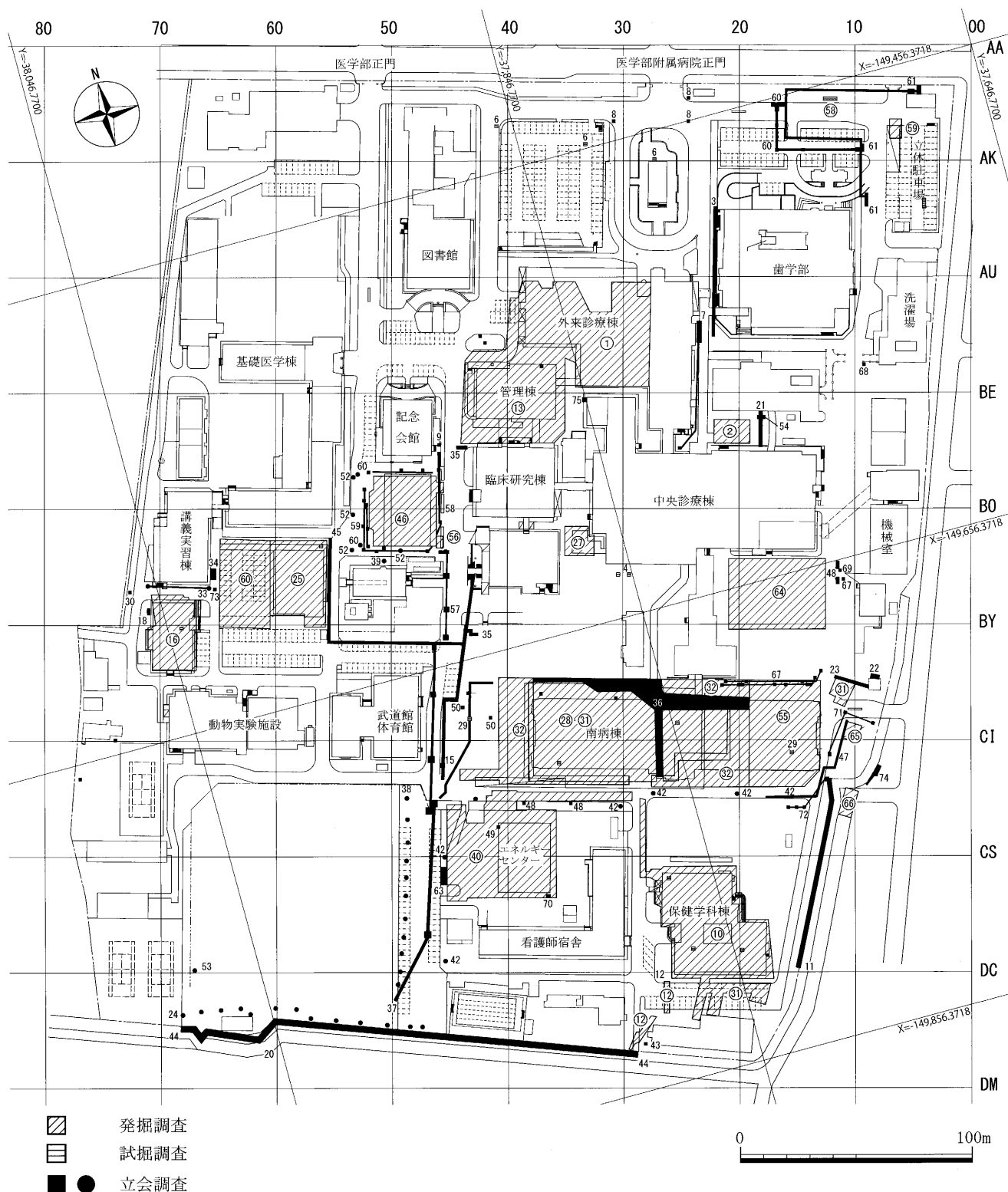
付表5 埋蔵文化財調査研究センター刊行物 (2008年3月末まで)

番号	名 称	発行年月日
7	鹿田遺跡Ⅰ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊	1988年3月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報5 1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第1号	1988年10月
10	鹿田遺跡Ⅱ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊	1990年3月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報6 1988年度	1989年10月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第2号	1989年8月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第3号	1990年2月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報7 1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第4号	1990年7月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第5号	1991年3月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第6号	1991年8月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報8 1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊	1992年3月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第7号	1992年3月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報9 1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第8号	1992年8月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第9号	1993年3月
24	鹿田遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊	1993年3月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報 10 1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第10号	1993年11月
27	津島岡大遺跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊	1994年3月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第11号	1994年3月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第12号	1994年10月
30	岡山大学構内遺跡調査研究年報 11 1993年度	1995年2月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第13号	1995年3月
32	津島岡大遺跡5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第8冊	1995年3月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報 12 1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第14号	1995年10月
35	津島岡大遺跡6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第9冊	1995年12月
36	津島岡大遺跡7 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第10冊	1996年2月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第15号	1996年3月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報 13 1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第16号	1996年10月
40	鹿田遺跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第11冊	1997年3月
41	津島岡大遺跡8 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第12冊	1997年3月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第17号	1997年3月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第18号	1997年9月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報 14 1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月
46	津島岡大遺跡9 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊	1997年12月
47	津島岡大遺跡10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊	1998年3月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第19号	1998年3月
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報 15 1997年度	1999年1月
51	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第21号	1999年3月
52	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第22号	1999年9月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報 16 1998年度	2000年1月
54	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第23号	2000年3月
55	福呂遺跡Ⅰ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第15冊	2000年3月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報 17 1999年度	2000年8月
57	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第24号	2000年9月
58	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第25号	2001年3月
60	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第26号	2001年8月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報 18 2000年度	2001年10月
62	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第27号	2002年3月
63	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第28号	2002年9月

番号	名 称	発行年月日
64	津島岡大遺跡11 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第16冊	2003年3月
65	津島岡大遺跡12 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第17冊	2003年3月
66	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2001	2003年3月
67	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第29号	2003年3月
68	津島岡大遺跡13 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第18冊	2003年5月
69	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第30号	2003年8月
70	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第31号	2004年2月
71	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2002	2004年3月
72	津島岡大遺跡14 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第19冊	2004年3月
73	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第32号	2004年9月
74	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2003	2004年12月
75	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第33号	2005年3月
76	津島岡大遺跡15 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第20冊	2005年3月
77	津島岡大遺跡16 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21冊	2005年3月
78	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第34号	2005年10月
79	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第35号	2006年3月
80	津島岡大遺跡17 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第22冊	2006年3月
81	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2004	2006年3月
82	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第36号	2006年10月
83	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2005	2007年3月
84	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第37号	2007年3月
85	鹿田遺跡5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第23冊	2007年3月
86	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第38号	2007年10月
87	津島岡大遺跡18 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第24冊	2008年3月
88	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2006	2008年3月
89	岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年 - 自然と人間、地中に埋もれた命の対話 -	2008年3月
90	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第39号	2008年3月
91	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第40号	2008年9月
92	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2007	2008年12月
93	津島岡大遺跡19 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第25冊	2009年3月
94	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第41号	2009年3月

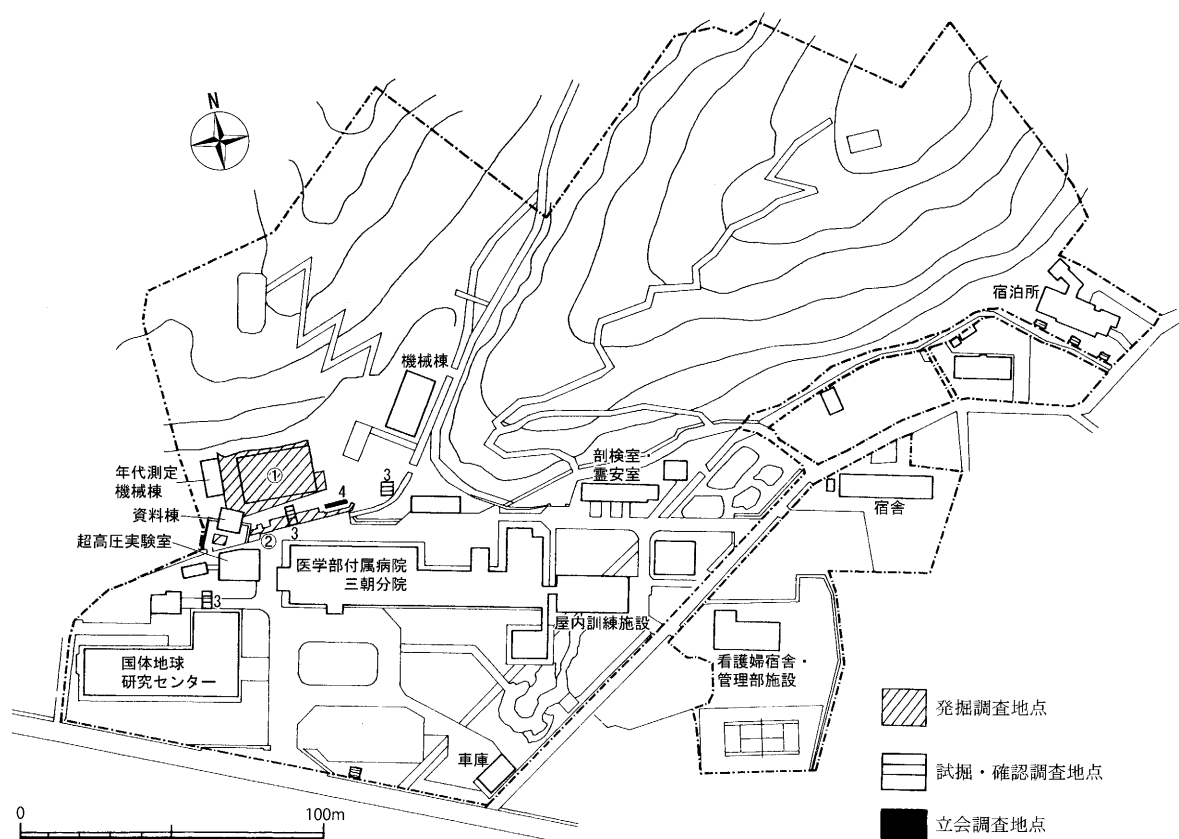


付図1 2007年度までの調査地点【1】一津島地区一 (縮尺 1/4,000)

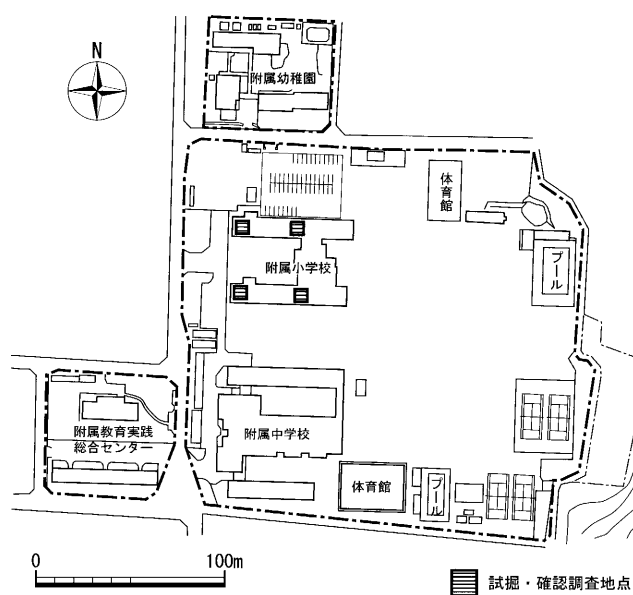


※番号は付表2の総合番号に対応する。

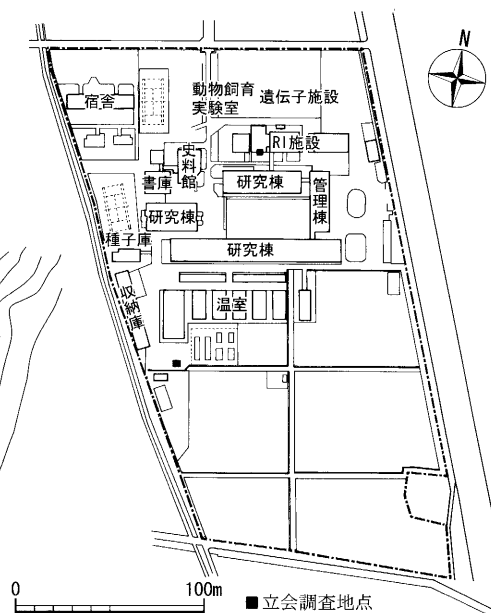
付図2 2007年度までの調査地点【2】—鹿田地区—（縮尺 1/2,500）



付図3 2007年度までの調査地点【3】
—三朝地区— (縮尺 1/2,500)



付図4 2007年度までの調査地点【4】
—東山地区— (縮尺 1/4,000)



付図5 2007年度までの調査地点【5】
—倉敷地区— (縮尺 1/4,000)

Copyright©Archaeological Research Center, Okayama University

Printed in Okayama, Japan

2010年2月26日 印刷

2010年2月26日 発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要
2008

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山市北区津島中三丁目1番1号

(086) 251-7290

印刷 友野印刷株式会社



**BULLETIN of
Archaeological Research Center
Okayama University
2008**

Archaeological Research Center, Okayama University
3-1-1 Tsushima-Naka Kita-ku Okayama-city, 700-8530 Japan
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>